

I あいさつ



NIEの充実した活動と更なる発展を願って

宮城県NIE委員会

会長 桂島 晃

(塩竈市立第一中学校長)

本県のNIEの活動は、本年度で29年目を迎えました。長きにわたり、教育現場と地元新聞社・全国紙・通信社等が一体となり、新聞教材の開発と活用の研究及び普及を通して、情報活用能力の育成を図り、大きな成果を上げております。

本年度も活動の集大成としてNIE実践報告書第29号が関係の皆様のご協力により発刊することができました。心から感謝を申し上げます。

さて、本年度の宮城県NIE研究大会は、11月8日、日本新聞協会実践指定校である仙台城南高等学校を会場に開催されました。仙台城南高等学校ではICT教育にも力を入れており、新聞記事に対する生徒の意見・考えをシェアしながら解決策をまとめプレゼンテーションしたり、各自のタブレットで互いの意見の閲覧や意見交換をしたりするなど、メディアリテラシーを養い共に学び合う集団づくりに取り組んでおります。「NIEとICTの融合」ともいうべき先進的な取組は高い評価を受けております。」

今年3月に新学習指導要領が文部科学省告示として公示されました。今回の改訂では、社会が加速度を増して変化していく中で、これから学んでいく子どもたちが大人になる2030年頃の社会の在り方を見据えながら、どのように知・徳・体にわたる生きる力を育むのかを重要視しています。新しい時代に必要となる資質・能力として、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性」「生きて働く知識・技能」「未知の状況に

も対応できる思考力・判断力・表現力等」が掲げられております。このことを踏まえ、全ての教科の指導方針を示す学習指導要領総則に、「情報を活用する力を高めるために新聞を含む多様な資料を生かす。」という内容が盛り込まれております。新学習指導要領の理念を実現する上で、NIEが果たしうる役割は、今後ますます大きくなるものと捉えております。

河北新報社創業者である一力健次郎氏は、「白河以北一山百文」という東北を軽く見る言葉に対し、それをはね返そうという思いを社名に込めたと聞いております。明治30年の創刊号には、ご自分の考えを三つ述べられております。「一つ、正しく、自由公正な新聞をつくる。」「二つ、人物、文化、産業を開発し、東北地方の発展に尽くす。」「三つ、市民の味方となり、悪い習わしをなくして人々を大切にする。」というものでした。まさにNIEが目的とする「社会性豊かな青少年の育成」、「活字文化と民主主義社会の発展」と重なるものがあるというふうに捉えております。また、世の中は毎日活動しているのだから、新聞は一日たりとも休んではならぬとして、明治33年から昭和5年までの30年間、一日も休まずに発行し続けたそうです。このような氏の高き志が、NIEの活動にも反映されているように思います。

結びに、本県NIEの充実した活動と更なる発展を祈念しますとともに、これまでの活動に対する関係各位の皆様からのご協力とご支援に心より感謝を申し上げます。



これからのN I E

宮城県N I E推進委員会

委員長 小石俊聡

(仙台市立住吉台小学校長)

昨年度の『N I E実践報告書』で、武田真一副会長が次のように述べています。

「教育現場は新聞社をもっと活用する、新聞社は教育現場に積極的に活用メニューを提示していく。その相互交流がN I Eの未来を開く鍵になる」。(注1)

私も、全く同感です。新聞記事を、授業でどのように活用していくのかという研究は、これまで数々の実践が行われてきました。その結果、大きな成果が得られていることは事実です。

もちろん、現状に甘んじることなく、より質の高い授業作りを目指していくことを忘れてはなりません。しかし、これから力を入れるべきことは、やはり学校現場の新聞社の利用です。このことを、次年度以降の指針として、研究を進めていくことが必要なのではないかと考えています。

「皆さん、勇気を持って新聞社にもっとアクセスしてみてください。こちらにはそれなりの構えはすでにできています。あとは教育現場の意欲一つ。」(注2)

まずは、私たち委員一人一人が、勇気を持ちましょう。

そして、そこで実感した素晴らしさを、県内各地の学校や先生方に伝え広めていきましょう。私たちの意欲を大いに発揮するときです。

これらが、私たちに今、求められていることの一つだと思います。

もう一つは、新聞そのものの利用の仕方についてです。

昨年6月27日の河北新報に「『一人1部』活用広がる」という見出しの記事が掲載されました。そこで紹介された、仙台市立片平丁小学校の見出し付けの実践も、柴田町立船岡小学校の読み比べの実践も、子どもたちが自分の興味・関心に基づいて記事を探したり、読んだりしたということに特徴があります。

これが実現できた最大の理由は、一人1部ずつ本物の新聞を手にしたからです。

現在、新聞を購読している家庭は減少しています。こうした中、以前のように「家から新聞を持ってきて」という指示も出せません。

本物の新聞に触れたことがない子がいても、珍しくない時代です。「新聞をめくる」という、昔なら当たり前の行為にさえ、新鮮さを感じる子どもたち。こんな子どもたちだからこそ、あえて体験させたいと思います。小学校ばかりでなく、中学校や高等学校での実践が増えることを、願わずにはられません。

新聞は、次期学習指導要領の柱の一つ「主体的・対話的で深い学び」を実現するための強力な手立てであることに、異論を唱える人はいないでしょう。私たちは自信を持って、これからも研究を進めていくべきです。

結びとなりますが、N I Eの更なる普及・発展を祈念すると共に、これまでご指導・ご支援をいただきました事務局並びに関係各位の皆様には厚く御礼を申し上げます。

※(注1・2)『N I E実践報告書第28号』p 3

「教育に新聞を」より

II 寄稿



新聞は何を伝えているか

宮城県N I E委員会

副会長 武田 真一

(河北新報社 防災・教育室長)

「新聞は何を伝えている媒体か、一言で言い表しなさい」。そんな質問を突きつけられたら、皆さんはどう答えますか。

答えは多様で無限にありそうですから「一言で」となるとなかなかの難問になるでしょう。わたしも業界に身を置くようになって30有余年、あれこれと考え続けてきましたが、うまく答え切れていませんでした。

ようやく最近になって自分なりの「答え方」が見つかりました。新聞とは「人の生き死に」を共有するプラットフォームである。東日本大震災を経た今、そのように考えています。

われわれの年代になると、新聞をめくって最初に確認するのが、訃報の記事や広告です。企業の方々は取引先に義理を欠かさぬよう訃報のチェックが必須の仕事です。一般の市民でも、地域で縁のある人が亡くなったことを知る手がかりとして訃報は大切な情報源です。義理はなくても、どこの誰が何歳で亡くなったのか、葬儀の持ち方はどうか、などに目を通し、わが身を重ね、故人の来し方に思いを寄せることはよくあることです。

世の中のニュースを扱う一般の記事でも死は最も基本的で大切なテーマです。事件や事故や災害やテロの犠牲を伝える記事はもちろん、著名人やタレントの逝去を伝える記事は大きく扱われます。どういう人がどんな人生を歩み、どんな死に方をしたか。死は常に歩んだ生とセットで紹介され、記事を通じて読者はその人の「生き死に」とその人にまつわる世界の盛衰や行く末を共有します。

日々繰り返される死の背景と生の成り立ちに思いを深めることを起点に社会のありようを深く考えていく。政治や経済や科学や文化の記事も、突き詰めるとすべて「生き死に」

に関わることと言えるかもしれません。ジャーナリスティックな命題はすべて「生き死に」の共有から始まる。そう整理しています。

さて教育です。学校は何を教え育てているのか。これもまた一言で言い表すのは至難の業でしょう。門外漢の立場で無遠慮に答えるなら、それは「生きる力」「ともに生き抜く覚悟」と集約できるような気がします。

算数も国語も社会も理科も、ましてや体育や道徳は、すべてこの世を生き抜くための素養です。人間は一人で生きることはできないので、ともに生き抜く覚悟を確かめる。教科以外のさまざまな活動も含めて学校生活はそのためにこそある、と言えるのではないのでしょうか。言い換えるなら、みんながより良く生きるために力を合わせ、悲惨な無念の死を避ける。戦争回避や災害対応、病気予防はその象徴であり、まさに「生き死に」に関わることこそ教育現場の最大の命題でしょう。

やや強引に論を進めてしまいましたが、新聞も学校も追求している命題はまったく同じではないか。それが言いたいことです。

新聞に親しむことは、考える力、表現する力を向上させ、学力のアップに着実につながる。N I Eの普及推進で最近とみに強調されているのは「学習効果」です。関心を高めるための必須の看板と理解しつつも、どうも利益誘導型のおいがつきまといます。

人の「生き死に」を伝える新聞は、教育現場が目指す「生きる力」「ともに生き抜く覚悟」の育成に不可欠であり、N I E運動こそは扱う命題が同じ新聞と教育現場の必然的な連携の方向性を確かめる土台である。

そのようなとらえ方も、一方で押さえておくと、幅が広がるように思うこの頃です。

Ⅲ 研究実践報告

1 実践指定校報告

(1) 柴田町立船岡小学校(平成28・29年度実践指定校)

新聞に興味を持ち、進んで活用する児童の育成を目指して

～ 船岡小NIEモデルの推進を通して ～

1 はじめに

近年児童を取り巻く環境は大きく変わってきており、児童が活字に親しむ機会が少なくなりつつある。

実際に、本校では新聞を購読している家庭が約57%で、研究で取り組む以前は、新聞を読んだことがない児童が約18%いた。

児童の学習面では、国語科における文章を読み取る力に課題があった。文章を読む習慣を身に付け、的確に文章を読み取る力を高める必要があり、新聞はその手助けとなる教材になると考えた。

さらに、生活面では、児童はテレビやインターネットなどの情報に頼る傾向があり、TVタレントなどのセンセーショナルな情報は知っているが、世界の情勢や政界、経済界の動向、地域の情報には関心を持たないという情報の偏りがうかがえた。情報のバランス、情報モラル、情報リテラシーという観点からも新聞は有効な教材である。

そのような状況を踏まえ、「新聞に興味を持ち、進んで活用する児童の育成を目指して～船岡小NIEモデルの推進を通して～」という研究テーマを設定して、平成28年度・29年度で取り組むことにした。

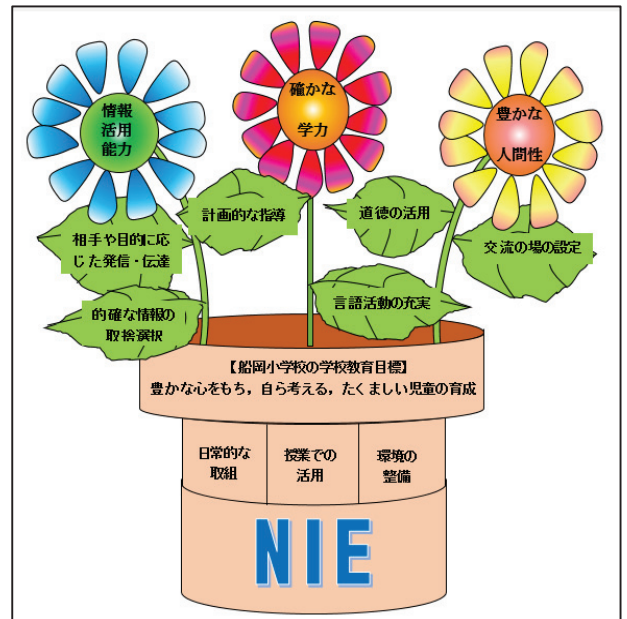
2 研究の視点

「船岡小NIEモデル」(【図1】)にあるように、NIEを「授業での活用」「日常的な取組」「環境の整備」の三つの視点で取り組み、児童一人一人の「確かな学力」「情報活用能力」「豊かな人間性」を伸張することを目指している。

三つの視点を柱にして積み重ねてきた実践例の一部を紹介したい。

<研究の視点>

- (1) 日常的な取組
 - ・日常生活において、児童が新聞に興味を持って取り組める活動の在り方を探る。
- (2) 授業での活用
 - ・授業で効果的な新聞の活用の仕方を探る。
- (3) 環境の整備
 - ・児童が新聞に興味を持ち、新聞を活用しやすい環境の整備の在り方について探る。はじめ



【図1】 船岡小NIEモデル

3 実践内容

(1) 日常的な取組

① 新聞記事の切り抜き活動



【写真1】 6年生の「新聞記事を切り抜こう」

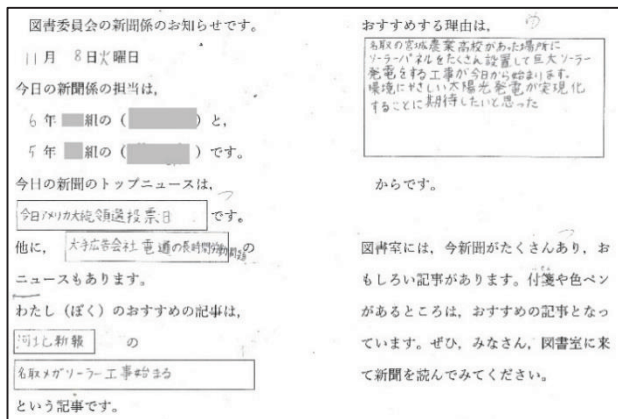
「お気に入りの写真」というワークシート（『NIE実践報告書』第28号を参照）を使い、気に入った新聞記事の写真を切り抜いて紹介する活動を行った。児童にとって新聞記事の写真は一目で分かりやすく、記事に書いてあることに興味を持つきっかけとなる。新聞記事に興味を持たせるための導入となるワークシートであり、朝の活動や家庭学習で取り組ませた。

「お気に入りの写真」で新聞記事に慣れた児童は、「新聞記事を切り抜こう」（【写真1】）のワークシートを使って、新聞記事を紹介する活動を行った。

児童が興味を持った新聞記事をこのワークシートに貼り、その記事について感想を書いて友達に紹介する活動を行った。こうした活動を通して、児童は新聞に興味を持つようになり、児童同士で時事的なニュースを話題にして会話する様子が多く見られるようになった。

② 委員会活動の取組

委員会活動でもNIEに関わった取組をしている。



【写真2】図書委員会の放送原稿

例えば、図書委員会では、図書室で児童が6社の新聞を自由に閲覧できるように並べている。さらにお勧めの記事を選んで、原稿（【写真2】）を作り、昼の放送でその記事の内容を伝える活動を行っている。



【写真3】PR委員会が作成した壁新聞

また、PR委員会では、実際の新聞を参考にして壁新聞を定期的に発行している（【写真3】）。

(2) 授業での活用

① 2年生の実践例

低学年の児童は、読める漢字が少なく、語彙の数も多くない。また、低学年の各教科等においても新聞に関連する内容の単元がほとんど見られないので、低学年でNIEを実践することは容易ではない。

そこで、まずは低学年の児童が新聞に親しめるようにするために、「朝日小学生新聞」や「毎日小学生新聞」を購読するようにした。これらの新聞は、小学生新聞なので、漢字には必ずふりがなが付いており、記事に習っていない漢字があっても低学年が読むことができる。また、二つの小学生新聞は、記事に使われる言葉が平易であり、時事用語には小学生向けの解説があるので、低学年だけでなく、活字に親しむ習慣がない児童にとって活用しやすい新聞である。

2年生の実践例では、国語科で「新聞を読んでみよう」を設定し、小学生新聞を使って、友達にお気に入りの記事を紹介する活動を行った。

児童に新聞を読ませる時間を十分に与えて、気に入った新聞記事をはさみで切り抜きさせた。切り抜いた記事はクリアファイルに入れ、いくつもある中から一番のお気に入りの記事を友達に口頭で紹介するようにした。

低学年の児童でも、1単位時間で十分活動することができ、切り抜いた記事を通して児童が相互に交流して新聞の面白さを味わう様子が見られた。



【写真4】新聞を切り抜く2年生

② 3年生の実践例

4年生の国語科で、単元「みんなで新聞を作ろう」（東京書籍）があり、3年生ではそれに先立って毎年3学期に新聞を作る学習を行っている。

河北新報船岡販売所の方をゲストティーチャーとして招いて授業を行った。

授業では、まず児童が新聞を読んで、興味のある新聞記事を探して、新聞記事を切り抜く。その後、グループの中で、それぞれ自分が切り抜いた新聞記事を紹介し合う。紹介が一通り終わった後、グループで新聞名やテーマについて話し合い、それに基づいて切り抜いた新聞記事を下地の用紙に割付を考えながら貼って新聞を作成するというものである。

お気に入りの新聞記事を貼るだけの作業なので、3年生の児童でも興味を持って容易に取り組める活動であり、貼り付けるだけでなく、グループの中で新聞記事からテーマを決めることを通して児童の思考を深める活動となった。



【写真5】作成した新聞を発表する3年生

③ 4年生の実践例

4年生の国語科には、単元「目的や形式に合わせて書こう」（東京書籍）がある。単元のねらいは、「目的や形式に合わせて、書き方を工夫して書く」である。

新聞の記事には、出来事を伝える文章や意見文など様々な文種があり、新聞を使うことによって、伝える目的や書き方の工夫に気付かせることができると考えた。

授業では、まず一つの新聞記事から伝える目的や書き方の工夫があることに気付かせた後、「新聞記事釣り堀」の活動を行った。「新聞記事釣り堀」は、まずフラフープの中を釣り堀と見立てて、児童が気に入った記事や面白そうな記事を切り抜いて釣り堀に放流する。次に、児童が釣り堀から新聞記事を釣る。そして、釣り上げた記事を読み、分かったこと、考えたことを書く。最後に、グループ内で釣り上げた記事について発表し合うという内容である。

釣り堀という場の設定にしたことで、児童は楽しみながら、友達が選んだ記事を偶然的に釣って、その記事が伝えようとしている目的や書き方の工夫を考えることが

できた。場や活動の工夫をすることによって、児童の意欲を高めることができることを示す実践である。



【写真6】新聞釣り堀を楽しむ4年生

また、4年生では、国語科で単元「みんなで新聞を作ろう」（東京書籍）があり、その学習を生かして積極的に壁新聞の制作に取り組んでいる。

社会科で、交番や消防署を見学して学んだことを模造紙に新聞形式でまとめて書く活動を行った。他教科でも、割り付けの仕方や目的意識や相手意識を明確にしながら文章を書くこと、正しい文章にするために推敲するなど、新聞の書き方の工夫を身に付けて、新聞を作るようになってきている。



【写真7】4年生が作った壁新聞

④ 5年生の実践例

5年生の国語科で単元「書き手の意図を考えながら新聞を読もう」（東京書籍）がある。昨年度も実際の新聞を使って学習に活用したが、今年は2種類の新聞を使って比較して読む活動を行った。

授業のねらいは、「見出し」「リード」「本文」「写真・キャプション」などの新聞記事についての基礎的な用語とそれらの意味を理解するとともに、二つの新聞記事を読み比べて、それぞれの書き手の意図の違いを考えることである。

昨年度は、実際に河北新報を使って、基本用語等の知識を習得したが、新聞記事の読み比べについては教科書を使って学習した。

今年度は、新聞記事の読み比べも実際の新聞を使って行った。実際の新聞を使うことで、実生活においても書き手の意図によって文章内容が異なっていることに気付かせるようにした。

授業では、河北新報と北海道新聞の二つの新聞を用意した。北海道新聞社は、河北新報社と提携があり、河北新報社内での防災・教育室を通じて特別な計らいで北海道新聞の提供を受けることができた。

初めは、二つの新聞を自由に読み比べるようにしたが、スポーツ面において、同じプロ野球の試合で、河北新報は東北楽天ゴールデンイーグルスの記事を大きく扱っており、応援している主旨の見出しであるのに対して、北海道新聞では北海道日本ハムファイターズの記事が大きく取り上げられ、対照的な内容になっていることに、児童はすぐに気が付くことができた。

その後、教科書の二つの新聞記事の違いについて、意欲的に読み比べる動機付けになり、児童は楽しみながら充実した学習を進めることができた。



【写真8】新聞を読んで考える5年生の児童

また、5年生では、社会科の授業と学年PTA親子

行事を関連付けた取組を行った。

5年生の社会科に単元「情報産業とわたしたちの暮らし」（東京書籍）があり、情報産業の発展に関心を持ち、情報産業を通じた情報の有効な活用が大切であることを理解するとともに、情報の有効な活用の仕方について学習する。この単元では、テレビ局や新聞社がどのように情報を収集し、自分たちの生活に情報を提供しているのかという具体的な流れが、児童にとっては資料だけでは実感が持てず理解が深まらない傾向がある。

一方、年1回行われる学年PTA親子行事では、これまで、ミニ運動会やドッジビー大会、物作り体験などの体を動かす内容が多く、親子で学ぶことができる内容を検討していた。

そこで、社会科の学習と学年PTA親子行事を関連付けて行い、それぞれの内容を充実させることを試みた。

外部講師として、河北新報社から講師を招き、体育館で5年生の児童と保護者が一堂に集まって、新聞を使った活動を行った。活動は、全員が同じ新聞を使いながら、講師が指定した新聞記事を親子で探したり、新聞の基本的な読み方や新聞が発行されるまでの流れ等についての講義を聞いたりする、といった内容を行った。

講師の専門性が生かされて学習の効果を高めることができた。また、各家庭にとって新聞のよさを改めて知る機会となり、充実した活動内容となった。



【写真9】新聞を読む5年生の児童と保護者

(3) 環境の整備

新聞を自由に読むことができるように環境を工夫することで、新聞に興味を持ち、新聞に主体的に関わって活用しようとする態度が養われると考える。

児童が自由に新聞を閲覧できる場として図書室と掲示板のNIEコーナーの前の2か所を設定した。

図書室では、朝日新聞、河北新報、産経新聞、日本経済新聞、毎日新聞、読売新聞の6紙の他に、朝日小学生

新聞、毎日小学生新聞の小学生新聞の2紙を自由に閲覧できるようにしている。

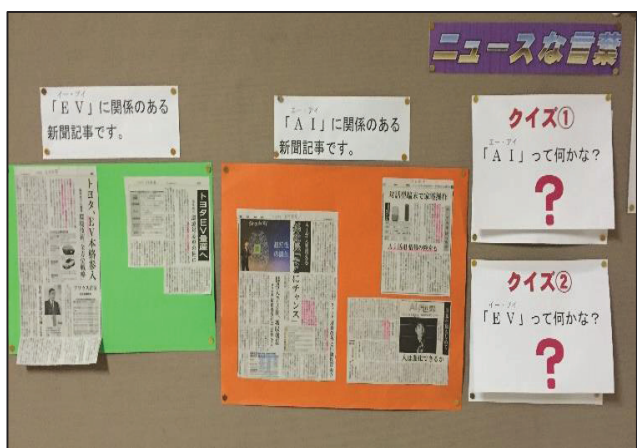
図書室の閲覧コーナーでは、新聞を自由に見るだけでなく、発行日から3日以上経過したものはスクラップしてもよいということになっており、児童が記事に興味を持った場合や授業で活用したい場合は自由に活用できるようにしている。



【写真10】図書室の新聞閲覧コーナー

廊下の掲示板の一つをNIEコーナーとした。新聞2紙（河北新報と朝日小学生新聞）を置いて自由に閲覧できるようにするとともに、興味を引くように新聞記事や児童が新聞をスクラップした作品を掲示した。

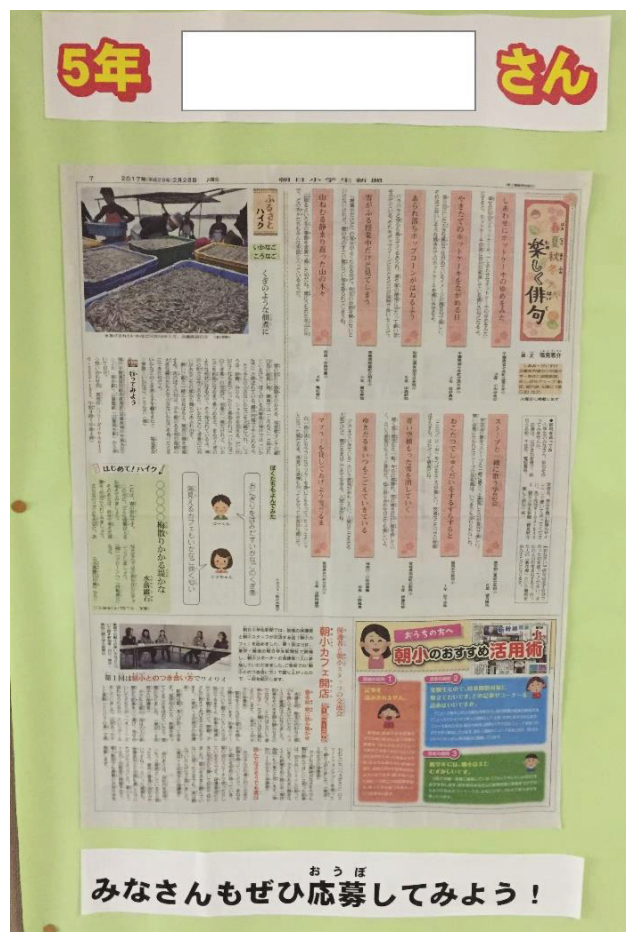
新聞記事の掲示の仕方については、新聞記事を画用紙で覆って隠し、画用紙の表にはクイズで質問を投げ掛けるように工夫した。質問の画用紙をめくると、新聞記事がクイズの解答の役割を果たすようになっており、画用紙をめくって記事を読まないと答えが分からないようにした。こうした工夫によって、児童がNIEコーナーの前で立ち止まって新聞を読む姿が多く見られるようになり、クイズについても児童が集まって考えている様子が多く見られるようになった。



【写真11】NIEコーナーの記事やクイズ

また、NIEコーナーでは、新聞への投稿を応募することも呼び掛けて興味を高めるようにした。

例えば、朝日小学生新聞に「春夏秋冬楽しく俳句」（毎週火曜日）というコーナーがある。そこで、NIEコーナーに、応募用紙を置いておき、児童が作った俳句を自由に応募できるようにした。朝日小学生新聞で、度々本校児童の作品が掲載されると、多くの児童が投稿するようになり、投稿することを通じて、新聞により一層興味を持つようになった。



【写真12】児童の俳句が掲載された新聞

4 成果と課題

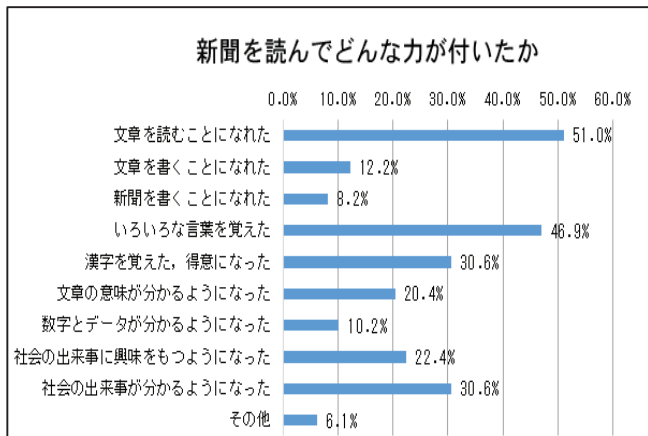
(1) 成果

① 新聞に親しみ、活用する児童の増加

新聞についてのアンケートを4～6年生を対象に行なった。

「新聞を読むのが好き」という児童が74.6%おり、実践前より7.4ポイント増えた。新聞を日常的に活用したことで、新聞に興味が高まってきていることが分かる。

NIEの実践によって、児童はどんな効果を実感しているかについては、アンケートから次のような結果となった。



【図2】児童アンケートの結果の一部

「文章を読むことに慣れた」（51%）、「漢字を覚えた、得意になった」（30.6%）、「いろいろな言葉を覚えた」（46.9%）、「文章の意味が分かるようになった」（20.4%）など、新聞の言葉や文章に興味を持ち、国語の能力が高まっていることを実感していることが分かった。

本校では、国語科で文章を読み取ることが課題であるが、新聞で多くの活字に触れ、文章を読むことへの苦手意識が少しずつ解消していることがうかがえる。

② 家庭の関心の広がり

NIEに学校全体で取り組んだことにより、新聞の教育的な効果に保護者が関心を持つようになった。

前述したように、新聞を購読している家庭は約57%で、新聞記事を親子で話題にすることが難しい状況であった。しかし、2年間にわたって学校で取り組んできたことや今回5年生の学年PTA親子行事でNIEを実践したことにより、保護者が新聞のよさを改めて知る機会となり、子ども会でもNIEを取り入れた活動を行った地区があった。家庭や地域を巻き込んだNIEが徐々に広がりつつあると言える。

③ 社会への関心の広がり

児童アンケートでは、「社会の出来事が分かるようになった」と30.6%の児童が回答している。

掲示板のNIEコーナーや昼の放送、切り抜きのワークシートなどで、児童は社会の出来事に興味を持つようになってきている。

自主勉強で、新聞記事を貼って社会の出来事について自分の考えを書いてくる児童が見られるようになったり、友達同士の会話で新聞の記事にある出来事を話題にする様子が多く見られるようになっていたりしている。

新聞を通して、児童が社会に関わって考えようとする態度を引き続き養っていきたい。



【写真13】児童の自主勉強のノート

(2) 課題

① 持続可能なNIEの実践

本校では、学年ごとにNIEの実践が行われ、カリキュラム化されている取組もあり、定着しつつある。NIEの研究協力校・実践校が終了しても、NIEの実践を継続していくことが課題である。

NIEを今後も持続可能にしていくためには、NIEのよさを教職員で共有すること、児童に新聞と触れ合う機会を多くつくってNIEの楽しさ味わわせていくこと、そして保護者に新聞のよさを伝えていくことが必要である。

② 更なるNIEによる効果の検証

NIEを通して児童にどのような力が身に付いたか確かめることができれば、より一層NIEは進展していけるものと考えられる。

児童アンケートでは、NIEのよさを確認することができた。しかし、学力面で、NIEがどのような形で学習意欲の向上に役立ったか、NIEにより高まった言語力や知識が理解の深まりとどのような相関があったか、といった効果を検証するところまでは至らなかった。

また、児童の学習の様子や家庭の様子で、児童の変容を把握してだけでなく、数値的な学力にも現れるように取り組んでいきたい。

以上の課題を受け、今後、NIEを持続可能にしていけるように、引き続き教職員や児童、保護者に働き掛け、実践を積み重ね、長いスパンでの児童の変容等を検証していきたい。

(担当 主幹教諭 坂本 謙)

(2) 柴田町立柴田小学校（平成28・29年度実践指定校）

自ら進んでかかわり、自分の考えをもって表現する児童の育成

— 新聞の効果的な活用を通して —

1 はじめに

本校では、平成28・29年度の2年間、NIEの実践指定を受け、全教科・領域で新聞を取り入れた活動を通して児童の学習への関心・意欲を高め、自分の考えをもって表現する力を育てることをねらいとして研究に取り組んできた。

NIEの実践にあたって、新聞に関する意識調査を行ったところ、新聞を情報のツールとして考えている児童が少ないことや新聞を読んでいる児童が少ないことが明らかになった。

そこで、1年目は以下の二つの視点でNIEに取り組むことにした。

- (1) 新聞に慣れ親しむための場の設定
- (2) 意欲的に取り組むための学習過程の工夫

新聞に慣れ親しむための環境作りや新聞を取り入れた授業実践を行ったことで、児童が新聞に興味を持って取り組む姿が少しずつ見られるようになり、徐々に社会の出来事に目を向けることができるようになった。一方で、授業の中での効果的な新聞の活用の方法や実践授業の教科の偏り、交流のさせ方などが課題として挙げられた。

2年目は、児童が更に主体的に新聞に関わることができるよう、以下の二つの視点でNIEに取り組んでいくことにした。

- (1) 主体的に取り組むための学習過程の工夫
- (2) 新聞に慣れ親しむための場の設定

2 実践の概要

- (1) 新聞に慣れ親しむための場の設定

① NIEコーナー、新聞コーナーの設置

まずは、新聞に興味・関心を持たせるために1階低学年ホール、2階高学年ホール、階段の踊り場にNIEコーナーや新聞コーナーを設置した。NIEコーナーには、児童が切り取った記事や新聞の読み比べや子ども新聞などを掲示した。

さらに、2年目は児童が授業で作成した新聞などを掲示し、他の学年の児童の目に触れるようにした。

階段踊り場→



28年度 高学年ホール



29年度 高学年ホール

② NIEタイムの設定

毎週1回朝の15分間、NIEタイムを設定し、低学年は火曜日、中学年は木曜日、高学年は水曜日に実施した。ことばの貯金箱に取り組みだり、教師や児童による新聞記事の紹介を行ったりした。出来上がったことばの貯金箱は、各学年の廊下や教室に掲示した。



友達のことばの貯金箱を見る様子



新聞記事の紹介



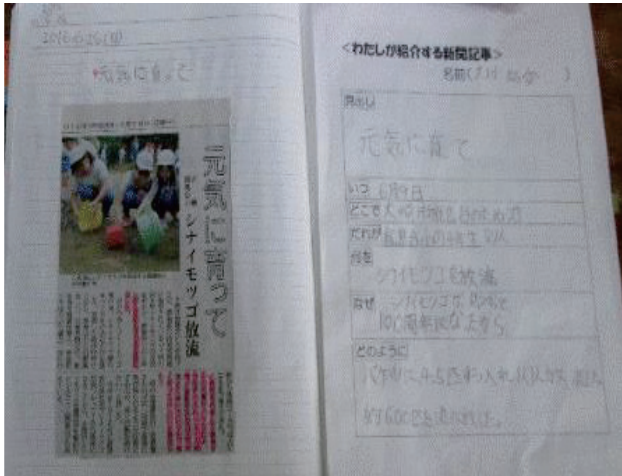
ことばの貯金箱(1年生)



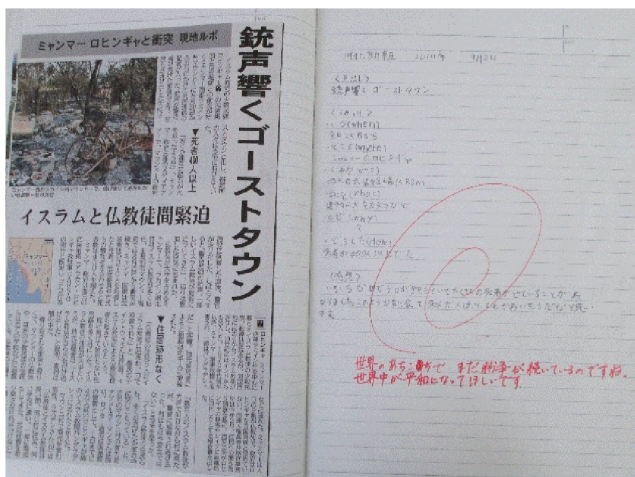
ことばの貯金箱(5年生)

③ スクラップ作り

主に中・高学年で新聞のスクラップノート作りに取り組んだ。自分の興味のある記事を選んで、スクラップしたり、授業に関係ある記事をスクラップしたりした。また、新聞感想コンクールにも応募し、28年度は学校奨励賞を頂くことができた。



4年生のスクラップノート



6年生のスクラップノート

④ 新聞の部屋

2年目は、月2回「新聞の部屋」を実施した。朝の登校時から朝の会までの30分間程、多目的スペースで地域のボランティアの方々に新聞を広げて読んでもらう時間を設定した。

新聞を読んでいるボランティアの方々の隣に児童が座って、新聞を一緒に読んだり、記事の内容を教えてもらったりした。

新聞の部屋に参加した児童の感想

- ・ おしゃべりをしながら、新聞を読むことができるのでおもしろい。
- ・ 知らないことを教えてくれるので、勉強になる。
- ・ おもしろい記事を教えてくれるので、楽しい。



低学年ホールでの新聞の部屋



高学年ホールでの新聞の部屋

⑤ 新聞切り抜き作品

6年生では、新聞系の児童が新聞切り抜き作品に取り組んだ。自分たちで興味を持ったテーマについて、書かれた新聞記事を集め、一枚の作品にまとめた。記事を読み込んで、自分たちなりの考えも書くことができた。



北朝鮮をテーマとした切り抜き作品

⑥ つぶやきニュース

主に1～3年生で「つぶやきニュース」に取り組んだ。「つぶやきニュース」は、校内のNIE研修会でNIE教育コンサルタントの渡邊裕子先生から教えていただいた。つぶやきを書きながら、記事について楽しそうに友達と話す姿が見られ、記事の内容を共有することができた。



1年生つぶやきニュース



3年生つぶやきニュース

⑦ 新聞と遊ぼう・仲良くなる

5月には、入学したばかりの1年生が事務補助の職員に新聞紙で折ったかぶとをプレゼントしてもらった。また、校長室で紙飛行機や紙鉄砲を作り、新聞を使った遊びに親しむことができた。



(2) 授業実践（一人一授業、全員の授業実践）

【28年度：意欲的に取り組むための学習過程の工夫】

- ① 新聞の教材化の工夫
- ② ペアやグループでの交流活動の工夫

1年生 国語「かたかなことばでぶんをつくろう」

子ども新聞から片仮名を見付ける学習を行った。児童は、片仮名言語を見付けて、文作りに意欲的に取り組むことができた。



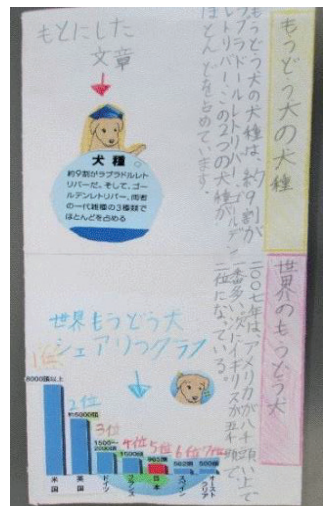
2年生 国語「ビーバーの大工事」

子ども新聞の動物の記事の特集から動物の秘密クイズを作る学習を行った。児童は、新聞記事から大切な言葉を見付けて、動物のクイズを作ることができた。



3年生 国語「はたらく犬について調べよう」

働く犬について調べて分かったことをリーフレットにまとめて紹介する学習を行った。調べる資料の一つとして、盲導犬の特集記事を活用した。



4年生 社会「水はどこから」

水に関する新聞記事を約1か月間集め、スクラップにまとめ、自分たちでできることは何かを考えた。

社会「ごみの処理と水利用」

授業の導入で食品ロスの記事を提示し、食品のごみがあることに気付かせた。児童は、「なぜ食品ロスが増えているのか。」「食品ロスを減らすために自分たちができることは何か。」について考えることができた。



5年生 国語「新聞記事を読み比べよう」

新聞の特徴や編集の仕方、記事の書き方などを理解することができた。また、一人一紙新聞を持つことで、意欲的に授業に取り組むことができた。



6年生 国語「新聞の投書を読み比べよう」

実際に投書をするという言語活動を設定することで、児童はめあてを持って取り組むことができた。新聞に掲載された投書は、学習発表会で発表した。



国語「言葉の由来に関心を持とう」

新聞から外来語を見付け、辞書を活用して言葉の由来を調べる活動を行った。身近にたくさんの外来語が使われていることに気付くことができた。



【29年度：主体的に取り組むための学習過程の工夫】

- ① 導入の工夫
- ② 考えを交流する活動の工夫

1年生 国語「ことばさがしをしよう」

学習した平仮名や促音、拗音がある言葉探しに取り組んだ。新聞記事を限定して3つは必ず見付けてみようという指示したところ、児童は、意欲的に取り組むことができた。

学級活動「ふわふわことばとちくちくことば」

新聞から自分で見付けたふわふわ言葉やふわふわ写真をカードにまとめて紹介する活動に取り組んだ。カードを作り、発表し共有することで、児童は、優しい気持ちで友達と仲良くしていこうという気持ちを高めていくことができた。作成したカードは、NIEコーナーに掲示した。



2年生 国語「たんぼぼはどんな花」

新聞で取り上げられたたんぼぼの記事を紹介し、知識を深めるとともに、新聞を読んでいこうとする意欲を持たせた。

生活「サツマイモをしゅうかくしよう」

サツマイモの収穫と調理の出来事の中から自分が伝えたいことを新聞記事の形にまとめさせた。短く分かりやすい見出しを考えさせたり、読む人に分かりやすい感想や説明の文を書かせたりした。写真を豊富に準備することで、児童の興味・関心を引き出すことができた。



3年生 社会「工場の仕事」

かまぼこ工場で見学して分かったことや気付いたことを新聞の形にまとめた。

国語「漢字の組み立てと意味を考えよう」

新聞記事の中から学習した漢字の部首について探す活動を行った。児童は、じっくりと新聞に目を向けることで漢字には様々な部首があるということを実感することができた。



4年生 国語「みんなで新聞を作ろう」

分かりやすい記事を書き、見出しや割り付けを考えて読み手の興味を引く新聞を作ることができた。

社会「くらしを守る」

学習したことを生かして、消防や警察の仕事について新聞を作ることができた。

国語「文と文をつなぐ言葉の働きを考えよう」

接続語や接続助詞を新聞記事から探す活動に取り組んだ。見つけた接続語や接続助詞は、児童がタブレットに保存し、スクリーンに大きく投影しながら発表した。記事の中にも学習した接続語や接続助詞が使われていることに気付くことができた。



5年生 国語「新聞記事を読み比べよう」

新聞の構成や書き方の特徴を学び、友達が選んだ記事について、その内容や写真に合った見出しを考えるという活動に意欲的に取り組むことができた。



社会「情報化した社会とわたしたちの生活」

社会見学で学んだことを4年生に伝えるための新聞作りを行った。相手意識、目的意識を明確に持たせたことで、児童は、主体的に学習に取り組むことができた。



(3) 宮城県気仙沼高等学校（平成28・29年度実践指定校）

新聞を通して地域や世界に興味を持ち、

グローバルに活躍できる人材育成を目指して

1 はじめに

本校では平成28年度入学生から教育課程を一部変更し、地域を理解しグローバルな視点で物事を考え、学び続ける意思と行動力を持った生徒の育成に取り組んでいる。そのために、学校設定科目「地域社会研究」（1学年1単位必修）を設け、課題研究の手法を学び、探究活動を実践している。また、2学年からは人文類型・理数類型と並ぶ創造類型を配置し、「課題研究Ⅰ」（2学年2単位）、「課題研究Ⅱ」（3学年1単位）で、更に研究を進め英語等で世界へ考えを発信していく予定である。人文・理数類型においても、総合的な学習の時間でミニ課題研究を行っている。このような探究活動では、情報を収集し比較を行い、考え議論する力が求められる。その力を育成する一つのツールとして新聞を掲げ、平成28年度から実践指定校として活動していった。

昨年度は、地域社会研究において、地域に関する新聞記事の展示や、東日本大震災や熊本地震などの節目の日の新聞記事読み比べをできるようにした。その記事をきっかけに、オンライン新聞検索で更に関連記事を調べたり疑問点を調べたりすることで、研究内容を充実したものにすることができた。事後アンケートでは、4割の生徒が、新聞記事やオンライン新聞検索を利用したことがわかった。

しかし、課題として生徒に新聞記事を提示するなど教員からのアプローチのみになっていることや、教科を横断しての実践にできなかったことが挙げられた。

2 実践内容

NIE指定以前から、図書館前の廊下に朝日・読売・河北・三陸の4紙を置いており、新聞を読むスペースはあった。また、社説等を切り抜いた「今日のコラム」を図書館司書が印刷し配布しており、大学入試等で小論文を利用する生徒を中心に、継続して読んでいる。よって、指定を受け、更にNIEを活性化すべく、次のような実践を行った。

(1) 新聞掲示板

ねらい：新聞記事から自分の研究に関する情報を得て、研究内容に活かす。

期 間：通年

対 象：全学年

研究領域に関係のある記事を、朝日・読売・毎日・河北・三陸の5紙から選び、その都度廊下に掲示した(図1)。研究活動をコンピュータ室で行うことが多いため、場所はコンピュータ室前に決めた。昨年度は、地域社会研究での実践がメインであったため、記事は「地元の産業」「地方創生」「自然」「震災・防災」などが中心であった。今年度は、2学年での課題研究も本格的にスタートしたことから「外国人」や「世界情勢」など幅広く選ぶことにした。常時40枚ぐらい掲示してある。約1か月掲示した後は、分野ごとにとじ、まとめている(図2)。この分野も、昨年度は5種類であったが、今年度は、表1のように細分化し、過去の情報を収集しやすいようにした。

表1 ファイリング分野の比較

昨年度	今年度
海と産業	水産業 水産資源確保・マグロ漁獲規制 地方創生・魅力づくり・商品開発 観光 他地域の地方創生活動 三陸道・交通・大島架橋
海と人間	まちづくり 児童・子育て・介護・福祉 教育・コミュニティ 外国人技能実習制度
海の文化	文化・風習 対外関係・地球環境 台湾 国際化
三陸の海	海洋環境・観測技術
海と防災	地震メカニズム・予知・過去の地震 復興状況・防災対策



図1 新聞記事の掲示とファイル



図2 ファイルの中身

また、新聞社による記事の書き方の違いや、同じニュースの全国版と地方版での情報量の違いを感じてもらうため、「新聞読み比べ」のコーナーを設け、月に1度ぐらいで更新をした。いじめ問題やマグロの漁獲規制、学力状況調査結果など、こちらも研究に近い内容で選んだ。しかし、高校生の興味が湧く内容が同時に複数紙に載ることは少なく、意外と苦労した。

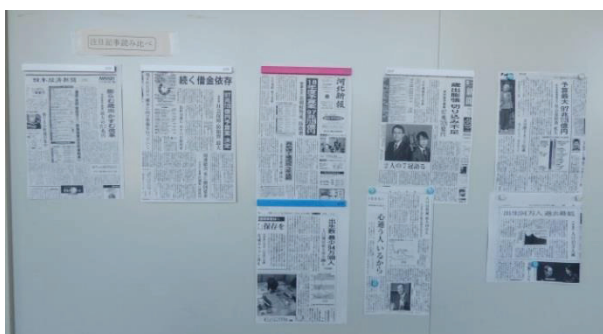


図3 注目記事の読み比べ

今回は教員側が主導で記事探しを行ったが、委員会や係のようなものを作り、1週間に1度生徒が記事を選ぶ活動ができれば、より主体的なNIEにつながると思った。

(2) 朝学習での新聞活用

ねらい：批判的思考力や科学的思考力の基礎となる「事象や現象に対して疑問を持つ力」を育成するとともに、社会の動きや地域の出来事に関心を向けさせる

期 間：通年（毎週火曜・水曜 10分間ずつ）

対 象：2学年全員

水曜日に新聞記事を選びノートに貼り、疑問点を3つ挙げる。ノートを近くの人と交換して、次週火曜日までに相手の疑問点を調べてくる。そして、火曜日の朝学習の時間に、相手の疑問点について調べた結果を互いに説明し理解してもらい、その後自分で選んだ記事へ感想やコメントを記入する。新聞記事を選び自分の意見を書くという活動はよく見かけるが、そこにひとひねり加えることで、本人が関心を持っていなかった記事にも触れることができ、相手に伝えるためにまずは調べた本人が理解することが副次的に求められる。

新聞は半分に切り、一人1枚（裏表で2面分）配布する。新聞が24面あると仮定すると1部で12人分なので、1クラス4部ずつ用意した（図4）。記入例（図5）を配布し、全体で練習を行った後、4月から実践した。11月まで17回34コマ行った。



図4 クラスへの新聞配布

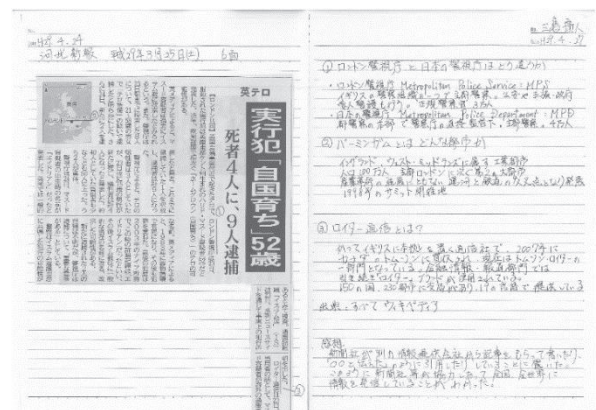


図5 ノートの記入例

10分という短い時間で、記事を選び疑問点を挙げなければいけないので、最初は朝の時間内では終わらなかったが、慣れるとスムーズに進むようになった。想定では、記事選び5分、切り貼り1分、疑問の拾い上げ3分であった。また、互いの発表でも、真剣に聞く姿勢や調べてもらったことに更に質問をしたりする様子が見えかけた。こちらでも、Aさんの疑問にBさんが回答・説明する3分、その逆が3分、自分の記事への感想やコメントを記入する3分で計画した。担任が時間を計測し一斉にやるクラスもあれば、その場の生徒の流れに任せるクラスもあった。

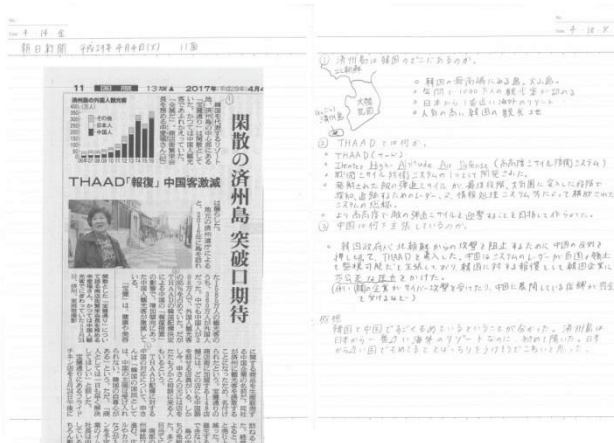


図6 生徒のノート一例



図7 火曜日の発表の様子

一方で、回数を重ねるごとに作業のマンネリ化が見られたり、「じっくりと新聞を読みたい」との声が聞かれたりするようになった。そこで、12月からは、一人1部ずつ新聞を配布し、読むだけの時間に変更した。新聞は、教員の親睦会で購入している5紙とNIE分2紙（本校では2紙ずつ月をずらして利用）の計7紙が1日あたり届くので、1週間溜めれば1クラス分になる。火曜日に配布して水曜日に回収する。それを次週隣のクラスに回し、最初のクラスには最新の新聞を入れ、最後のクラスのもの破棄する。これにより、1度全クラス分揃えれば、同じ新聞に出会うことなく、新しい記事を読むことができる。この活動を3月まで10数回続けていく。

火曜・水曜以外の朝学習では、国語・数学・英語の学習を行っているが、英語においても週刊英字新聞「The Japan Times ST」の記事(図8)を用いて、実際の記事から英語を学ぶ活動に取り組んできた。短い記事を読んで意味の分からない単語を探し、辞書で意味を調べる作業ではあるが、社会の現状に触れるとともに、新聞独特の言い回しや日常でどのような英語表現を使うのかを同時に学ぶことを意図した。また、簡単な解説記事を読むことで、わからない単語でも、類推し当てはめて考える力を養おうと試みた。

これらの効果については年度末に調査し、分析していきたい。当初は、国語の朝課外も新聞と連携する予定であったが、うまくいかなかった。次年度以降は、国語や数学との関わりを模索していきたい。



図8 英語の朝学習プリント一例

(3) 国語科週間課題での取組

ねらい：新聞に親しみ、自らの知識・考えを深める

期間：通年(課題)

対象：1学年全員

毎週月曜日に、地域社会研究に関係するような地元に関する記事や考えてもらいたい記事を教員が選び、問いを作成する。図9の課題であれば、

次のような設問であった。

問1 傍線部①「地元限界」とはどのようなことか。また、そうなっている理由を気仙沼の現状を踏まえて2点挙げよ。問2 傍線部②「不安は消えた」について、不安の内容を説明せよ。また、不安が消えた理由を説明せよ。問3 傍線部③「手を講じ(る)」の意味を答えよ。問6 傍線部⑥「他県からも人材を呼び込むような独自策」について、あなたの考える方策を一つ挙げ、3行以上で説明しなさい。



図10 生徒のノート



図9 国語科週間課題の一例

このように、国語の文章読解の要素のみならず、地域の現状や地域社会研究で得られた知識を統合し、自らの考えを述べる練習としても位置付けている。生徒はノート見開きの上に課題プリントを貼り(図10では左)、下に設問に関する答えを書いて、次週の月曜日に提出する。教員は採点とコメントを書き、学期末に国語総合の評価に10点満点として加える。12月末までで16回行っている。また、夏期休業中には、地域社会研究に関連している新聞記事を各自が選び、その記事について考える課題や、冬期休業中は、教員から3つの記事を与え、その中から一つ選び、要約と自分の意見を書く取組を行った。

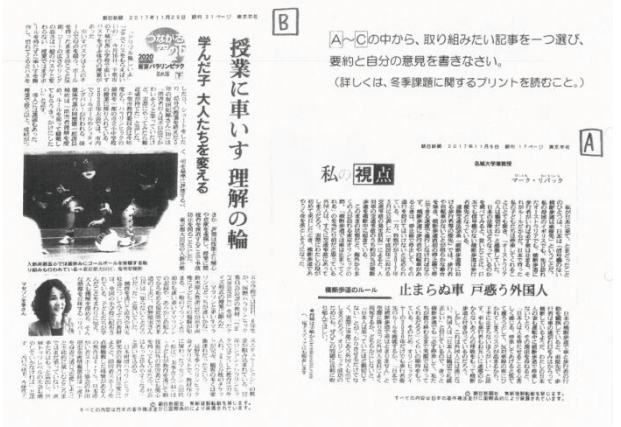


図11 冬期休業課題の一部

年度途中のため、アンケート調査等による効果の分析を行っていないが、模擬試験の成績を見ると上昇している。この活動だけの成果ではないだろうが、向上の一翼を担っていると感じる。また、平成30年4月に気仙沼西高校と統合するため、気仙沼西高校でも同様の取組を行い(地域社会研究も行って)、統合後もスムーズに実践できる準備を行ってきた。よって、次年度も継続して取り組み、更に改善をしていきたい。

(4) 課題研究Iでの取組

ねらい：新聞を材料に、疑問に持つ力や論理的な思考を養う。

期間：4時間

対象：2学年創造類型1クラス34名

① 新聞について知る 4月11日

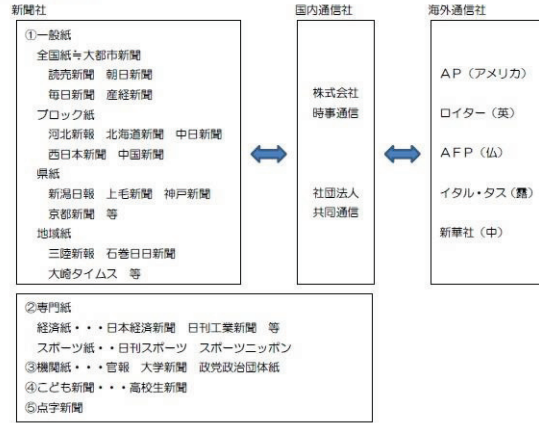
新聞の種類や情報の集め方についてプリントを作成し授業を行った。同一日の新聞社毎の紙面構成の違い、同じ新聞社の一週間での紙面比較についてもプリントを作成し、気づくことをグループごとに挙げさせたり、実際の新聞を見比べたりした。また、インターネットまとめサイトの不正事

件やフェイクニュースに関する新聞記事を用いて、ネット情報の危険性と新聞記事の信ぴょう性についても伝えた。

課題研究1 2017.4.11

テーマ：新聞種類について知る

(1) 新聞の種類



(2) 紙面の構成 ※別紙「平成28年11月23日(水)各社紙面構成の比較」
●全体の構成で気が付くことはないか？ ヒント：共通点・相違点 全国紙・地方紙

図12 プリント(抜粋)

平成28年11月23日(水)の各社紙面構成の比較

ページ	読売新聞	朝日新聞	毎日新聞	日本経済新聞	産経新聞	河北新報	三陸新報
1	一面	総合1	一面	一面	一面	一面	一面
2	総合	総合2	総合	総合	総合	総合	地域
3	総合	総合3	総合	総合	総合	総合	地域
4	政治	総合4	広告	政治	広告	総合	歌壇随想
5	広告	広告	総合・経済	経済	総合	総合・国際	漁業通信
6	広告	広告	総合・経済	国際	オビニオン	特集	地域
7	国際	総合5	経済	国際	オビニオン	経済	地域
8	広告	広告	国際	広告	国際	経済	番組
9	国際	経済	証券	アジア	国際	株式	番組
10	経済	広告	特集	広告	経済	特集	
11	経済	経済	医療・福祉	企業総合	経済	スポーツ	
12	投資	国際	オビニオン	企業	証券	スポーツ	
13	解説	国際	オビニオン	企業・消費	証券	みやぎ	
14	家計	金融情報	広告	広告	文化	みやぎ	
15	くらし教育	金融情報	広告	投資情報	広告	みやぎ	
16	広告	オビニオン	スポーツ	マーケット	広告	みやぎ	
17	文化	オビニオン	スポーツ	マーケット	広告	みやぎ	

朝日新聞1週間(平成29年)の紙面構成比較

ページ	4月3日(月)	4月4日(月)	4月5日(火)	4月6日(水)	4月7日(木)	4月8日(金)	4月9日(土)
1	総合1	総合1	総合1	総合1	総合1	総合1	総合1
2	総合2	総合2	総合2	総合2	総合2	総合2	総合2
3	総合3	総合3	総合3	総合3	総合3	総合3	総合3
4	総合4	総合4	総合4	総合4	総合4	総合4	総合4
5	広告	広告	広告	広告	総合5	総合5	総合5
6	広告	経済	広告	広告	広告	広告	広告
7	国際	経済	総合5	総合5	経済	総合5	国際
8	広告	国際	経済	経済	金融情報	国際	オビニオン
9	国際	広告	経済	経済	経済	国際	オビニオン
10	オビニオン	広告	国際	広告	経済	広告	広告
11	オビニオン	国際	国際	国際	国際	経済	俳優歌壇
12	広告	金融情報	金融・経済	金融情報	オビニオン	金融情報	広告
13	俳優歌壇	金融情報	金融情報	国際	オビニオン	経済	読書
14	スポーツ	オビニオン	オビニオン	オビニオン	スポーツ	オビニオン	読書
15	スポーツ	オビニオン	オビニオン	オビニオン	スポーツ	オビニオン	読書
16	スポーツ	広告	広告	スポーツ	広告	読書	読書
17	スポーツ	特集	特集	スポーツ	広告	番組	広告
18	広告	広告	広告	番組	番組	番組	番組
19	広告	番組	スポーツ	番組	脚藝得棋	広告	番組
20	番組	スポーツ	広告	第2宮城	第2宮城	広告	広告
21	特集	スポーツ	スポーツ	宮城	宮城	スポーツ	広告

図13 新聞社毎の比較と一週間での比較(抜粋)

② 論理的に考える 4月25日

NHK高校講座「ロンのちから」を用いて、三段論法(第1話)や誤った前提・危険な飛躍(第2話)、事実・推測・意見(第16話)で、論理的

に考えるとはどういうことなのか学んだあと、図14のプリントに取り組みさせた。それぞれの文を、「事実」「推測」「意見」に分けさせ、構成がどのようになっているか考えさせる。最後はタイトルをつける作業をした。新聞記事には「推測」が少ないことなどを生徒は感じ取っていた。

次の新聞記事を事実・推測・意見にわけ、この記事のタイトルをつけてみよう

(河北新報2017.4.25 21面)

図14 材料にした記事

③ 数字に疑問を持つ 4月28日

平成29年3月28日の各紙に、特別養護老人ホームの記事が載った。読売の「特養待機36万6100人 厚労省調査 受け皿不足続く」の見出しを見せ、待機児童が減ったのか増えたのかをまず考えさせた。その後、グループごとに違う新聞社の記事を配り、その記事から読み取れる内容を書きとらせた(図15)。ちなみに、毎日新聞が「特養待機者36万6000人16年4月前回調査から3割減」、朝日新聞が「特養入居待機36万6千人に「要介護2以下」制限で減」、河北新報が「特養待機3割減36万人」の見出しであった。

次にジグソー法によりメンバーを入れ替え、情報を共有し、4紙の情報がそろったところでの新聞社の記事が分かりやすかったのか考えさせた。そこから、新聞を読んでも新聞社によって読

み取れる数字が違うことや割合で書かれている場合の注意点など、複数の情報源から数字を正しく読み取る必要性について気付かせた。

また、気仙沼市は岩手県に隣接しているため、岩手県から通う生徒や教員がいる。気仙沼市と岩手県でも、同じ新聞社で版が違うため内容が異なることがある。版の違う同じ日の紙面を見せたところ、多くの生徒は驚いていた。そこから、同じ新聞を読んでいても、得ている情報が違うことも感じさせることができた。

Q3 次の見出しはある日の新聞の見出しです。待機者数は減ったのですか？増えたのですか？

特養待機 36万6100人 厚労省調査 受け皿不足続く (平成29年3月28日 読売新聞)

減った ・ 増えた

Q4 平成29年3月28日(火)の新聞記事から数値等を読み取り、記入せよ

新聞名: _____

		2016年	2013年	増減
入居者				
	要介護3~5			
待機者	そのうち在宅			
	そのうち在宅以外			
	要介護1・2			
	合計			

表の数字以外に分かったこと

全部の新聞の情報をまとめる

	2016年	2013年	増減

図15 ワークシート (一部改 抜粋)

④ ケースメソッド 5月16日

ケースメソッドとは、「意図的に構成された教材を用いて、学習者同士の討議を繰り返すことで実践力を身につける教育手法」(慶応義塾大学大学院経営管理研究科HP)。仙台二華高校で行っている取組を真似して行った。朝日新聞2016年4月5日の『「100年に1度」干ばつベトナムで稲作被害』と朝日新聞2015年12月17日の「海岸浸食 植林+防潮堤補強で防げ」を用いた。事前にプリントを配布し、この現状の問題点を個人で考えてくる宿題を課した。授業当日、グループで話し合い問題点を共有し、クラスディスカッションに取り組んだ。班ごとに紙に意見を書き、それを教員のリードでグルーピングし、課題を見つけていく。付箋を用いるKJ法を大きな紙と黒板で行うものとイメージしてもらえればよい。干ばつの記事であるが、そこから、地球温暖化や海岸浸食、国の政策、収入や職業の問題など、一つの記

事から多岐にわたる課題を見つけていた。最後は、日本でも海岸浸食が起きている事実(読売新聞2016年9月11日千葉県版「海岸浸食 九十九里浜 消失の危機」)を伝え、遠い国での出来事ではなく、身近な問題であるところに視点を引きよせて授業を終えた。この題材を通して、生徒にはグローバル化について考えてもらいたかった。



図16 ケースメソッドの様子

3 まとめ

教育課程の変更によりNIE活動を取り入れやすい環境になったことと、実践指定校に選ばれ様々な取組を知ることができたことが相乗効果をなし、NIE活動を加速させることができたと感じる。特に、朝日けんさくくん、スクールヨミダス、河北新報データベースの導入は、生徒の探究活動を充実させたことはもちろん、随所で教員による新聞活用を容易にさせた。本報告書には挙げていないが、学級通信や学年通信、授業冒頭など、大きくはないが新聞の使用頻度は高まっている。例えば、広島から人事交流で来ている先生が8月6日の広島の地元紙を持ってきてくださり、文化祭で展示し、そこから、平和の折り鶴作成を行い広島に届ける活動に発展した事例もある。

1・2学年での取組をどこかで活かせないと思い、第8回「いっしょに読もう！新聞コンクール」(一般社団法人日本新聞協会主催)に応募した。高校18,880編の中から、優秀賞に1名が選ばれ(西高生も奨励賞1名)、学校としても優秀学校賞に選ばれた。この受賞は生徒や教員にも大きな励みになったと思う。

指定2年を終えたが、本校としては環境が整い、これから飛躍の時期を迎える。更に発展できるように次年度も、校内で様々な発信をしていきたい。(担当 教諭 三嶋 廣人)

(4) 聖和学園高等学校 (平成28・29年度実践指定校)

新聞活用を通して幅広い視野の育成

～ 自らの考えを持ち多彩な表現力を培う ～

1 はじめに

本校では「和敬信愛」の校訓のもと、お釈迦さまの教えを伝える日本仏教の各宗祖師たちの言葉や行跡を現代に生かしながら、人間性豊かな知育・体育・徳育の養成に努めることを教育の方針としている。普通の教育課程のほかに、宗教の時間や仏教行事を通して宗教的情操を養い、お釈迦さまの教えを糧とした人格の陶冶と勉学に励む教育活動を行っている。本校創立は昭和4年、平成15年に薬師堂キャンパス三神峯キャンパスに分かれ、男女共学制を開始した。薬師堂キャンパスには「特別進学文理コース」・「総合進学コース」・「総合実践コース」の3コースがあり、三神峯キャンパスには「特別選抜コース」・「進路総合コース」の2コースがある。一人一人の夢と進路目標に合わせて決める5コース制を導入している。

本校では平成28年度・29年度の2年にわたりNIE実践指定校として認定を受けた。現在NIE活動は主に薬師堂キャンパスで実施している。新聞活用を通して思考力・判断力・表現力を養い、広い視野を持って社会を創造する力を育むことを目標に活動を始めた。昨今は複雑化・多様化だけでなく高速化する社会である。その中でも、校訓にある他者を敬い共生する心を忘れずに生き抜ける力のある生徒を育成したいと考えた。

2 本校の現状について

本校生徒の実態としては運動に対する強い関心を持ち、部活動においては積極的な姿勢で臨む生徒が多い。自分の関心のある事柄に対しては情報を集める意欲は高いが、地域や社会の出来事に関する関心は低い。社会の出来事をテレビやインターネット、スマートフォンなどを通して知ることが多く、新聞から情報を得る生徒は非常に少ない。その上、新聞を購読していない家庭も増えており、新聞離れが起こっている。新聞を通して生徒に生きる力を育み、基礎知識や技能の充実、そして課題解決するために必要な思考力・判断力・表現力の定着を図ってきた。認定を受ける以前より、教科・科目での新聞活用はもろろんのこと、図書館では河北新報・朝日新聞・

読売新聞・毎日新聞の日刊紙4誌を定期購読し、書見台にて閲覧できるように新聞が提供されている。「比較読み」することができ、情報を取捨選択・整理し、批判的・批評的に読み取ることができる。

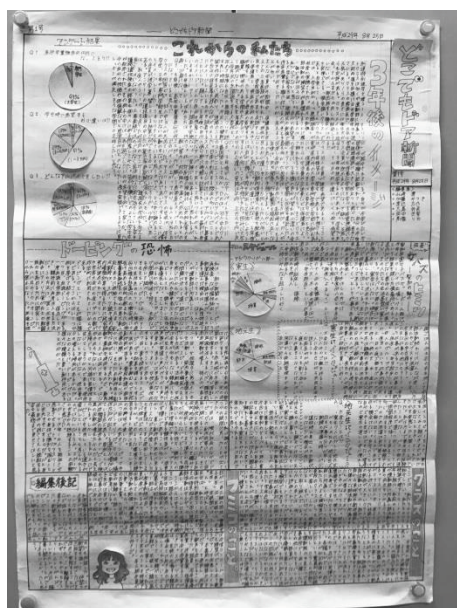


また図書館で「新聞の読み方講座」等も実施されてきた。校舎にはNIEコーナーを常設し、生徒がいつでも新聞を読むことができる環境を整えた。各新聞社の一面記事を比較できるように並べた。すると新聞記事に親しみ、社会事象に関心を抱く生徒が増え始めた。また生徒間の意見交換やコミュニケーションを図る契機として、各新聞社のコラムや社説を掲載したプリントを図書館から発行している。新聞を読む時間があまりない生徒達ではあるが、連載記事を毎日少しずつ読むことで、読解力の向上を目指し多様な考え方を知る機会を持てるようになった。



更に文化祭時期に合わせ各学級で「クラス新聞」を作成し、展示発表を行っている。新聞制作の中で学級内の活動や問題点、そして学級の声や主張を取

り上げている。学級の和を強める新聞制作を通して、さまざまな価値観を共有し相互理解や自己表現力を培う活動を行っている。



3 平成28年度実践内容

(1) 1学年（特別進学文理・総合進学・総合実践）

総合的な学習の時間を活用し、かほくワークシート、つぶやきNEWS、漢字小テスト（河北新報の記事をベースとした学習プリント）、語彙読解力検定の練習問題を教材とした取組を行ってきた。具体目標は「新聞に親しむ」・「新聞に主体的に関われるよう新聞に目を通して自身の興味関心事に気づく」・「新聞の構成を知り、情報を的確に読み取る力を身につける」とした。

○かほくワークシート

「かほくワークシート」を活用したワークシートでは新聞記事をベースとした漢字テストを組み込み、正確に事象を読み解く力、考える力、まとめる力を身につけさせることを意識させ、論理的思考力を身につけさせた。新聞に触れる機会の少ない生徒達も新聞記事を題材として文章を基礎から学び社会事象に関心を持つ機会となった。

○つぶやきNEWS（教員研修の実施）

一人一人が新聞から気になる記事を選択して、模造紙上で意見を述べ合う「つぶやきNEWS」では、講師をお招きして校内教員研修会を実施した。普段は職員室の座席配置等の関係で、なかなか話をする機会がない先生方と研修を通じて活発な意見交換が

できる楽しい貴重な時間となった。放課後の業務や部活動指導もある中、キャンパス全教員参加での実施は、後の1学年総合の時間におけるファシリテーター役の遂行には重要な要素であったと思う。他者と関わり、情報を共有化することができるワークショップに「工夫すればどの教科でも実施することができ、アクティブ・ラーニングとして今後の授業に取り入れていきたい」などの声が寄せられた。

教員が実践した後に、1年生の生徒は総合学習の時間につぶやきNEWSを実践した。自由な発想のもと様々な意見に触れることで新聞に親しんだ。最初は静かだった教室が、記事を通じて自分の考えを生徒間で伝え合い、会話を弾ませることができた。感想でも批評でもなく、あくまで「つぶやき」であるからこそ誰もが気軽に楽しみ自分の考えをまとめることや表現することができるようになり、多様性や協働性を培ってきた。本校の生徒で、SNSのツイッターの利用者は多い。現代の生徒は、自分の興味関心事への情報収集能力や発信能力に長け、世界中の人を相手に行っている。しかし、自分の興味関心事から離れた話題の記事に「つぶやき」を残すことや、話題を膨らませる文章力や語彙力、情報収集力の少なさを実感したようだ。



(2) 1学年（特別進学文理）

「自身の観点で情報を整理する」、「NIEの活動で語彙力の向上を実感する」を目標として国語総合の時間を活用し、語彙読解力の小テストと河北新報の記事内に使用されている語句から入試頻出漢字を出題した漢字テストを実施した。また、日本新聞協会が提供している「ハッピースクラップ帳」と新聞を生徒一人一人に配付した。

○新聞記事による漢字小テスト

漢字テストの実施は事前に指示された範囲での書き取りテストが通常だが、前週一週間の朝刊記事からの出題とした。「事前学習ができない」との声が

多く出たが、自ら閲覧スペースに足を運び、紙面を定期的に読む姿が見られた。出題も生徒の通学地域に関する記事にしたところ興味を持って学習ができた。特に部活動を通じて越県入学をしている生徒にとって、東北・宮城の地域性を知る貴重な情報源となった。

○ハッピースクラップ帳

オリジナルのスクラップ帳を作成することで、自らの意見を他の生徒に見せ評価し合い、議論を通じて互いに答えを探求する活動が見られた。新聞を通して自分自身の興味関心と向き合い、主体的取組になったと言える。また、生徒間でのスクラップの見せ合いが活動の充実につながったようだ。3学年次の受験における小論文、面接の期間まで継続できるかが課題である。

○語彙読解力検定モニター受検

大学入試試験と関連させ、社会への視野を広げ、社会生活に必要な基礎知識や時事知識の養成を図った。新聞記事を題材とした基礎力向上や進学、就職にも活用できる。検定試験ということもあり、生徒も意欲的に学習する姿勢が見られた。この検定を受検後、生徒が文章検定を自主的に受検するなど自身の付加価値化を図る意識を養う機会にも繋がった。

NIE活動は「楽しい」・「親しむ」だけでなく、生徒が新聞と主体的に関わる姿勢を身につけさせるため継続的な指導の重要性が問われる。そして新聞活用が自らの進路活動に直結したものであることを生徒に実感させることが肝要であると感じ、次年度への課題となった。

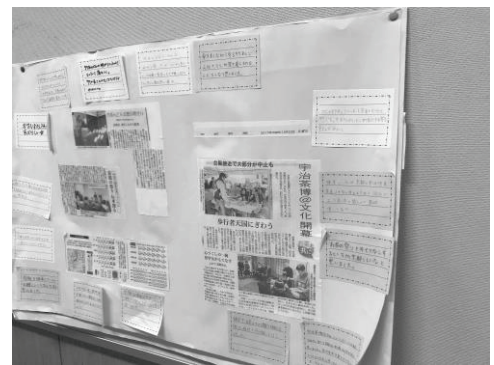
4 平成29年度の実践報告

(1) 2学年（特別進学文理・総合進学・総合実践）

今年度は第2学年を中心とし、表現力の育成に重点を置いた。ワークシートを作成して社説やコラム写しを課題とし、まずは書き写すことから始めた。その後、社説を簡潔に要約する練習を取り入れ情報を読み解く力を鍛えた。また修学旅行で京都を中心とした関西を訪れることが決まっていた為、事前学習の一環として京都新聞を取り寄せた。宮城県と京都の違いを理解し、より修学旅行への興味関心を高め、時宜を得た情報源となった。地方紙は、一般紙とは違った地方ならではのより身近な出来事やそこに住む人にとって有意義な情報を提供していること

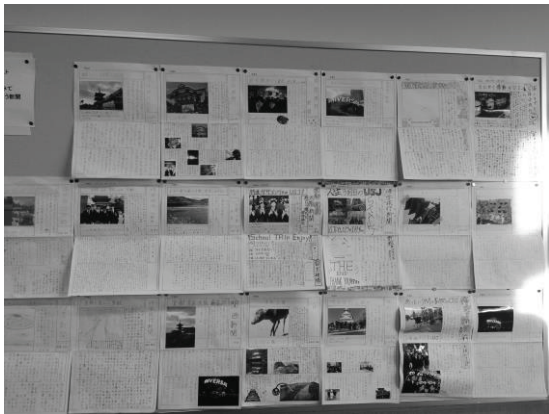
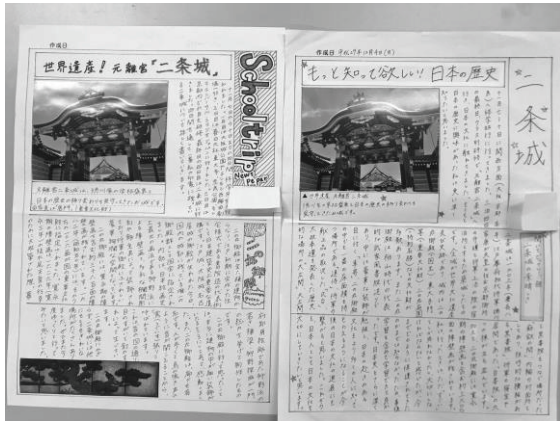
が分かり新聞への理解を示し始めた。

修学旅行に関連した記事は少なく、生徒達の実践的な事前学習に繋がることは難しいものであったが、「つぶやきNEWS」方式を取り入れ、地方新聞から自ら関心のある記事を集め、模造紙に貼り、意見を書かせ他者の考え方と自分の考え方を比較させた。記事を選定することで読解力や集中力を高め社会に目を向けることができた。そして日常的な事象に対して「自分事」として捉えることが大切であることを学んだ。



また修学旅行の事後学習として個人新聞の作成を行った。実際に調査してきた内容を自らの言葉でまとめ具体的な課題を見出すことができた。「5W1H」といった新聞記事の書き方や題字、見出しのつけ方などの説明を行い表現力の重要性を説いた。新聞作りを通して生徒の主体性や独自性を発揮させ、自ら

の言葉でまとめさせた。生徒は自分の考えや結論や根拠を分かりやすく人に伝えることが大切であることを知り、その後、新聞に目を向ける生徒が多くなり、端的な記事の書き方や見出し、写真の効果などに興味を持ち始めた。クラス毎、個人新聞コンテストを実施するなど発表の場を設けた。



今後は総合的な学習の時間だけでなく、各教科のカリキュラムや教育活動の中で継続的・系統的にNIEを実践できるような年間計画が必要である。新聞を活用した学習を進め、批判的に考える力、論理的に考える力、創造的に考える力を身につけさせていきたい。

(担当 教諭 佐々木なつき)

(2) 1 学年 (特別進学文理)

特進文理コースにおける2年目のNIE実践は、年間を通じ段階的に難易度や形式の変化を持たせ学習を進めるように心掛けた。また、NIE学習の重要性を生徒自身が認識するよう4月の“導入”を意識し実施した。

昨今の大学生は、新書や文献を使用しての学習に

対応できないと聞く。卒業論文作成時の参考文献の最低冊数を、教授に事前に何うほどに活字を嫌悪する学生もいるようだ。特進文理コースの生徒は、9割の生徒が大学進学を希望しており、高校段階での新聞学習は、活字嫌いを楽しみながら克服する機会といえるだろう。最新の社会情報入手し、現代社会の課題を認識し、前後の文脈を読解する力を養い、語彙力の向上の機会になる。それと同時に、生徒本人にとって“自分自身が何に興味関心があるのか”を見極める良い機会にもなる。生徒自身が大学で深く専門性追求したい分野を知る契機としていきたいと考えて実践したいと思った。



昨年度の経験から、学校に新聞コーナーを設置し、個人のスクラップブック作成を促しても、生徒自身のNIE学習の目的意識を明確にしなければ“質の高い新聞学習”を継続して行うことはできない。今年度は、新年度1年生に新聞学習を行う際、最初に簡単な講義を行った。斎藤孝氏の著作『新聞力』から生徒向けにレジュメを作成し、NIE活動の意義について話をした。

【レジュメ記載文章の一部】

①新聞には沢山の情報が詰まっており、多くのビジネスチャンスや技術開発の糸口なの宝庫である。

②普段生徒が利用しているインターネットニュースは新聞からの引用がほとんどである。

③社会的な情報弱者は、事実を基にした建設的な議論や多様な意見を踏まえての議論は困難となるので、普段新聞を読まないことは「信頼」と「ビジネスチャンス=貨幣」をも失っている。

④新聞は365日朝・夕と発刊されているが、週1回新聞を読む機会設けると年間52回。これを3年間継続すると、多分野の最新情報を156回知り得ることになる。

⑤NIEの活動を通じて感想を書き、語彙を増やす意味調べを0回で卒業を迎えるか、156回達成するのかでは今後の人生の生き方、考え方、社会的な活躍の仕方に必ず影響が出る。

⑥何より大学は、勉強から研究へと学習の内容も高度化する。自身の興味関心事を認知し、自主的に学ぶ姿勢が重要である。同時に大学は自主的に学べる学生を求めている。

本校の特進文理コースの生徒は、約6割の生徒が自己推薦入試や公募推薦入試を利用して大学受験を行う。その際には、面接と小論文が必須となる。ニュースの話題や現代社会の課題について、自身の見解を明示し、対立意見を踏まえながら適切に論述する技量が求められる。本校の場合、部活動に力を入れている生徒も多いため、3年次には受験と競技の両立を達成しなければならない。1年次から大学入試の形態を意識し、新聞のスクラップや自分の関心事以外に着目する機会は必須となる。今年度のNIEでは、新聞を楽しむ機会と同時に受験を乗り越える力を蓄積することを意識させて試みることにした。

入学当初からの新聞学習は、教員が持ち回りで記事を選定し配付を行った。これに対して以下の三つの作業を実践した。

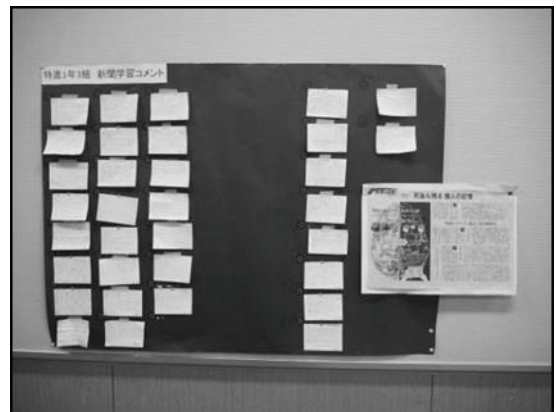
○新聞の構成を分析

新聞の記事を分析し、文章構成の学習をすることとした。『新聞力』に紹介されていた方法を2色のボールペンを使用し、事実と解釈に分類した。“起承転結”の模範となる文章の組み立て方と、新聞が事実を基にして自分の意見を述べる体系であることを認識させた。小論文を書く時に、自身の経験に基づく記載が多い感想文になってしまう。事実と見解をバランスよく展開する手本として、あえて新聞記事を分析する機会を設けた。

○生徒個人の特徴を知るきっかけ

4月～10月の期間は新聞の選定は、学年の教員が週1回持ち回りで行った。新聞と学校生活に慣れるため、教員の選ぶ記事を読むことで互いの趣向を

共有化する機会とした。本校には、他県から親元を離れて入学している生徒もいる。学校の教員が最も身近な大人である場合が多いので、教員が選ぶ新聞への感想を通じて、生徒の個性や価値観を把握する重要な手掛かりとした。100字程度の感想の記入は、その後週1回クラスの掲示板に掲示した。同じ記事を読み、“同年代の見解の違い”を意識させることが目的だ。また、文章の掲示は、論述の展開が巧みな生徒を互いに知る機会にもなった。あるいは、端的に論理的な意見を述べられる生徒はクラスでも一目置かれる存在となった。1学年の4月初めであると、係決めやクラス代表を選出しなければならない。その際にも、適材適所を見極める重要な要素として活用した。



○学年でコメントを表彰

本校の特別進学文理コースには、1日8時間授業で進学に力を入れるアドバンスクラス（2クラス）と部活動との文武両道を目指すアスリートクラスの2種類がある。各クラス間は授業時間帯等の違いによって、なかなか学年間の交流ができていない。今年度は、新聞学習において教員が配付するプリントに、各クラス1名の感想を担当が選び裏面に印刷した。賛成や反対意見を述べるだけでなく、簡潔に対立する価値に対する共感を入れている文章、一般的な意見ではないが論理的に見解が述べられているコメントに着目して表彰した。毎週3名が選出され、前期のクラスの垣根を越えた友人関係が構築されて良い時期であった。この新聞コメントをきっかけに、学年のクラス間の交流が芽生えた。

(3)次段階へステップアップ

○自分で新聞を選び感想を書く

9月に入りアスリートクラスでは、自身の興味関心事から記事を選び切り取り、用紙に添付して新聞

学習を進めることとした。新聞学習シート（A3）を通じて新聞記事を行う学習は以下の五つである。
 ※裏面に新聞記事を添付する

新聞学習シート (A3) のテンプレート。上部には氏名、学年、期、日付などの記入欄がある。中央には縦横の罫線が入った大きな枠があり、下部には5段階の評価用テーブルとコメント欄が設けられている。

【生徒の作成した新聞学習シート】

生徒が作成した新聞学習シートの一例。記事の要約や感想が手書きで記入されている。中央には5段階の評価用テーブルがあり、各項目に数字が記入されている。右側にはコメント欄に手書きの感想が記されている。

新聞学習シートをファイルにまとめ、高校3年次まで継続する予定である。

① 語句調べ

自分の分からない語句を調べる。語彙の増加を実感することをねらいとした。

② 縮約

あえて要約ではなく、記事で使用される語句のみを使って80字で内容をまとめる。記事を構成する文章の根幹を見出す練習とした。

③ 記事の選択理由

自分の興味関心事について自分の見解を箇条書きで書く。これを継続することで、進学する際の志望動機を見出す材料とする。

④ 感想

約400字程度にまとめさせた。生徒と教員相互間で、興味関心を共有し教員がコメントを書き込むことで社会問題の背景、影響、意義といった補足事項を伝え、学習を深めることを心掛けた。教員がクラス全生徒の記事に目を通して、個々人に向けてコメントを書き込むことの時間的な労力は多大である。しかし、自分のコメントに反応があることが新聞学習のやる気にも繋がると確信したので続けている。

⑤ 生徒のコメント (2名のみ)

新聞学習の感想に対し、段階を踏んでコメントを教員だけでなく少数の生徒にも書き込ませた。多くの情報に触れる機会を増やすことを目的とした。テーマに対する“立場の違いによる、見解の差異”を見出すことに繋がりたいと考えた。

○ アクティブ・ラーニングと新聞学習

最近、高校生における課題解決型学力をどのようにして身に付けることができるのかが議題にあがる。課題解決型授業は、生徒の学習意欲の向上を促進する取り組みとされ、高大連携で専門性を用いて実践的に実施する例も多くなってきている。しかし、他者と共同して課題解決を行う際に、基礎的知識・学力差がある場合はなかなか実践しにくい。新聞学習の場合は明示される事実と多角的な情報を収集し記事が書かれている。数紙準備できれば記者や新聞社の“見解の違い”や“立場の違い”の意見と事実を見出すことができる。最新の社会の課題の情報を高校生に最も分かりやすい形で配信しているのでアクティブ・ラーニングには最適の教材といえる。課題解決型の学力は、解答の正誤ではなく解答に至るまでの過程の論理性や表現力が求められている。今後は、気軽に楽しんで行うつぶやきNEWSから複数紙の分析など、より現代社会の課題を見出す機会へと変えていきたい。最終的に、興味関心事や適性を見極め、自主的に学習目標を設定できる力に繋げていきたい。

最後に、余談ではあるがアスリートクラスは部活動で親元を離れて寮生活をしている生徒も多い。新聞記事への感想を通じて、現在生徒が何を考え、悩み、競技での葛藤を通じ感じるのかを知る貴重な情報源にもなった。今後の課題としては自然と新聞を読む機会をどのように創り出すかである。まずは新聞が自然に手に取れる環境づくりを心掛けたい。

(担当 講師 齋藤 史子)

(5) 仙台城南高等学校（平成28・29年度実践指定校）

生徒を動かすN I E

1 はじめに

本校は、平成28・29年度の2年間、N I E実践指定校の認定を受け、教育活動へ新聞を取り入れる取組を進めている。

本校は、特進科、探究科、科学技術科の3学科を擁する学校である。初年度となる昨年は、主に探究科の生徒たちに自分が興味を持つ記事だけでなく、時事的な話題にも触れさせながら、自ら考え、表現する力を育むことを目標に活動を行った。

2年目となる今年度は、昨年度の活動を踏襲しつつ、さらなる発展・拡充を図るため、探究科以外の学科や学校の委員会活動へN I E活動を取り入れる新たな取組を試みた。

2 実践の概要

2-1 N I E コーナーの設置

新聞が多くの子生の目に触れるよう校舎1階の職員室前と探究科職員室前に「N I Eコーナー」を設置するとともに、N I E活動の中で生徒たちが取り組んだワークシートを掲示している。今年度は新たに科学技術科職員室前にも「N I Eコーナー」を設け、ワークシートや日々届けられる新聞(河北新報、日経新聞、産経新聞、毎日新聞)を誰でも自由に閲覧できるようにした。(図1)



図1 職員室前のN I Eコーナー

2-2 委員会活動への導入

昨年度のN I E活動は主に探究科の「探究」という授業の中で実施してきたが、今年度はより多くの生徒たちが新聞に親しみをもち、記事に対して各自

の意見を述べる力を伸ばしていけるよう、教科や学科の枠を超えた委員会活動でも取り組むこととした。

本校の委員会活動の一つであるI C T委員会は、各クラスから選出された生徒たちで構成されている。それらの生徒たちが輪番で、自分たちで取り組みたい新聞記事を選び、その記事に関するワークシートを作成した。ワークシートの内容は、言葉の意味調べ、記事の内容に対する自分の考えとその理由を述べるものとなっている。



図2 生徒が取り組んだワークシート

2-3 各授業内での取組

昨年度は、探究科を中心にN I E活動を行っていたが、今年度は科学技術科の国語、英語の授業でもN I E活動を取り入れた。

2-3-1 国語での取組(探究科1年)

探究基礎の授業で行っている調べ学習の一環として、マスメディアの声を調べるために「河北データベース」を活用した新聞記事の検索を行った。

調べ学習はネット検索に陥りがちであるが、新聞記事を取り入れることによって、客観性と信頼性の高い情報を入手することが可能となった。

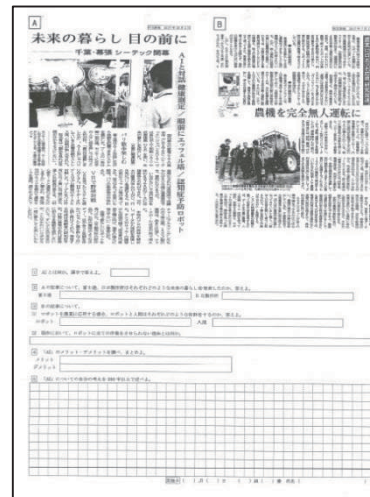


図3 ワークシート

2-3-2 国語での取組2

(科学技術科1年、探究科3年文系)

対象クラスでは、新聞記事を使ったワークシートに取り組んだ。アンケートを実施したところ、新聞を購読している家庭はほんの数軒であった。中には新聞を手にした経験のない生徒もおり、新聞紙をめくる行為そのものに興味を持つ生徒も見受けられた。

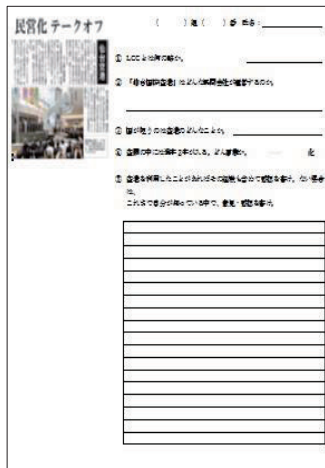


図4 ワークシート

生徒たちは、ワークシートのみで取り組んでいる時は受動的で消極的な姿勢が感じられたが、新聞を渡してみると、めくりながら目にとびこんでくる記事を楽しんでいた。

2-3-3 英語での取組(科学技術科1年)

コミュニケーション英語Ⅰの授業では、新聞のテレビ欄以外の記事からカタカナ英語を抜き出す作業を行った。また、抜き出した単語を調べさせ、自分たちが何気なく話している言葉の真の意味を理解させるとともに、英語への興味・関心を引き出す意図で実施した。

クラスを数グループに分け、制限時間を設けて取り組ませたところ、「探して」書き出すという作業を新鮮に感じたためか、生徒たちは積極的に取り組み、特にノルマを課したわけではないが、抜き出す単語の数を競うグループも見られた。また、自分で見つけた単語には思い入れが強いのか、普段の授業の際に教科書に出てくる新出単語を調べるよりも熱心に調べている様子が見られた。

2-3-4 英語での取組(探究科2年)

コミュニケーション英語Ⅱの授業では、英字新聞を用いたワークシートに取り組んだ。まずは、記事の英文を写し、キーワードとなる単語を抜き出し、最後に記事の見出しを英語でつけた。生徒たちに馴染みのある記事を選んだためか、英文を読んでいる途中で「分かった!」と叫ぶ生徒もいて、楽しんで取り組んでいた。

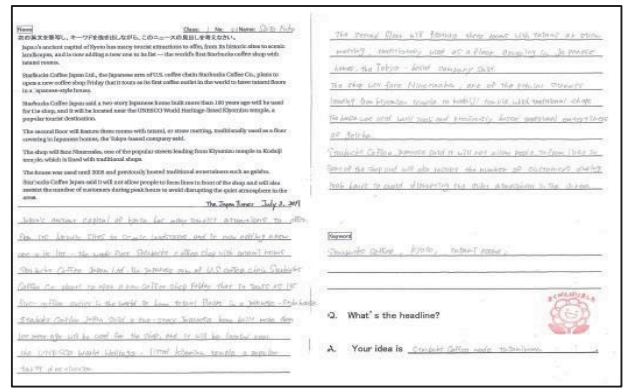


図5 生徒が取り組んだワークシート

2-4 宮城県 NIE 研究大会

1月8日に本校にて宮城県 NIE 研究大会が開かれた。公開授業では、本校国語科の虎岩容子教諭が「NIEとICTを活用したディベート教育」の模擬授業を行った。生徒たちは、河北データベースから論拠となる記事を検索し、教育用 SNS「Edmodo」を活用して、ロジカルワーキングを行い反論の仕方について取り組んだ。生徒たちは、自分と異なる意見を持つ相手にどうすれば自分の意見が伝わるのか、話し方や話の組み立て方の難しさを感じ、継続して学ぶ必要性を感じたようである。

3 その他

本校探究科1年生2名の意見文が読売新聞の投稿欄に掲載された。新聞への投稿は生徒たちも励みになるようで、今後も機会があれば参加していきたい。



図6 新聞に掲載された生徒の意見文

4 成果と課題

昨年度は主に探究科での実施であったが、本年度は科学技術科にも広げることができた。また、委員会活動に NIE 活動を取り入れ、生徒たちが新聞に触れる機会を増やすことができたのも大きな成果であった。

現在は記事に対する自分たちの意見を述べる活動が主であるが、今後は ICT を活用するなどして生徒たち相互に意見を交換する場を設けていきたい。

(担当 教諭 鈴木 理恵)

(6) 仙台市立七北田小学校（平成27・28・29年度実践指定校）

未来を切り開いていく力を育むNIE

1 はじめに

本校は、平成27年度から3年間、NIE実践指定校に認定された。言語活動の充実を図るとともに、社会への関心や情報活用能力を高め、児童自ら未来を切り開いていく力を育てていくことをねらいとして、NIEの実践に取り組んでいる。

2 実践の概要

(1) 新聞に親しむ環境整備

新聞に親しむ環境整備として、校舎2階の多目的スペースに新聞閲覧コーナーと古新聞コーナーを設置し、児童がいつでも自由に新聞を読んだり使ったりできるようにしている。NIE掲示板には、七北田小の関連記事や学習に役立つ記事、掲示委員が作成した新聞記事スクラップなどを掲示している。

また、児童が新聞ワークシートに答えを書いてNIEポストに入れ、校長が丸付けて返却するという取組を、通年で行っている。



【NIE掲示板】



【新聞閲覧コーナー】



【古新聞コーナー】

(2) 全校で取り組む「ことばの貯金箱」

本校では、新聞に親しみながら言語活動の充実を図る取組として、平成26年度2学期から、全校で「ことばの貯金箱」に取り組んでいる。

朝のスキルタイム（NIEタイム）の時間に、新聞から気に入った言葉や写真を切り抜き、ことばの貯金箱に貯めていく。児童は、その中から言葉や写真を選んで台紙（B4判）に貼り、文字や絵などを自由に加えて表現する。台紙に貼る時間は、国語の時間としてカリキュラムに位置付けている。



【1年生と6年生と一緒にNIEタイム】

また、大判のはがきを台紙として使うと、「ことばのギフトカード」として贈ることができる。これまで、他校との交流や熊本地震の被災校を励ますカードを作ってきた。今年度は、本校卒業生で平昌オリンピックのフィギュアスケート競技に出場する羽生結弦選手を励ますため、全校児童がギフトカードを作成した。



【羽生選手に贈ったことばのギフトカード】

(3) 国語の学習で新聞探検

5年国語「新聞記事を読み比べよう」の単元では、メディアである新聞を取り上げ、新聞の特徴や編集の仕方、記事の書き方や写真の役割などを理解し、二つの新聞記事を読み比べて書き手の意図を読み取れることをねらいとしている。単元の導入として、授業当日の新聞を児童に1部ずつ配付し、本校の相澤経利校長が新聞探検の授業を行った。

教材文中の「コラム、解説、投書」などの言葉は、教科書を読んだだけではイメージしにくいですが、実際の新聞で具体的に理解させることができた。児童は、興味を持って紙面全体に目を通し、「自分だけの新聞」として自由に読んだり切り抜いたりして主体的に学習に取り組むことができた。



【新聞探検の様子】

(4) 新聞に投書が掲載された

6年国語「新聞の投書を読み比べよう」の単元では、複数の投書を読み比べて書き手の説得の工夫をとらえるとともに、理由を明確にして投書を書くことをねらいとしている。

教科書の教材文だけではなく、実際の新聞の投書

■「空気」読まず意見堂々と

11歳
(仙台市泉区・小学生)

最近、「空気」というものにとらわれて、自分の意見を堂々と言える人が少なくなっている気がする。人に意見を合わせるだけではないだろうか。

人に合わせてはかきいると、自分に自信を持ってなくなる。私自身、小学3年のころ、みんなと同じ考えに合わせたら、結果は自分の考えが正解だったので後悔したという経験がある。

医師で作家の鎌田実さんは「空気は読まない」という本を書いている。その中で、空気は読むものではなく自分でつくり出すものだと主張している。自分の意見を堂々と言えるような空気をつくり出すことが大事だと思う。

人に合わせてもいいと考える人もいるかもしれない。だが、人に合わせてばかりいると、自信を失うだけでなく、考える力も育たなくなる。

まちがえることを恐れていては何も始まらない。「空気」なんてものにとらわれず、自分の意見を持つことが大事だと、私は思う。

【新聞に掲載された6年生の投書】

も読み比べることで、様々な書き方の工夫があることに気付かせることができた。また、投書を書く前に調査や取材の時間を設定し、構成表に整理させたことで、理由や根拠を明確にして投書を書くことができた。全員分の投書を新聞社に送ったところ、3名の児童の投書が新聞の投書欄に掲載された。

(5) 学びを深める新聞作り

3年生は、社会の蒲鉾工場見学後のまとめとして、個人ごとに新聞にまとめた。

4年生は、国語「みんなで新聞を作ろう」の単元で、実際の新聞も参考にしながら見出しやレイアウトの工夫を学び、グループごとに新聞を作成した。その後、社会の校外学習の新聞作りも行った。

5年生は、総合的な学習の時間「七北田みんなのいちばん☆(星)」で、グループごとに地域で活躍している人にインタビューし、新聞にまとめて泉中央駅ビルに展示した。また、ラジオ番組も制作し、fmいずみで放送した。

6年生は、新聞記者の出前授業で取材の仕方やメモの取り方を学び、仙台自主研修の新聞作りに役立てた。また、社会では、歴史人物新聞を作成した。



【5年生の新聞】

特別支援学級

では、行事の都度の記事を作成し、最後に個人ごとに壁新聞としてまとめた。

3 おわりに

NIEタイムを設定して全校で「ことばの貯金箱」に取り組むなど、NIEの実践に継続的に取り組んできたことにより、新聞に興味や関心を持つ児童が確実に増えてきた。

今後も、新聞を効果的に活用することで、児童の知的好奇心や学びに向かう力を高め、児童自ら未来を切り開いていく力を育てていきたいと考える。

(担当 教諭 今藤 正彦)

(7) 宮城学院中学校(平成27・28・29年度実践指定校)

宮城学院中学校におけるNIE3年目の実践報告

1 はじめに

宮城県NIE実践指定校3年目の目標として、これまで2年間の活動を活かし、(1)学外の活動に積極的に参加すること、(2)実践指定校を「卒業」してからもNIE活動を継続していくための土台をつくること、の二つを掲げた。

3年目は、「朝新聞」、「各クラスへの新聞配布」、「終礼時の新聞記事紹介」、「昇降口での新聞掲示」、「新聞記事コンクールへの全校参加」、「『長崎新聞』作成にいたる一連の取組」を継続して実施した(詳細については「宮城学院中学校におけるNIE初年度の実践報告」『NIE実践報告書 第27号』宮城県NIE委員会、平成28年3月)、「宮城学院中学校におけるNIE2年目の実践報告」「宮城学院中学校におけるNIE活動を取り入れた平和教育」『NIE実践報告書 第28号』宮城県NIE委員会、平成29年3月)を合わせてご参照ください。それに加えて、3年目としての新しい取組として、「新聞社への投書」に挑戦した。

以下、上記の取組の中から、(1)「新聞記事コンクールへの全校参加」2年目の工夫と課題、(2)『長崎新聞』作成にいたる一連の取組』における平和宣言の作成について、(3)「新聞社への投書」、の三つを取り上げて報告したい。

2 「新聞記事コンクール」への全校参加2年目の工夫と課題

昨年度に引き続いて「新聞記事コンクール」(河北新報社主催)の論説部門に全校生徒で参加をした。

昨年度は、日々盛りだくさんの学校生活を考慮して、論説文の作成を夏休み中の課題とした。しかし夏休み中のため、生徒が教師に相談をしたくてもその機会が十分にとれないという問題点があった。

そこで今年度は、社会科の授業時間を2時間程度いただき、授業のなかでまとめることにした。

6月末の前期中間試験後から7月20日の夏休みに入る前の約3週間に実施をした。

今年度も6月の1ヶ月間、各教室に新聞を置き、中学2・3年生が「終礼時の新聞記事紹介」を行った。最初の1時間は、教室に保管していた1ヶ月分

の新聞のなかから一人1日分の新聞を選び、自分の机で広げながら、まず論説として何を取り上げるのかを考えた。それから約1週間後にもう1時間を使って論説文を書いた。その時間に終わらなかった場合は夏休み中の課題とした。放課後の職員室では社会科の授業担当者にアドバイスなどを求める生徒の姿がみられた。

今年度の新聞記事コンクールの応募用紙には、論説をまとめるにあたっての留意点が明記されており、生徒にとってはそれだけでもかなり参考になったが、生徒にはさらに以下の内容をプリントにまとめて、説明をしながら配付した。

(1) 昨年度に論説委員長賞を受賞した本校生徒の論説文を紹介するとともに、あわせて河北新報オンラインニュースの「NIEのページ」に掲載されている過去の入賞作品を読んで参考にすること。

(2) テーマを選ぶときは、結論がほぼ決まっているようなものではなく、いろいろな考え方ができるようなテーマの方が論じやすいこと。具体的な例として、「戦争と平和」「安全保障関連法」「いじめ」「環境問題」「原発問題」「18歳選挙権」(以上、2015年度)、「18歳選挙権」「リオデジャネイロ五輪」「障害者施設殺傷事件と人権」「保育施設への待機児童」「ポケモンGO」(以上、2016年度)などをあげた。

(3) 「朝新聞」や「NIEの新聞記事紹介」で取り上げたことをさらに深めてみること。

(4) 具体的な体験や経験を盛り込むと説得力のある文章になること。例えば、「キリスト教教育週間」の講演や老人ホーム訪問、グローバル・スタディーズ(国際理解教育)の取組など、学校行事を通して経験したことを取り上げて論じること。

(5) 自分の主張を裏付けるデータを新聞などから調べて主張を裏付ける材料とすること。

(6) 自分の主張に予想される反論があればそれを取り上げ、その反論に対してさらにコメントすること。

結果として、防災・教育室賞と優秀賞をあわせて2名が受賞し、評価をいただき本人はもとより、他の生徒の身近な目標ともなり、NIE活動に対するモチベーションの向上にもつながったと考えている。

社会科教員の協力によって、NIE実践指定校を「卒業」した後もこの新聞コンクールへの応募を継続する見通しが持てた。しかし個人の判断ではなく教科としてこの課題の目的や効果を共有し担当者が誰であっても継続させていくために理解を深めていく努力はしばらく必要であろう。また課題としては、じっくり時間をかけて調べてまとめるタイプの生徒にとっては、今年度のように数週間でテーマを決めてまとめるという方法では消化不良となってしまうという点がある。昨年度のように夏休みを使ってまとめるという方法も含めてどのように展開するかは今後検討していきたい。

3 『長崎新聞』作成にいたる一連の取組』における平和宣言に作成について

本校は平和学習を目的として校外研修旅行を長崎で行っている。その研修旅行では、中学3年生の生徒たちがひとつにまとめあげた平和宣言を平和祈念像の前で読み上げる平和式典を行う。

その前提として、生徒一人一人が平和に対する考えを800字～1600字程度でまとめる「平和宣言」を作成するようになって4年目になる。「平和宣言」作成の材料として新聞記事を活用している。



本年度の生徒への注意事項は次の通りであった。
(1) 以下のことについては本文のなかで必ず触れること。

①原子爆弾の投下・唯一の被爆国であることについて。②今年ならではの平和にかかわる動き（例えば、日本国憲法施行70年という節目の年にあたっての「平和」に対する思い）。③これまで平和学習などで学んできたこと、考えてきたこと。④自分自身が「平和」な世界にするためにどのようなことを取り組んでいくか。

(2) 考えるヒントとしてほしいこと。

①8月6日（広島）9日（長崎）、15日（終戦）の次の日の新聞に平和宣言や戦争に対する記事が新聞に掲載されるのでそれを参考にすること。②核をめぐる問題や憲法改正問題など今の世の中で話題となっている出来事を新聞やインターネットで調べて学び、その成果を盛り込むこと。

複数の新聞記事に目を通し、その記事の内容を踏まえた「平和宣言」の作成になった。そうして一人一人がまとめた「平和宣言」を校外研修旅行委員が目を通してひとつの平和宣言にまとめる取組となっている。

4 「新聞社への投書」

NIE実践指定校として3年間取り組んできた中学3年生を対象に、「新聞への投書チャレンジ」と題して、本物の新聞へ自分の考えを投書することを目標に取り組んだ。

生徒には、『朝日新聞社』（「声」）、『河北新報社』（「声の交差点」）、『読売新聞』（「気流」）のなかから1紙を選び、投書することを目標に主張（考え）をまとめることを冬休みの課題とした。

NIE実践指定校「卒業」後も社会に自分の考えを届ける一つの有効な手段として、またこれからも新聞に関心を持ち続けるきっかけの一つとしてくれることを願って今年度はじめて実施した取組である。近日中に投書するべく準備をしていきたい（2018年1月11日現在）。

5 むすびにあたって

3年間のNIE活動は、本校で継続して行っている活動を土台とし、NIE実践指定校としての活動を通して学ばせていただいたことを活用しながら行ってきました。ありがとうございました。今後も発展的に継続させていきたいと思っております。

（担当 教諭 丸山 仁）

(8) 登米市立豊里小学校（平成29・30年度実践指定校）

新聞に親しみ、読解力を高めるNIE

1 はじめに

豊里小学校では、活字で書かれている内容を正しく読み取る力を伸ばすために、授業で音読や言葉の学習に重点的に取り組んでいる。さらに、読解力を高め、全員が教科書等を正しく読んで理解する力を養うことをねらいとして、本年度からNIEの実践に取り組み始めた。

2 これまでの取組

(1) 新聞に親しむ環境整備

児童の実態として、新聞を読んだ経験に乏しく、どんな記事が載っているか知らないといった児童が多かった。そこで、新聞を手にとって自由に見ることのできるコーナーを設置し、壁面に児童の興味・関心を引きそうな記事を抜粋して貼り出すことで、記事を読む機会を増やすことを目指した。



児童が取り組んだワークシートを掲示したところ、興味を持って読む児童が多く見られ、自らがワークシートへ取り組む際の参考にしていただいていた。児童の関心の高さがうかがえたことから、さらに児童の興味や活動意欲を引き出す環境整備に努めていきたい。



(2) 授業での活用（新聞づくり）

授業では、修学旅行や校外学習の学びの成果を新聞にまとめる学習が、4～6年生で継続的に行われている。また、6年生は総合的な学習の時間に登米市の歴史について調べたことを新聞にまとめ、発信している。



(3) 「河北新報データベース」の活用

欲しい情報を入手する手段として、「河北新報データベース」を使用し、ストックされた記事の中から必要としている情報を探し出す学習に挑戦した。学活の授業で、5年児童は自分の生まれた年になどどのような出来事があったのかを調べた。「河北新報データベース」には検索機能が付いているので、児童は自分の興味・関心に従ってキーワードを入力していた。例えば「プロ野球 優勝チーム」「自然災害 東北」と打ち込み検索をかけていた。また、調べた内容をワークシートに書き込んでまとめ、互いに見合いながら意見や感想を交換していた。



(4) ワークシート

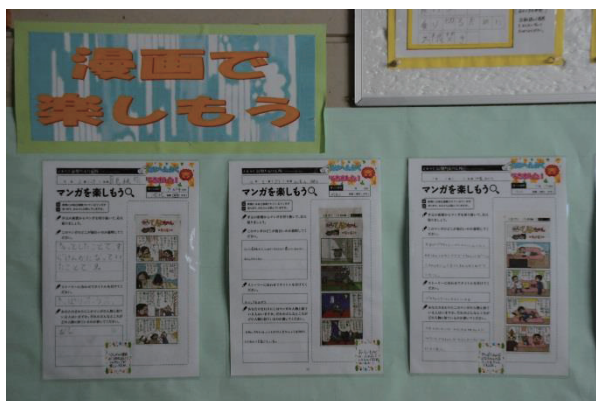
i) 見出しをつけよう

気に入った写真をワークシートに貼り、選んだ理由を記載することに加えて記事の要約を記入し、そこに自分なりの見出しを付ける作業を行った。写真と見出しといった少ない情報でも記事の内容をイメージさせることが可能であることを知る体験となった。継続して取り組ませていきたい。



ii) 漫画で楽しもう

新聞に掲載されている4コマ漫画に興味をもたせることで、新聞を読もうとする意欲付けをねらい、ワークシート作りに取り組ませた。起承転結の構成に着目させながら読ませることで、作者の意図を理解することにつながるができ、読み取りの力を伸ばす一助となっている。



iii) 五七五コメント

記事を読んで理解した内容の要約または感想について、五七五の17文字で表現するワークシートに取り組ませた。児童は、キーワードになる言葉を探して、何度も本文を読むようになり、そのことで活字を読む頻度が高まっていく良さがある。

iv) 「かほくワークシート」の活用

文章を正しく読み取る力を伸ばすために、本校児童が新聞記事を読み取る機会を意図的に設け、自らの力で書かれている内容を正しく読み取る経験を多くしていかなければならない。そこで、「かほくワークシート」を週末課題として児童に与え、家庭学習としてじっくり新聞記事を読む機会を設定している。設問に適合した内容を解答するためには、何度も記事を読み返さなければならないので、文章を正しく読み取るために集中力が増していく良さがある。継続して実践し、学習の成果を上げていきたい。



3 成果と課題

【成果】

1年目はNIE担当が新聞記事を活用して実践を紹介することが取組の中心となった。その中でも、取り組んだワークシートなどを掲示することで、新聞記事の読ませ方や体験学習を新聞にまとめる方法について児童並びに教職員に提示することができた。

継続して取り組んできた新聞作りが、文章の読取や構成を考える上で有効であったことを改めて認識することができ、様々な単元での応用を考える良い契機となった。

【課題】

学校全体として読み取る力を伸ばすという目的を達成するため、組織的に取組を継続していくことが必要である。そのためには、年度当初にNIEの年間活動計画を教職員で共通理解し、授業での活用も視野に入れた実践を計画していくようにする。

また、週末課題として取り組んでいるワークシートは、実践する学年・学級や実施回数を徐々に増やし、軌道に乗せていきたい。

さらに、新聞を活用できる力を児童に培っていくために、新聞をどのように授業に取り入れていけばよいのか実践を通して検証していきたい。

(担当 教諭 菅原 洋一)

(9) 仙台市立八木山小学校（平成29・30年度実践指定校）

新聞に親しみ、考え、判断し、自発的に活動する児童の育成

1 はじめに

本校は今年度からNIE実践指定校となり、新聞を活用した学習の取組を始めた。「新聞を活用した活動を通して、自分の考えを持って、判断し、思考しながら自発的に活動する態度を育てる」ことを目標として設定した。

2 実践の概要

(1) 職員研修

本校では、NIEのことを知っている職員は少なく、初めて取り組む職員がほとんどであった。そこで、河北新報社に協力いただき、NIEについてのオリエンテーションを行った。NIEとは何か、次期学習指導要領との関係などを講義していただき、NIEについての理解を深めた。また、夏休み中の職員研修では、NIE教育コンサルタントの渡邊裕子さん（東北福祉大講師）を講師としてお迎えし、「ことばの貯金箱」のやり方を学んだ。実際に新聞を切ったり、選んだ言葉や写真にコメントを付けたりして楽しく取り組んだ。



(2) 環境整備

9月から4か月間、6紙の新聞を購読することになり、図書室に新聞閲覧コーナーを設けた。児

童が自由に新聞を読めるようにしたので、休み時間や授業中など、興味を持って新聞を読む児童が出てきた。また、古新聞をコーナーの近くに置き、気になった新聞を自由に持ち出して良いことにした。児童だけではなく、授業に活用できるよう職員にも周知した。



(3) 授業での活用

【5年国語「新聞記事を読み比べよう」】

新聞の基本的な読み方を学び、記事を読み比べる単元である。授業の導入で、授業当日の新聞を5年児童全員に配付し、新聞の特徴や編集の仕方、記事の書き方などを学習した。



一人一人が新聞を持つことでじっくりと新聞の構成や内容が理解でき、新聞探検やゲーム、記事探しなどの活動で、児童の新聞への興味・関心が高まった。

【4年国語「みんなで新聞を作ろう」】

この単元の最後には自分たちで取材をして、記事を書き、見出しや割り付けを考えて新聞を作る活動がある。そのために、実際の新聞を単元の導入に見せ、紙面の構成を確認した。

新聞を作る際、見出しや割り付けを参考にするなど新聞を気軽に見ながら活動していた。



【4年「新聞で1分間スピーチをしよう」】

朝の会で行っていたスピーチを自分の興味を持った新聞記事を題材に話すことにした。5W1Hを意識させながら、記事を紹介し、読んだ感想やみんなに伝えたいことを発表させた。

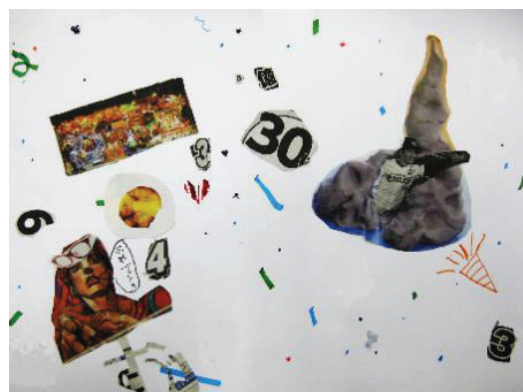
スピーチのワークシートは階段の踊り場に掲示し、全校児童が目にすることができるようにした。友達の紹介する記事に興味を持ったり、繰り返しスピーチを行ったりすることで新聞を気軽に手に取って見る児童が増えた。



【3年図工「コラージュの世界」】

自分の作った粘土作品の写真に新聞から切り抜いた文字や写真などを貼った。

発想をどんどん広げ、仮想の町や宇宙といった世界を自分なりに楽しんで作っていた。



(4) 次年度に向けて

- ONIE実践を行う校内体制の組織化を目指す。
 - カリキュラムへの位置づけを検討する。
 - 教職員間での実践の情報共有や意見交換を行う。
 - 児童の興味・関心を高める環境整備を行う。
- (担当 教諭 石井真紀子)

(10) 登米市立豊里中学校 (平成29・30年度実践指定校)

新聞に親しみ、自己を向上させる生徒の育成

1 はじめに

本校は、平成29・30年度の2年間、NIE実践指定校の認定を受け、本年度は1年目にあた

る。本校は校舎一体型の小中一貫校であり、日常的に異学年と交流することが多く、中1ギャップや生徒指導上の問題行動等が少ない学校である。

生徒は、部活動や学校行事などに意欲的に取り組んでいるが、各種学力調査の結果を見ると、ほとんどの教科で正答率が市及び全国の平均値を下回っており、学力の向上が大きな課題である。

学力の背景には読み取る力が関わっているものと考えられ、NIEの取組においては、教養の深まりや視野の広がりという内面的成長に加えて、語彙力や読解力、思考力など学力面での効果を期待している。

学習意欲が低く、本や新聞もあまり読まない生徒が多いという実態を踏まえて、初年度の取組については、まず新聞に興味をもたせ、親しませることをねらいとし、活動を始めた。

2 実践の概要

(1) 新聞に親しむための環境づくり

多くの児童・生徒が目にし、自由に手に取って読めるよう、中央階段付近のオープンスペースと、メディアルーム(図書室)の2箇所に「NIEコーナー」を設置している。複数の新聞の同一日の一面を並べて掲示したり、生徒が関心をもちそうな記事を集めたりするなど壁面も活用している。お昼休みに新聞を読むことを日課にする生徒もいれば、通り掛かりにふと手に取る生徒もいる。少しずつ、新聞がある生活になじんでいく様子が見られている。



【NIEコーナーの様子】

(2) 教職員の研修(8月21日)

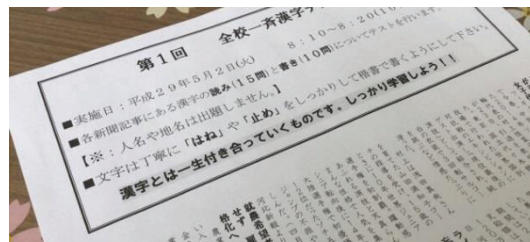
本校を会場に、県内小中高等学校の教員が集まり、NIE地区研修会が開催された。日経新聞仙台支局長である川合知氏の講話や、コンサルタントの渡邊裕子氏によるワークショップが行われた。本校では校内研修を兼ねて参加し、NIE教育についての理解を深めることができた。



【NIE地区研修会の様子】

(3) 一斉漢字テストの取組

本校では年間を通して5回、6～9年生と教職員を対象に「一斉漢字テスト」を行っている。1週間前に学習材(新聞記事やコラム2～3種類)が配布され、その中から漢字の読み・書き合計25問が出題される。朝読書の時間帯にテストを行い、放課後、一斉漢字実行委員が採点する。結果は学級、部活動ごとに集計されて貼り出される。満点者も発表され、校内1位の学級にはトロフィーが渡される。出題範囲が決まっているため、一生懸命勉強した小学生が、中学生より高い点数を取ることもある。児童・生徒は、対策プリントを作ったり、記事の読み合わせを行ったりしながら意欲的に取り組んでいる。新聞にあまり興味のない生徒が新聞に触れる貴重な機会にもなっている。

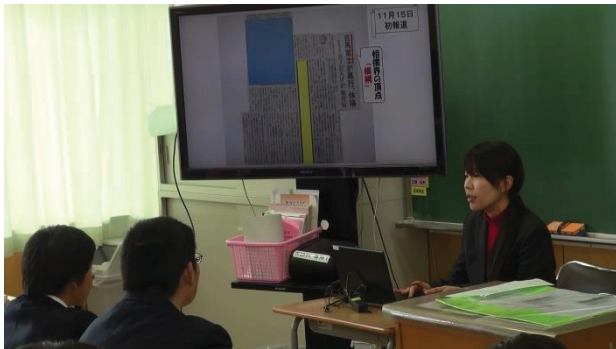


【一斉漢字テストの学習材】

(4) 授業実践 (国語科研究授業)

7年国語「ニュースの見方を考えよう」

本教材は、「言葉とメディア」の学習系統の中で、メディア・リテラシー教育の入門として位置付けられている。単元の発展学習にあたる本授業では、生徒の実態や関心を踏まえ、当時、連日のように報道されていた「日馬富士暴行事件」について新聞記事を読み比べる学習を行い、情報との付き合い方を主体的に考えられるようにした。



① 読み比べ —日馬富士暴行事件—

まず、初報道から現在までの経過を、記事を大型テレビに映しながら紹介した。時系列で複数の記事を読んだ後、同じ日の二つの新聞の記事を読み比べた。表現の仕方や着眼点の違いなど、個々で気付いたことを付箋に書いて貼り、その後グループで意見交流を行った。同じ意見をまとめたり気付いたことを書き加えたりしながら、各新聞の記事の特徴について理解を深めていく姿が見られた。



【グループでの意見交流】

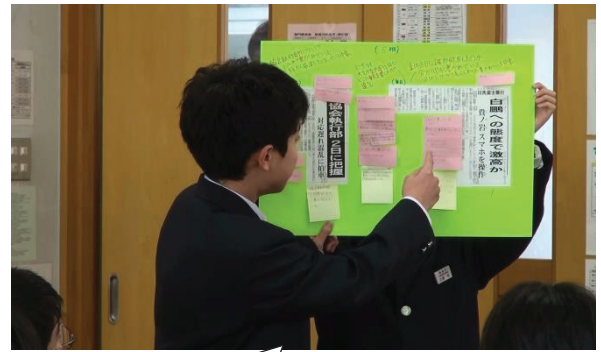
- C1: こっちの新聞は、なぜ事件が起きたのかを伝えようとしている。
C2: 「激高か」って書いてるね。「か」って。
C3: たぶんそうじゃないかって…。推測している。
C2: それいいね!

【グループでの意見交流】

- C1: こっちの新聞は「関」って付いてるけど、こっちは付いてない。
C2: 「関」って何？
C3: うーん。人称というか…。
C4: 書いところか。発見した違い。

② 話し合い —編集者の意図・ねらい—

意見交流の内容をもとに、各新聞の記事の意図やねらいについてグループで話し合いを行った。その際、考えを広げたり深めたりすることが目的なので、意見をひとつにまとめなくてもよいことを伝えた。班の代表者が発表し、全体で共有した。各班で見つけた違いや特徴を、各新聞の記事を指し示しながら説明し、読み取った意図やねらいについて、自分たちの考えを発表することができた。



【発表】M新聞は、ただ殴っただけでなく、(原因となった) 貴ノ岩の行動についても伝えようとしていると思いました。K新聞の方は、協会の動きについてで、事件を知っているのに対応が遅れたことの重大性を伝えようとしていると思いました。二つの新聞の記事を読み比べて、大まかな内容は同じでも、どこに重点を置いているかが違うことに気付きました。

生徒は、新聞記事の読み比べを通じて、各新聞の特徴や違いに気づき、自身の情報の受け取り方について考えを深めていた。「いろいろな新聞を読んでみたくなった」「おもしろかった」「これからのニュースとの付き合い方に生かしたい」などの感想が多く見られた。

3 成果と課題

(1) 成果

- ・NIEコーナーを設置したことや、新聞を活用した授業を行ったことで、新聞に興味をもち、読んでみようとする生徒が少しずつ増えてきた。

(2) 課題

- ・全体で取り組める活動が少なかったことから、朝や帰りの時間帯の活用も視野に入れ、全体で継続して取り組める活動を検討していきたい。
- ・教科での実践が国語に偏ったことから、様々な教科や領域での実践を検討・実施したい。
- ・NIEコーナーの設置場所や掲示を工夫し、より多くの生徒が新聞に親しめるようにしたい。

(担当 教諭 山家 優子)

(11) 宮城県仙台三桜高等学校（平成29・30年度実践指定校）

探究学習におけるN I Eを活用した実践報告

1 はじめに

本校は今年度からN I E実践指定校となり、1学年の「総合的な学習の時間」における探究学習にN I Eを導入している。新聞を活用した探究学習は昨年度から実施していたが、今年度はN I Eを導入することで生徒がより幅広く新聞を活用することをねらいとした。

2 実践計画

新聞を活用した探求学習は昨年度に引き続き2年目で、本年度も新聞を読み、新聞から得た情報をヒントにさらに情報を収集し、それらをオリジナルな新聞記事として表現する活動を行った。また、N I Eを導入することで、様々なレベルの社会問題についての興味・関心・知識を持たせることをねらいとした。

探究学習の概略は、各学級で8人程度のグループを作り、グループで探求テーマや情報を共有し、協力して情報収集を行い、最終的に新聞として発行し、その発表を行う、というものである。まず、N I E導入以前の5～8月にかけては、生徒各自が新聞を読み、興味や関心を持った社会問題に関するスクラップノートを作成し、テーマを絞り込むこととした。

9月からはN I Eを導入し、幅広い情報収集や、論調、レイアウト等の見本として活用することとした。年明けの1月に行われる発表に合わせて、主に情報源として、また情報を発信する媒体の例として新聞を活用することを主なねらいとした。

3 実践概要

(1) 情報源としての新聞活用

N I Eを導入するにあたって、可能な限り多くの生徒が自由に新聞と触れ合い、日常的に新聞を目にする機会を増加させるため、1階昇降口と4階1学年フロアに新聞コーナーを設置した。

昇降口前のコーナーには、新聞の一面記事を月曜日から金曜日まで張りだすことで、重要度や注目度の高い記事を可能な限り多くの生徒が日常的に目にする環境を作れるよう努めた。

また、4階1学年フロアには当日配達された6紙を置き、探究学習に取り組む1学年の生徒がより自由に、より幅広く、またより深く新聞記事を通じて情報を得ることができるような環境づくりに努めた。休み時間や放課後等の空き時間を利用して自由に新聞を手にとって読む姿や、同じ班のメンバーと協力して複数の新聞を読むことで幅広く情報を集める姿などが見られた。また、複数の記事を複数の生徒が読むことによって、横断的、多面的な視点から新聞記事の情報やそれに対する意見・感想を伝え合う姿も多々見られた。



(2) 情報媒体としての新聞活用

本年度の探究活動では、新聞を情報源として活用するだけでなく、情報を分かりやすく発信する媒体としての側面にも注目し、調べた情報やそれに対する考えを効果的に伝えるからくりを学ぶきっかけとしても新聞を活用した。

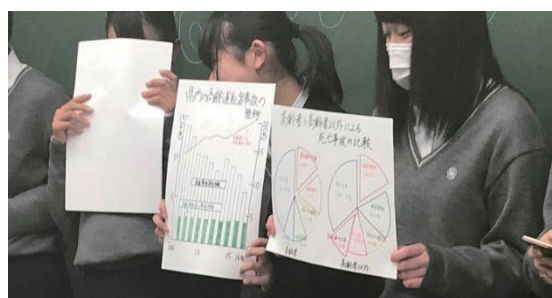
本校では、N I Eの導入に加えて新聞記者を招待し新聞の構造や機能に関する講演を行うことで、新聞の持つ、情報や意見を効果的に伝え

るための機能を生徒がより明示的に理解できるような機会を設けた。実際に記者の方から、記事の取り上げ方や書き方、さらには論調が及ぼす影響などを講義を受け、生徒はよりメタな視点から新聞と接する姿勢が見られた。特に、講演会当日の朝刊の一面記事を例として取り上げ、各紙の記事の選び方から、紙面の割き方、論調の違いなどの比較は反響が大きく、実際に新聞を読み比べ、講演会以前と比べより多面的な視点から議論する生徒が数多く見られた。実際に新聞を目にすることで、講演会で得た内容を知識として身につけるだけでなく、体感させることができたと思われる。

また、紙面構成についても講義があり、内容のみならず、情報の提示の仕方についても生徒は理解を深めることができたようだった。自分たちの意図したことがより正確に伝えられるよう、記事の内容と同じように構成に関しても細心の注意を払いながら吟味する姿が見られた。



1月には新聞のクラス内プレゼンテーションを行った。各班の新聞について新聞の見出しやグラフ・表などを書いたポスターを用いながら、テーマ、調査結果、提言などを簡潔に発表した。プレゼンテーション形式の発表をすることで新聞では表せないような視覚的な効果を取り入れるなど伝え方に工夫が見られ、同時に新聞と比較することで新たに新聞の持つ利点に気付くことができたという感想もあり、数多くの「気づき」を与えることができたように思われる。



4 成果

- ・昇降口と1学年フロアに新聞コーナーを作ったことで、新聞に親しみ、自発的に新聞を読み活用する生徒が増えた。
- ・複数の新聞を読み、様々な論調に触れることで、多面的に物事を見る姿勢が養われた。
- ・班別活動を通して、相手に伝わるように説明する力が身につく、生徒同士のコミュニケーション能力の向上につながった。
- ・記事作成の際に、情報をインターネットだけに頼るのではなく、クラス内でアンケートをとるなど、独自に調査する姿勢が身についた。
- ・単なる「調べ学習」に終わるのではなく、実際にどのような解決策が考えられるか提言する段階まで深めることができた。

(担当 教諭 戸田 道彦)

2 部会活動実践報告

(1) 宮城県NIE推進委員会・小学校部会

平成29年度 小学校部会報告

仙台市立七北田小学校 教諭 今藤 正彦

1 新聞活用授業について

小学校部会では、平成25年度から、5年国語の「新聞記事を読み比べよう」の学習において、児童全員に新聞を配り教材として活用することで、NIE活動の推進を図っている。

昨年度は、部会運営委員が所属しない学校も含め、県内23校に1613部の新聞を提供した。

2 今年度の取組

今年度は、県内34校に2688部の新聞を提供した。また、指導案のデータや提案授業のDVD、版違いの新聞のカラーコピーと号外を準備し、希望する授業者に提供した。実施した学校は、下記のとおりである。

柴田小、船岡小、大川小、青生小、松島第一小、荒巻小、柳生小、八木山小、中野栄小、北仙台小、幸町小、中山小、向陽台小、片平丁小、上愛子小、岩切小、寺岡小、茂庭台小、東六番丁小、秋保小、沖野小、栗生小、根白石小、長町南小、東長町小、荒町小、鶴巻小、高森東小、八本松小、広瀬小、鹿野小、八木山南小、西多賀小、七北田小

<成果>

- ・昨年度の仙台市教育課程研究協議会で本取組について発表したことや、仙台市内の小学校に新聞無料提供の文書を配布したことなどにより、提供部数が大幅に増加した。
 - ・河北新報だけでなく、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞を活用した学校が複数あった。各新聞社の教材用申込書を事前に準備して対応した。
 - ・本実践を複数回行っている先生は、小学校部会の指導案をアレンジして独自の工夫を加えていた。
- <課題>
- ・提供部数増により、小学校部会の予算を大幅に超過した。本事業継続のため、新聞代を確保したい。
 - ・実施報告書に、「同日他社の新聞を比較させたい」「子ども新聞を活用したい」という感想が複数あった。児童一人一紙の条件で、複数紙や小学生新聞の購読について検討したい。

- ・4月に新聞無料提供を申し込んだが実施しなかった学校が6校あった。また、指定日に新聞が配達されないトラブルが2校あった。

3 次年度に向けて

次年度は、小学校部会として3000部の新聞提供を計画しており、NIE活動のより一層の推進を図っていきたいと考える。



七北田小の新聞活用授業の様子



片平丁小の掲載記事 (2017. 6. 27 河北新報朝刊)

(2) 宮城県NIE推進委員会・中学校部会

平成29年度 中学校部会報告

発信力を育てるアクティブラーニング ～ 英語教育とNIE ～

大崎市立岩出山中学校 教諭 齋藤 美佳

I はじめに

生徒が主体となって、他者と関わり合いながら英語で発信する力を身に付けるためのアクティブラーニングの実践を紹介する。

アクティブラーニングを授業に取り入れることによって変わるのは、知識や技能をどのように身に付けていくかという学びの過程である。その学びの過程において、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」という三つの視点で生徒たちの学びの充実を図るために新聞を活用する。

社会の縮図と言われる新聞を活用することで、世の中の出来事について考えたり、自分の生き方を振り返ったり、さらには、自分の考えや思いを発信したりすることができる。また、各記事には、興味や関心を高める見出しや写真などがあるので、生徒も記事の内容に迫りやすい。よって、新聞の活用は、学びの充実につながると思う。

II 主な実践の概要

1 題材名: My Opinion (第2学年)

(1)ねらい

身近な話題について、自分の考えや思い、理由などを伝える英文を正しい語順や語法で3文以上書く。英語の音声の特徴をとらえながら、そのレポートの英文を聞き手に正しく伝える。【書く・話す】

(2)生徒の作品

・生徒A：鳴子ダム60年を祝う記念イベントでフルート奏者がダム下で演奏を披露した記事

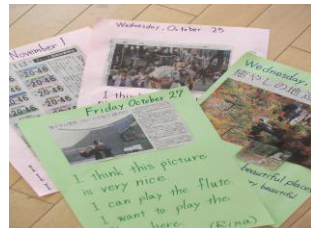
I think this picture is very nice. I can play the flute.

I want to play the flute here.

・生徒B：大崎市岩出山で9月に開催される政宗公まつりを紹介する記事。

I think that this picture is cool. I know Masamune-ko festival. My friends and I take part in it every year.

I hope it will become a famous festival in the world.



2 題材名: Poems (第2学年)

(1)ねらい

新聞から魅力的な写真を選び、決められたルール(五行詩)に従って、英語で詩を書くことができる。作成した詩を互いに伝え合い、詩の内容を理解することができる。【書く・読む】

(2)ルール(教科書 New Horizon より)

Line 1 : 話題を1語で

Line 2 : 2語加える

Line 3 : 3語で描写

Line 4 : 気持ちや情景を4語

Line 5 : 話題を1語でまとめる

(3)生徒の作品

・生徒A (岩出山凍豆腐) ・生徒B (美術作品)

Tradition

Traditional tofu

It's our treasure

We should keep up

Forever

Art

Night sea

Many cute jellyfishes

This art is great

Beautiful



III おわりに

様々な分野の情報が印象的な写真付きでタイムリーに収集できるという新聞の魅力によって、生徒の学習意欲が高まり、「主体的な学び」ができる。また、生徒同士の協働作業や関わり合いによる課題解決型の学習により、自己の考えがさらに広がる「対話的な学び」ができた。この学年の生徒たちは、新聞を活用した学びを2年間継続している。習得した知識・技能を活用したり、自分の思いや考えと結び付けたりしながら学び続けている生徒の姿から「深い学び」につながっていると考える。

「新聞は毎朝届く百科事典」と語った人がいた。新聞記者の熱心な取材のもとに書かれた記事に目を向け、それを活用して学ぶことは、知識基盤社会に生きる生徒たちにとって重要である。

(3) 宮城県N I E推進委員会・高等学校部会

平成29年度 高等学校部会報告

宮城県塩釜高等学校 教諭 平居 高志

日常的な活動はなかなか出来ずにいるが、今年も高校部研修会だけは実施することができた。

《準備について》

高校部研修会を開催するに当たり、今年は二つの点で改善を試みた。

例年、高校部会として文書を出しても、なかなか職員に周知されないという現状があるため、今年は、ささやかな改善として、チラシを作成ことにした。事務局で全教職員分を印刷して、各学校に送付するのが最もよいとは思ったが、大規模な作業とお金が必要になるため、とりあえず今年は各校に1枚送付し、掲示や増刷を各校に委ねることにした。

また、某支援学校の教諭から、支援学校がN I Eに参加する余地はないのか、という質問があったため、事務局と相談の上、同じ県立学校というくくりで高校部会の一部として考えることにし、本研修会についても案内文書を送付した。

《当日について》

日 時：11月22日(水) 15:00～

場 所：河北新報社1階セミナールーム

内 容：実践報告と講演

《実践報告》

「ICTを使ったディベートの授業」

仙台城南高等学校 教諭 虎岩 容子 氏

《講演》

「“つなげる”メディアをめざして」

河北新報社 論説委員 寺島 英弥 氏

残念ながら支援学校からの参加はなかったが、参加者数は昨年よりも2名増えて11名となった。チラシの効果なのか、企画の魅力なのか、偶然なのかは定かでない。

《実践報告》は、11月8日に仙台城南高校で行った宮城県N I E研究大会での公開授業について、授業者・虎岩先生からダイジェストで報告してもらったものである。現代文の授業で、新聞記事をきっかけにディベートを行い、それをEdmodoというアプリを通して発信もする、という刺激的な実践であった。生き生きと生徒がディベートに参加し、堂々と意見を述べるという公開授業当日の臨場感は伝わりにくかったが、N I Eを超えて、新しい授業のあり方の可能性を提示していただけたと思う。

《講演》では、寺島英弥氏がアメリカで学んだシビック・ジャーナリズムの手法や精神を元に、ご自身がどのような取材・執筆活動をしてきたかということが、豊富な事例とともに語られた。

氏は、新聞の購読者数が減少しているという現実を前に、読者が新聞から離れたのではなく、新聞が読者から離れたのではないかと考える。そしてそれを克服するために、上から目線で「客観的」な報道をするのではなく、弱者の声を代弁し、社会の中で人と人とのつながりを作っていくことこそが新聞記者の仕事だ、とする。その具体化として語られたのが、犯罪被害者や自死者の遺族、ALS(筋萎縮性側索硬化症)という難病の患者への取材であった。

内容はもとより、執筆者本人による記事の朗読がまた好評であった。終了後は、会場に残って寺島氏に質問する何人もの参加者の姿があった。

平成29年度 宮城県N I E推進委員会高校部研修会

河北新報の**最強** 論説委員登場!

寺島 英弥(てらしまひでや)氏が
“つなげる”メディアの役割 を縦横に語ります。



1957年、福島県相馬市生まれ。早稲田大学法学部卒業後、河北新報社に入る。02～03年にフルブライト奨学生として米国の地方紙を調査。東家の暮らし、農漁業、歴史などの連載を長く担当し、スバイクタイア選抜キャンペーン、「このころの伏流水 流の祈り」(新聞協会賞)、「オリーブの道」(四)などに携わる。11年3月から東京某大手紙の現場を取材し、連載「ふんばる」、ブログ「余震の中で新聞を作る」などを執筆。著書に『シビック・ジャーナリズムの挑戦 コミュニティとつながる米国の地方紙』(日本評論社)、『怒から生をつくる「河北新報」編集委員の奮闘記(300日)』(講談社)、共著に『地域メディアが地域を変える』(日本経済評論社)などがある。

11月22日(水) 15:00～17:00 河北新報社1階セミナールーム
(仙台市青葉区五橋1-2-28 TEL:022-211-1331)

参加費無料 申し込みは、学校ごとにとりまとめ、別添様式で河北新報社防犯・教育課まで(Fax)。
終了後、懇親会(3000円)を実施します。もちろんぜひご参加ください。11月17日(金)締め切り。
駐車場がありませんので、お車でお越しの際は、近隣の有料駐車場をご利用ください。
問い合わせ:塩釜高校キャンパス 平居高志(ひらいたかし) 022-352-0183

2 大学からの報告

子どもの意欲をかき立てる、NIEの授業づくり

NIE教育コンサルタント 東北福祉大学 渡邊 裕子

1 はじめに

本学では、「NIE」の講義が通年で履修できる（平成22年4月から）。当初は、認知度も低く履修者はわずか10人不足と、存続が危ぶまれた年もあったが、今や多い時には70名を超す大所帯となり、嬉しい悲鳴をあげている。しかも、学生の学ぶ意識が年々高くなっており、おかげで授業の質も向上。互いに切磋琢磨の意欲的な取り組みには、毎回感心させられる。

授業の前期は「NIE活動論」。NIEの基礎的な知識を学んでいく。また、後期の「NIE活動教材研究」では、より実践的な内容を学んでいく。ここでは、学生たちが特に意欲的に取り組んだ後期内容の「道徳の指導案づくり」と「道徳の模擬授業」について報告する。

2 「道徳」の指導案づくり

後期の授業テーマは、「子どもの意欲をかき立てるNIEの授業とは」。到達目標は、①新聞を活用したNIEの授業案を作ることができる。②新聞を活用したNIEの模擬授業ができる。③子どもが意欲的に取り組めるNIEの授業とは何か分かり、それを説明することができる。以上の三つを設定した。

授業では、「NIEでどんな授業ができるか」を探っていきながら、まずは①の道徳の授業案づくりに挑戦した。

「子どもに読ませたい記事探し」ということで、道徳で使えそうな記事を前もって探し、それをスクラップしていく。ある程度貯まったところで、その中からこれぞと思う一枚を選んで、道徳での教材化を進めていく。

以下の①～④がその活動の様子だ。

- ①まず、なぜ道徳教材としてその記事を選んだのかをグループ内（4人一組）でプレゼンし合う。
- ②次に、その記事を使って道徳の指導案を作っていく。指導案は略案だが、対象学年、授業のねらい、

内容・項目、授業の導入・展開・まとめ、評価を書き、他にワークシートや板書計画なども付けることとした。出来上がったら、グループの人数分印刷して、互いにプレゼンし合い、その後、指導案検討会に移る。

③②の検討会で指摘されたことを踏まえ、指導案を修正。次の授業でそれを持ち寄り、その中から「グループ一押し」の指導案を選んでいく。

④グループで選ばれた学生は、次は全体の前でプレゼン。最終的には、その中から「道徳指導案ベストワン」を決めていく。選ぶ側には、選んだ根拠を明確にし、それを分かりやすく説明することが課せられている。

ここまでの、指導案づくりの一連の流れだが、学生たちは、子どもたちに読ませたい記事は見つかったものの、それをどう教材化していったらいいのかが分からず、四苦八苦しながら様々に議論していった。「子どもの目を惹きつけるために、導入では記事の写真だけを使ってみてはどうか」「記事を読んで感想を書くだけでは国語になってしまう」「中心発問を記事と関連させるには、どういう発問が適切か」等々、実に熱心な議論がなされた。

授業後の感想に「道徳で記事を使おうと思っても、すぐにそのような記事に出合えるわけではない。これからはもっと視野を広げて新聞を読んでいきたい」とあった。どうやら、彼らにとって指導案もさることながら「記事探し」の方が想像以上に大変だったようだ。それもそのはず、これぞという記事に出合うには、やはり毎日、新聞に目を通して選ぶセンスを磨いておかなければならない。彼らはそのことを痛く習得したようだった。

3 「道徳」の模擬授業

かつて、私が道徳で使った「一つしかなかった決勝の記事」（朝日新聞）という記事で指導案を作らせ、前回のようにベストワンを選出させた。今回は甲乙つけがたく2名が最終に残った。ここでは紙面

の都合上、授業者1名分（T.T君）の自評と授業後の検討会の様子を紹介する。

*授業者からの自評

自分が特に工夫して臨んだ板書と動画使用について、評価していただけたことが嬉しかった。反省点や改善策では、もっと多くの子どもの意見や考えを聞くための工夫が必要というアドバイスをいただくことができた。

今回、模擬授業を終えて感じたことは、この資料に出会い、そしてこれを用いた授業ができて良かったということである。道徳の「感謝」という価値項目にぴったりの記事だった。今回、全員の前で模擬授業を実践できたことや検討会でたくさんのご意見をいただいたことは、教師を目指す自分にとって一生の宝物になった。ありがとうございました。

*授業後の検討会で話し合われたこと

（良かった点）「机間指導中の声掛けが適切で意欲が喚起された」「授業で使われた動画が価値を温めるのに適していた」「発問が短く、分かりやすかった」「終始、授業が穏やかな雰囲気に進んだ」「子どもたちの身近な話題から資料に繋げたことで、導入から展開への流れがスムーズに行った」「板書が構造化されていて分かりやすかった」「教師が主体になりがちだが、児童の発言をうまく取り上げて、授業が進んでいた」

（反省点、改善点）「板書のスピードが上がると、もっと多くの時間を子どもの意見を聞くことに費やすことができる」「導入は多くの子どもに発言をしてもらおうチャンス。もっと手を挙げさせたり、振ったりしてもよかったのでは」「机間指導中に、波線を引いたり丸をつけたリ支援することで、更に発表の意欲を持たせられたのではないかな」

4 おわりに

学生たちは、子どもたちに読ませたい記事をどう教材化していったらいいのかを、様々に議論していた。「子どもの目を惹きつけるために、導入では記事の写真だけを使ってみてはどうか」「記事を読んで感想を書くだけでは国語になってしまう、中心発問の記事と関連させてどこにおくか」等々、実に熱心な議論がなされた。

指導案は、いわばテレビの番組づくりで使われる

台本のようなもの。教室の子どもの動きや声、顔の表情をあれこれ頭の中で映像化させながら作っていくのが、なんとも面白い。授業者としては、ある意味それは醍醐味でもある。今回の指導案づくりと模擬授業の感想に、「教員になったら、自分の指導案で早く授業をしてみたい」が、結構あった。終わった後のそれぞれの満足げな笑顔を思い起せば、それもまんざら嘘でもなかろうと、嬉しくなる。もちろん、授業づくりの醍醐味を味わうまでには、まだまだほど遠い道のりであろうが、諦めることなく追及して行ってほしい。

本学でNIEの授業がスタートして、まもなく10年になろうとしている。この授業で学んだ卒業生は、全国あちこちの教育現場で自分のペースで「NIE」を実践してくれている。ここからまた、新年度4月に教員としてスタートする卒業生を送り出した。NIEを学んだ学生がNIEの次世代の担い手として、着実に育っている。頼もしい限りだ。



第5学年 道徳学習指導案略案

授業者：東北福祉大学 T. T

- 1 主題名 「家族への感謝」
- 2 本時のねらい
資料から母の想いを考え、知ることを通して、家族への感謝の気持ちを育むこと。【B-8】
- 3 資料名 「一つだけなかった決勝の記事」
- 4 学習指導過程

段階	主な学習活動と発問	◎指導上の留意点と教師の支援
導入 5	1 普段、お母さんにしてもらっていることを思い出し、発表する。 ・ご飯を作ってもらっている。 ・宿題を教してもらっている。 ・習い事の送り迎えをもらっている。	◎ワークシートを配布する。 ◎お母さんにしてもらっていること、お世話になっていることを想起させ、自由に発表させることで、資料への方向付けをする。
展開 35	2 資料「一つだけなかった決勝の記事」を読んで話し合う。 発問① お母さんはどのような想いでスクラップ帳を作っていたのでしょうか。 ・子どもの頑張る姿を残しておきたい。 ・子どもの頑張りがうれしい。 ・自分もスクラップ帳を作って応援したい。 発問② お母さんはなぜ決勝戦の記事を貼っていなかったのでしょうか。 ・お母さんもくやしくて、のせられなかった。 ・息子のくやしい気持ちを考えてのせなかった。 ・子どもがくやしがる姿をとっておくのが辛かったから。 発問③ (中心発問) 記事のコピーをスクラップノートにはさみ、仏壇に置くとき、高瀬さんはお母さんにどんな言葉をかけたのでしょうか。 ・お母さん、ぼくのことを気にしてくれていたんだね。ありがとう。 ・ぼくはもう気にしていないよ。だから、記事をはさむね。 ・こんなにぼくのことを応援してくれていたんだね。ありがとう。 発問④ みんなのお母さんはいつもどんな気持ちでお世話をしてくれているのでしょうか。	◎教師が資料を範読し、児童にはそれを目で追わせる。 ◎掲示物を用いて、登場人物を確認する。 ◎赤鉛筆1本と資料以外の物はすべて机の中にしませることで、より集中して資料に向き合うことができるようにする。 ◎印象に残った部分には赤線を引くよう指示する。 ◎「高瀬さんの球児時代のすべての記事がきれいに貼ってあった。」ということを意識させることで、母の想いを想像させる。 ◎なかなか考えが出てこない場合は、試合の敗れたときの高瀬さんとお母さんの気持ちを読み取らせることで、考えやすくする。 ◎ワークシートに高瀬さんがどんな言葉をかけたかと思うかを書かせる。 ◎ワークシートに書いたことをペアで発表させた後、全体で発表させる。 ◎意図的指名で、より多くの児童の考えを聞くことができるようにする。 ◎導入で話し合った、「お母さんにしてもらっていること」について、それはどんな気持ちや想いがこもっているのかを考えさせる。
終末 5	3 動画を見る。 4 今日の授業で印象に残ったことや考えたことをワークシートに書く。	◎動画資料（銀のさら）を用意する。 ◎オルゴールを流すことで穏やかな雰囲気の中で価値を温めながら本時のまとめをさせる。

「NIE活動論」「NIE教材研究」を受講して

東北福祉大学 4年 村岡 夏実

1 はじめに

本学では、現在「NIE活動論」「NIE活動実践」「NIE教材研究」の授業を毎年履修できる。開設は平成22年4月。開設以来、渡邊裕子先生が指導している。先生は長年中学校現場でNIEを実践してきた。またその一方で、宮城県初代NIEアドバイザー（日本新聞協会）としてもNIEの発展に尽力してきた。筆者は聴講を含めて約2年間、この授業でNIEを学んだ。元々「新聞は難しそう」と毛嫌いしていたのだが、この授業を受けていくうちに、いつしか新聞の魅力に取りつかれていった。

2 NIEの講義について

教室には新聞5紙が受講生分毎回届けられる。学生は一人ずつ、好きな新聞を手に取り、丸ごと読むことが出来る。授業の初めに4人グループを作り、まずは5紙の読み比べをする。一面の読み比べから始まり見出しや写真の比較、社説の読み比べなどその日の紙面をじっくりと読んでいく。また、個々の気になる記事の中から一押しの記事を選び、それを互いに紹介し合う。

そして、新聞の読み方や、新聞活用の意義、NIEの歴史と今日の課題など実践例などを交えながら様々な学んでいく。中でも「ことばの貯金箱」（4を参照）「つぶやきNEWS」「ことばのギフトカード」といった渡邊裕子先生が提唱しているワークショップは、とても興味深く、教員になったらすぐにも実践してみたい内容だ。熊本の震災時には、実際に作った「ことばのギフトカード」を先生が現地まで行って届けてくださった。



熊本城前の駐車場で働く男性（後方は崩れた石垣）

新聞には様々な可能性があることを学び、新聞を使って自分の気持ちを届けられたことが新鮮だった。

3 新聞にのめり込んで「NIE」を卒業論文に

前期の「NIE活動論」の中では、日本新聞協会初代NIEコーディネーターの妹尾彰氏が掲げたNIEのねらいについても学んだ。そのねらいとは、

1. メディアリテラシーの育成
2. 新聞から生き方を学ぶ「人間教育」
3. 文字離れ対策

の三つの柱である。渡邊先生の数々の実践例を通してたくさんのことを学ばせてもらったが、特に印象に残っている授業がある。それは、上記の「2」の「人間教育」をねらいとした道徳の授業だった。正直、新聞記事一つでここまで心揺さぶる授業ができるのかと、鳥肌が立つほどの衝撃を受けた。「新聞で『生き方』を学ぶとはこういうことなんだ」と納得させられた。先生はよく「心揺さぶる記事は何年経っても色あせない。そんな記事を手繰り寄せる力を養ってほしい」と語り、一方で「新聞は生もの。新聞には教科書にはないリアルタイムの話題が満載である。これを授業で使わない手はない。それを生かすことで子どもの目の輝きが変わる」とも。

毎回NIEを熱く語るそんな先生の姿勢に、筆者はいつしか「この熱い思いを直接引き継いでいきたい」と思うようになっていった。そこで、卒業論文はNIE教育について書くことと決めたのだ。思えば20年間新聞嫌いだった、私である。

論文の詳細については割愛するが、渡邊先生へのインタビュー調査の中で特に興味深かったことをここに記しておきたい。それは「NIEの醍醐味は新聞を丸ごと広げるところにある。一つの記事との出会いから人生が変わることもある」という話だ。実際、先生は社会人になってから運命の新聞記事と出会ったことで、学校の教員を目指し、その夢を叶えた方であった。「あの記事と出会わなければ私は教員になっていなかった…」と、先生は懐かしく振り返る。一つの記事の重みをつくづく考えさせられる話だった。

4 地域で「ことばの貯金箱」ワークショップ開催

震災後、私たちのゼミでは社会活動の一環として沿岸部の子どもたちを集めて「ことばの貯金箱」のワークショップを行った。

「ことばの貯金箱」は渡邊先生が提唱している活動だが、新聞丸ごとから好きな言葉や写真を切り抜

きそれをワークシートに自由に貼りつけて、そこに自分の気持ちを表現していく、という内容だ。集まった子どもたちは、普段、新聞に触れることがないという子どもたちだったが、気に入った言葉や、写真、4コマ漫画などを次々と切り抜き、夢中になって作品を作っていた。活動後には「楽しかった」「もっとやりたかった」「また来たい」という感想を書いてくれた。

自分の小学時代を振り返っても「新聞は大人の読み物」と決めつけていたように思うが、作業しながら時々記事に立ち止まって読んでいる子どもたちの姿に、決して新聞は大人のためだけの読み物ではなかったと、実感できた。新聞への敷居を低くしてあげること、新聞を身近に感じてもらうことはできると分かった。スモールステップを積み重ねることで、いずれは記事そのものを読める子になっていくはずと確信できた。

「ことばの貯金箱」では、「ことばは人を傷つけるためにあるのではなく、人を幸せにするためにあるんだと思う。」というメッセージが掲げられている。この活動を通して、子どもたちの心の中にそのメッセージは少なからず届いたのではないかと思っている。ゼミでのこの活動は、今でも代々後輩たちに受け継がれている。



宮城県七ヶ浜国際村にて（平成28年10月）



参加した児童の作品

5 まとめと今後

私は、来年度4月から、小学校の教員として子どもたちの前に立てることになった。そこで、将来実践していくにあたって自分なりに大事にしていきたいことがある。それは、どんなにデジタル化が進もうとも、子どもたちにはやはり紙の新聞の魅力を伝えていきたいということだ。

学校現場では、今急速にICT化が進んでいる。調べ学習では、必要とする情報が容易に得られる時代だ。遠い外国と瞬時に繋がることもできる。子どもたちは飽きることなく、自分の興味・関心の分野をどんどん掘り下げていける。実に便利だとは思いますが、だからこそアナログの魅力を伝える必要もあると考える。新聞丸ごと手に取って、触って、じっくり読んでそこから情報を得るという、手間暇かけたやり方を体験させたいのだ。

紙の新聞の最大の魅力はやはり何といても「一覧性」にある。これは、新聞を一枚ずつめくっていく中で、ネットでは辿り着けない偶然の出会いがそこにはある。しかも、記事そのものを切り取ったりそれを紙に貼りつけたりできるのも、紙の新聞ならではの楽しみ方であり、子どもたちが夢中になれる貴重な場面だ。

子どもたちの指導にはデジタルとアナログの良さをバランスよく組み入れて、それを授業に生かせるようにしていきたい。そういう意味でも、これからはICTとアナログの融合を見据えたNIEの在り方を積極的に勉強していきたいと思っている。

新聞から授業で使えるお宝の記事を発掘する力を養うために、今まで以上に新聞を身近に置いて読んでいきたい。講義で筆者が味わった新聞記事で心揺さぶられる感覚を、是非子どもたちにも味わわせたい。そのためにも、教材研究や実践を地道に積んでいくつもりである。そして新聞の記事から子どもたちの心を揺さぶる授業ができれば、お世話になった渡邊先生に満面の笑顔で実践報告をしにいきたい。

冒頭にも書いたが、私は恥ずかしながら新聞嫌いで20年間過ごしてきた。もし、この講義でNIEと出会っていなければ、新聞の魅力を分からないまま社会に出ることになり、「新聞を読まない教員」「新聞を知らない教員」として、子どもたちの前に立ったかもしれない。そう思うと、この講義と出会えたことが本当にラッキーだった。

私にとってNIEは、これからの教員生活を支えてくれる得意分野の一つになりそうだ。大切に取り組んでいきたい。

『つぶやき NEWS』でアクティブラーニング」の授業から学んだこと

東北福祉大学 3年 佐藤 圭祐

1 はじめに

本大学では、前期、「NIE活動論」、後期、「NIE教材研究」と通年に渡って、NIEの講義が設定されている。この講義は、渡邊裕子先生の指導の下、NIEについての基礎知識をはじめ、学校教育における新聞活用の意義や方法を学んでいる。教室には毎回、河北、朝日、毎日、読売、産経の5紙が届き、読み比べが容易にできる環境にある。毎週、新聞記事をスクラップして、記事の内容や自分の考えをまとめながら、グループで意見交換する機会も多々ある。自分で選んだ記事を使って、授業案やワークシートなども作り、模擬授業に備え互いに検討し合い実際に授業を行う。日頃から社会のニュースにアンテナを高く立てながら、自分たちが教員となった時に新聞を有効的に活用できるように、具体的に学んでいるのである。

本稿では、講義の中でも大変印象的だった「つぶやき NEWS」について紹介する。

「つぶやき NEWS」は、渡邊先生が提唱するワークショップの一つだが、アクティブラーニングの手法の一つとして注目されている。実際に体験したことを振り返り、「つぶやき NEWS」の概要とその活動から学んだことをまとめていく。

2 「つぶやき NEWS」の概要

「つぶやき NEWS」は4人グループでの活動を基本とする。はじめに自己紹介をし、進行係を決めて活動を進める。(グループは初対面同士がよい) 進め方を次の①～⑤にまとめた。

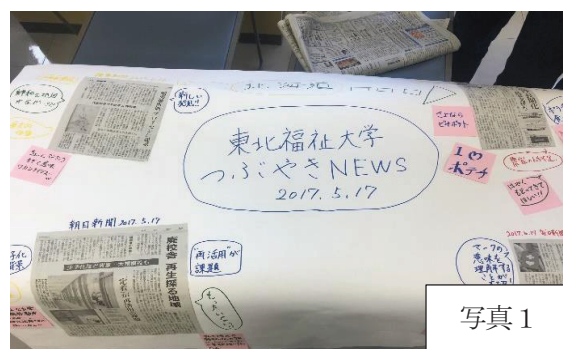
①ちよきちよきタイム

新聞から気になる記事や見出しや写真などを切り取っていく。そして、その中から最も気に入ったものを一つ選んで、どのような記事なのかをグループ内で互いに紹介し合う。(砂時計を用いて一人1分程度で)

②つぶやきタイム

記事を紹介し終えたら、今度は一つの模造紙にそれぞれの記事を貼っていき、そこに記事について思ったことをつぶやきにして、書き入れていく。それぞれが違う色のペンを使う。途中で変えてはいけない。

他の人のつぶやきに対しても、どんどんつぶやきを繋げていく。つぶやきタイムの途中では他のグループを見学しながら、そのグループの記事について



も自由につぶやくことが出来る。その際は、模造紙に書くのではなく付箋に書き入れ、それを模造紙に貼っていく(写真1参照)。

③わいわいタイム

模造紙に書かれた様々なつぶやきをもとに、意見交換をしていく。記事に対して広がっていったつぶやきを今度は声にしなが、さらに自分の考えを膨らませていく。

④プレゼンテーション

わいわいタイムで出た意見などを参考にしながら、改めて自分の考えをまとめ、再度自分が選んだ記事について1分程度で発表する。

⑤相互評価

発表、つぶやき、記事の内容についてよかった点、改善点について相互評価のコメント用紙に書き、相手に渡してこれからの活動等につなげていく。

3 「つぶやき NEWS」を実際に体験してみよう

授業では、上記「2」の概要で紹介したそれぞれが持ち寄った四つのテーマで行う基本編と、テーマを一つに絞って進める応用編について体験した。体験してみての感想を①②にまとめてみる。

① 基本型・四つのテーマで「つぶやき NEWS」

それぞれの興味・関心の違いで選択する記事内容も様々だった。そのことで、普段読むこともない記事に出会うことが出来て、思いのほか視野が広がり、他の人のつぶやきを通して多様な物の考え方に触れることが出来た。つぶやきという形式の手軽さが自分の考えを引き出すきっかけを作ってくれ、思ったよりも簡単に自分の考えをまとめることができた。また、つぶやきにつぶやきを繋げていくことでコミュニケーションが図られ、互いの価値観を共有することも出来た。また、自分を見つめ、相手を見つめることで、それが自己肯定感に繋がっていったように思う。より簡単に自分の考えをまとめることが

できた。また、つぶやきにつぶやきを繋げていくことでコミュニケーションが図られ、互いの価値観を共有することも出来た。また、自分を見つめ、相手を見つめることで、それが自己肯定感に繋がっていたようにも思う。

参考までに、筆者へのグループ内での相互評価・自己評価表には次のようなことが記載されていたので紹介する。(一部抜粋)

<良かった点>

- ・地元に密着した記事を選んでいて、地域問題について分かりやすく問題提起していた。
- ・廃校になった校舎がこのような活用されていることに驚いた。
- ・他の記事にも積極的にコメントしていた。

<改善点>

- ・記事からもう少し言葉を抜き出して紹介してもよかった。
- ・記事の文字数が多く、読むのに苦労したため、つぶやきの形で要約すればよいと思った。

②応用型・・・一つのテーマで「つぶやき NEWS」

「つぶやき NEWS×仙台市長選」。仙台市長選が間近だったこともあり、テーマを「仙台市長選挙」に絞った内容だった。選挙権を持ち、実際に自分たちが住んでいる仙台市の未来を決める当事者として、選挙に関心をもち、候補者についてより深く知ることを目的として行われた。応用型でも基本は同じで、グループは4人1組になって、つぶやいていく。今回は、模造紙には、各候補者の写真だけを貼った(写真2参照)。候補者は4人。もちろん、それぞれのプロフィールや掲げているマニフェストなどは、事前に新聞記事などから調べておいた。つぶやきを書き入れる前に、まずはそれらの内容を整理して記入するところから、スタートした。候補者それぞれが優先とするマニフェストについては、同じである内容は線でつなぎ、違う内容については比較しやすいように囲みの形を変えたりして、工夫したグループもあった。つまり、模造紙上で見える化させることで、分かりやすくまとめていったのである。その後、自由につぶやきを書き入れていった。わいわいタイムでは、模造紙に広がったつぶやきについて話し合い、各候補者についてさらに理解を深めていった。

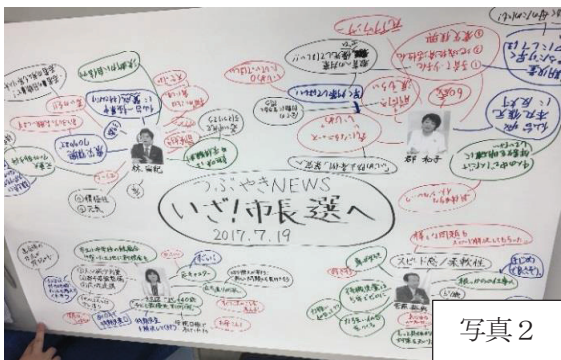


写真2

応用型体験の感想としては、テーマを一つに絞ることで、より深く、より広く自分の考えをまとめることが出来たように思う。また、「つぶやき NEWS」の別な活用方法を知り、「つぶやき NEWS」の新たな可能性を知ることができた。選挙という堅いテーマでの活動だったが、グループのメンバーとコミュニケーションを図りながら、楽しく活動することが出来た。しかも、市長選当日に、迷いなく一票を投じることが出来たのは、何よりの収穫だったと思う。

4 おわりに

「つぶやき NEWS」の活動は、学校現場の児童生徒にとっても、意欲的にしかも主体的に取り組める内容として、有意義な活動であると考えられる。

その理由は、二つある。まず一つ目は、新聞丸ごとから、自由に自分で記事を選択できるという点にある。自分が最も気に入った記事を取り取ることで、それが自分で選んだテーマとなっていく。自分で選んだテーマだからこそ、それについての情報を、記事や写真から積極的に得ようとするし、それだけでなく、相手に記事の内容や自分の考えをしっかりと伝えようとする。そのためには、話す内容をまとめたり、深めたりと、自ずと主体的に意欲的に取り組めるようになるのではないかと予想される。

また、記事を選ぶ視点が人によって様々であるため、幅広いジャンルの情報に触れることで、様々な知識を吸収できることはもちろん、物事に対する価値観も多様化されていくことが容易に想像できる。

二つ目は、レスポンスがあること。つぶやきタイムでは、記事に対して自分の思いや考えを簡単なつぶやきにして書き入れていくが、そのつぶやきに他の人がつぶやきでつないでくれる。途中で他のグループの見学を終え、自分の席に戻った時にも、自分の記事に対して、付箋に様々な意見や感想があるのを見つけることができる。これは、実に手応えがあって嬉しいものだ。書かれた内容は、どんなつぶやきであれ、自分の意見に共感してもらえたことや、違った視点から意見をもらえたことが、自信や自己肯定感に繋がっていく。そういう意味でも、この活動は、大変有意義な活動であると考えられる。

最後になったが、自分の考えを自分の言葉で相手に分かりやすく伝え、他の人の意見に耳を傾けてコミュニケーションを図るというスキルは、とても重要なスキルであることは言うまでもない。ただし、それは自分の経験上、大人になってから養えるものではなく、やはり小さい頃からの訓練が必要であることは間違いないはずだ。それらのスキルを養う意味でも、「つぶやき NEWS」の活動は有効的だと考える。将来、教員になったら「つぶやき NEWS」を子どもたちの前で実践できるようにこれからもこの手法を積極的に学んでいきたいと思っている。

Ⅳ 研修会報告

1 宮城県NIE研究大会

(1) 大会の概要

事務局 飯坂 新

平成29年度の宮城県NIE研究大会は、11月8日(水)に、仙台城南高等学校を会場に開催された。午後2時10分開会。参加者は約50名。

宮城県NIE推進委員会：小石俊聡委員長の挨拶のあと、午後2時20分から虎岩容子教諭の公開授業が行われた。授業は第3学年の代表生徒12名による「現代文B」、授業内容はNIEとICTを活用したディベート教育の実践で、教育SNS「Edmodo」を使用したロジカル・ワーキングと「反論」についてであった(指導案を参照されたい)。

河北新報の記事「勉強にスマホ 成績下がる？」をテーマに選び、スマホの使用で成績が下がるか下らないかの2派に分かれて、論理的に反対意見の相手を納得させる説明を考え、最終的にプレゼンを行うものであった。

授業においては河北データベースから、論拠及びきっかけとなる記事を探し、それぞれの立場を明確にした意見を画面に載せていくものであった。生徒からは「しゃべるのは簡単だけど、こうだからこう思うと論理的な文面を考える難しさを知った」「どう伝えれば反対意見をもつ人に納得してもらえるのか、発表のまとめ方などたくさんの工夫が必要だと感じ

た。今回学んだ話の組み立て方を今後に生かしたい」といった感想もあった。



指導者の虎岩教諭は、今回のICTを使った授業の利点として次の2点を挙げていた。

- ・論拠を新聞記事から参照することで自分の意見に自信がもてること
- ・挙手ではなく端末への入力で意見交換できる手軽さが発言のハードルを下げ、活発な討論に結び付けられること

また、今回使用した教育ソフトは文章化や発表に慣れていない生徒にとって大変活用しやすいツールであると述べていた。

1	日 時	平成29年11月8日(水)
2	会 場	仙台城南高等学校
3	全体会1	14:10~<開会の挨拶> 宮城県NIE推進委員会 委員長 小石 俊聡 氏
4	公開授業	14:20~ 第3学年 現代文B 「NIEとICTを活用したディベート教育の実践」 授業者 虎岩 容子 教諭
5	全体会2	15:15~ 公開授業についての質疑応答 全体講評(日本新聞協会アドバイザー 齋藤 昭雄 氏)
6	講 演	15:50~ 講師 奈良女子大学附属中等教育学校 教諭 二田 貴広 氏 演題 「学習指導要領がNIEに追いついた」 — 資質・能力(コンピテンシー)育成とNIE —
7	閉会行事	16:55~<閉会の挨拶> 仙台城南高等学校 校長 中川西 剛 氏

(2) 公開授業報告

① 第3学年「現代文B」学習指導略案 ～ NIE と ICT を活用したディベート教育の実践 ～

日 時：平成29年11月8日（水）6校時

授業者：虎岩 容子（場所：Jゼミ室）

1 授業について

研究テーマ	教育 SNS「Edmodo」を使用したロジカル・ワーキングと『反論』の仕方
本時の学習目標	反対意見の人たちに、論理的に、相手を納得させる説明をしよう。
伸ばしたい生徒の力	<ul style="list-style-type: none"> ・「批判」と「反論」の違いを理解し、述べたいことを的確に伝える力。 ・基本的な「反論のルール」に従って、意見を発表する力。 ・事前に河北データベースから関連記事を選択し、データ収集を含め、それぞれの意見をまとめプレゼンテーションする力。

2 授業の流れ

	学習内容・学習活動	授業の展開・留意点
	〔前時までの授業内容〕	<p>◆記事：2017/8/22 河北新報「勉強にスマホ 成績下がる？」※別紙参照</p> <p>記事 → 下がる → 下がらない ※それぞれ2グループずつ（下がるA、B、下がらないA、B）</p>
I	① 述べたい意見を反対の立場へどう伝えるか。	<p>①記事内容の確認→グループ内で立場の確認→「批判」と「反論」はどう違うか 批判：「根拠」を示さず相手の意見を受け入れない発言 反論：「根拠」を示し、相手を納得させること。</p> <p>②各グループで話し合ったそれぞれの立場の意見を Edmodo にあげる。 ・思いのままに意見を述べるのではなく、<u>論拠を明確にした伝え方</u>がどうか確認。 ・「話し言葉」→「書き言葉」の中で、文章化させることで正しい伝え方を確認する。 ※伝え方に問題があれば意見を出し合い、どう訂正すればより伝わるのか話し合う。</p>
II	② 実際に発言してみる。 ※①のルールを忠実に守りながら継続。	<p>Iのところで確認した「伝え方」「意見の述べ方」を守りながら発言し、お互いに意見を交わす。必要ならば調べてきたデータを用いても良いこととする。 〔ポイント〕一度相手の意見を受け止め、それについて自分達のグループの意見をわかりやすく伝えること。</p>
III	③ 「下がる」「下がらない」の立場 班で調べたこと、 本時の流れをふまえ 発表する。	<p>本時の意見の流れをまとめながら、班ごとに調べた関連記事、データも含めて「下がる」「下がらない」ことの論拠を明確にプレゼンテーションする。</p> <p>河北データベース ※事前準備で論拠となる記事を選択</p> <p>↓</p> <p>それぞれの立場に関連した記事を選択。 「論拠」またはその「きっかけ」となるもの</p> <p>↓</p> <p>必要があればデータ収集 → [意見のまとめ] プレゼンテーション</p> <p>※グラフ作成、PowerPointでシート作成 ※〔ICT活用〕 PowerPoint, iPad</p>
IV	振り返り	学習目標に近づけたか、本時の振り返りを Edmodo で行う。

② 授業の概要

報告者 仙台城南高等学校 教諭 鈴木 理恵

1 はじめに

平成29年度の宮城県NIE研究大会が11月8日（水）に本校を会場として開催された。本年度の公開授業は、国語科の虎岩教諭が日々の授業で取り組んでいる「NIEとICTを活用したディベート教育」の模擬授業であった。生徒たちは、「勉強にスマホ 成績下がる？」(河北新報平成29年8月22日)のテーマに対して、賛成派(成績が下がる)、反対派(成績が下がらない)に分かれて討議を行った。対象クラスは、この日のために第3学年の各クラスから選抜された生徒12名で構成された。

本校は全館にWi-Fi（無線LAN）を整備しており、使用教室の制約を受けることなく校内ネットワークやインターネット等の必要な情報にアクセスすることが可能である。公開授業の会場となったJゼミ教室は、大型スクリーン、プロジェクター、教室内モニター（4台）が完備されている。

本校は新聞記事の検索のために河北新報社の「河北データベース」の使用許可を受けており、生徒だけでなく教員も活用している。また、本稿で紹介する「Edmodo」は無料（基本機能のみ）で利用することが可能な教育用SNSである。

2 授業の概要

授業は、「事前の活動」と「本時の活動」から成っており、公開授業は「本時の活動」にあたる。それぞれの内容を下表に示した。また、各活動の詳細については後述する。

活動	内容	関連機器等
事前	・新聞記事の選定 ・班編成 ・論拠となる記事の詮索	・河北データベース ・Edmodo ・iPad
本時	・批判と反論の差異を理解する ・ディベート活動 ・班内での話し合い活動 ・データ収集 ・意見のまとめ(プレゼンテーション作成)	・河北データベース ・ネット検索 ・iPad ・Edmodo ・大型スクリーン ・プロジェクター ・教室内モニター

2-1 事前の活動

はじめに、ディベートで討議するテーマの選定を行った。従来、テーマの選定は教員主導で行っていたが、生徒の主体的な活動をより一層引き出したいと考え、生徒たちが興味関心を抱くテーマを生徒たち自らに選ばせることとした。ただし、生徒主体といっても完全に放任するのではなく、教員側で抱く「授業の目標」を達成するため、次のような手順でテーマの選定を行った。

1. 生徒は「河北データベース」にアクセスし、ディベートで議論するテーマの候補となる新聞記事を探して「Edmodo」にアップロードする。
2. 教師は生徒がアップロードした記事を確認し、ディベート用の題材として適切か、論点をどこにすべきか等のコメントを生徒へ返す。
3. 1～2の作業を複数回繰り返し、テーマの絞り込みを行う。



図1 ディベートのテーマとした新聞記事
(2017.8.22 河北新報朝刊)

次に、自分の立場（賛成派、反対派）を支持する新聞記事や研究・調査結果等を「河北データベース」やインターネットを活用して調査させた。

ディベートの班編成は、賛成派2班（賛成A、賛成B）、反対派2班（反対A、反対B）の計4班とし、1班当りの人数は3名とした。

2-2 本時の活動

この授業を実施するに当たり、「反対意見の人達に、論理的に、相手を納得させる説明をしよう」という目標を設定した。この目標を達成するには、生徒たちに「批判」と「反論」の違いを理解させるとともに、客観的で論理的な説明を行うスキルを育む必要がある。そこで、以下に示す手順で段階的に進めることとした。



図2 虎岩教諭が説明を行っている場面

まずはじめに、「批判」と「反論」の理解の確認である。「反論」とは「根拠」を示し、相手を納得させることであるという説明を行い、生徒が発言する度に「反論」と判断できる内容か、それとも単なる「批判」に当たるかを考えさせた。



図3 各グループで意見をまとめている様子

次は、論理的な説明の仕方を習得する段階である。相手を納得させるには論理的に説明を行うことが好ましいことを説明し、「こうだからこうである」という「型」で論を展開するとより効果的であることを伝えた。また、思いついたことをすぐ口に出すのではなく、いちど文章化した後に読み直し、論に矛盾が無いかなどを確認させたのちに発言する指導を行った。生徒たちは、同じ班のメンバー同士で意見を出し合いながら自分たちの「論」を完成させる作業を行っていた。



図4 班内での反論の確認作業(Edmodo)

最後は、反対意見の相手を納得させる反論の仕方を習得する段階である。新聞記事などの信頼性の高い記述や、客観的な視点で書かれた文献、調査データ等を示すとより根拠が明白となり、より論理的で相手を納得させることができる論を構築できることを説明した。生徒たちに「河北新報データベース」やインターネット等から根拠となり得る新聞記事やデータの検索を指示し、「論」の完成度を高めさせた。

最後に、生徒たちはこれまで学んだ内容を踏まえてまとめ（プレゼンテーション）の作成を行った。各班が作成したプレゼンテーションの内容は以下の通りである。

賛成派 A班

ラインの使用等、スマホ、携帯を使うと成績が下がるという観点で発表を行った。

河北新報の記事(2017. 8. 29)を使って発表。「学力テスト 宮城県 算数、数学に低迷」という見出しが気になって調べる。内閣府が出したデータや全国学力検査の結果を元に、平成19年、平成22年、平成29年を比べ、スマホの使用によって基本的計算力が落ちる、国語は読み取りを苦手にする傾向がある、点に注目した。スマホが出回っていない頃は、学校から帰ってきて外で遊ぶことが多く、友達との会話も多かった。しかし、スマホが出現してからは、友人との会話が減り、コミュニケーション能力も低下し、計算するにもスマホの計算機機能を使用するため計算力も低下してしまう。よって、自分の将来や未来を考えた時、若い時からスマホを使うべきではないし、成績低下にもつながる、という結論だった。

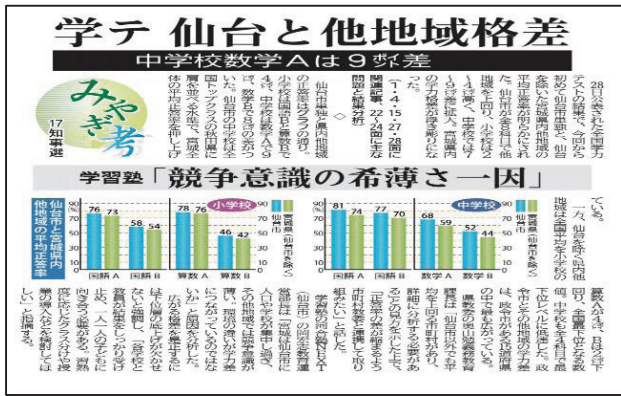


図5 「成績が下がる」と主張する A 班の論拠となる新聞記事(2017.8.29 河北新報朝刊)

とから、スマホを長時間使用することは、テレビを長時間視聴することと同様に学習効果が失われてしまうと考えた。



図7 「成績が下がる」と主張する B 班の論拠となる新聞記事(2013.12.19 河北新報朝刊)

反対派 A 班

年代別の成績の低下について

スマホを使って成績が下がるのは、スマホの使い方によるものではないかという点から発表した。効率的なスマホの使い方でも成績が下がらず、維持できるのではないかと考えた。

スマホの使用で成績が下がる原因として挙げられるもの

- ①スマホの長時間の利用
- ②勉強後のスマホの利用→スマホの視覚的刺激が強いため勉強の内容が定着しにくい、スマホの視覚的刺激的強さを逆手に取り、スマホで勉強すれば記憶に残るのではないかと考えた逆転の発想である。

河北新報の記事(2016.9.3)から、岡山理科大(教育心理学)の森教授による「聞く」「見る」といった能力に結びつけると学習能力が高まる、に注目し、実際に自分たちの経験談も披露した。

図6 「成績が下がらない」と主張する A 班の論拠となる新聞記事(2016.9.3 河北新報朝刊)



賛成派 B 班

視覚的な影響で脳にどのような影響を与えるか、考えた。河北新報の記事(2013.12.19)より、なぜスマホの長時間使用で学力に影響が出るか調べてみた。調べたところ、脳科学からの知見「テレビを見たりゲームをしている時は脳の前頭前野という部分の血流が下がり、働きが低下する」に着目した。このこ

反対派 B 班

スマホをどのように使用したら成績は下がらないかを考えた。河北新報の記事(2017.8.26)より、勉強とスマホを別々に考えるのではなく、スマホは勉強の道具として使うこと、資料より、スマホを使用しても成績は下がらないことを示した。大事なものは、自分でルールを決めたり、アプリや検索機能を上手に活用するというスマホとの付き合い方であると締めくくった。

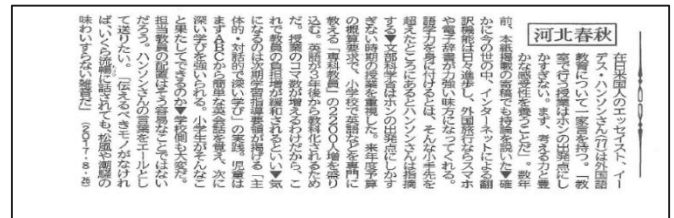


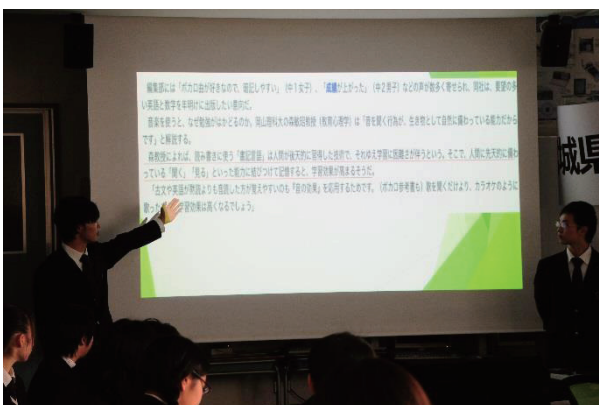
図8 「成績が下がらない」と主張する B 班の論拠となる新聞記事(2017.8.26 河北新報朝刊)

2-3 活動のまとめ

生徒たちはこの授業を通して、批判と反論の違い、根拠を元にした論の構築の仕方を学んだ。根拠となる情報を入手する際にインターネットは便利である。しかし、インターネット上の情報の中には、無責任な発言やフェイクニュースなども多い。今日の学校教育では、生徒たちに情報リテラシーを育むことが求められており、正確な情報を得ることが可能な「新聞」を授業に取り入れることによって教育効果を高められると思われる。

今後、ますます加速するであろう情報化社会を生き抜いていかなければならない生徒たちの教育に「新聞」を活用していきたい。

(3) 公開授業の様子



(4) 全体会記録

仙台市立七北田小学校 教諭 今藤 正彦
仙台市立八木山小学校 教諭 石井真紀子

全体会（公開授業）質疑応答

- Q この授業の前までの流れ、タブレットの使用やディベートの仕方について、どのような学習をしてきたのか（田尻さくら高校・谷島）
- A 37人のクラスの授業はEdmodoを使った意見のやりとりが続く静かな授業。6人ぐらいで1班を構成、全部で8グループで班毎に立場を変えてやりとりをしてきた。Edmodoは3年生の4月から使ってきた。論拠をはっきりさせ、文章化することを学んでから話し合いをするよう指導。今日はディベート教育の実践ということだが、その前の段階のロジカル・ワーキングの練習。高3はICT活用3年目でタブレットは使い慣れている。
- Q Edmodoを4月から使ってきた効果は。（司会・三嶋）
- A 反論の仕方を学んで、伝え合うことが楽しいと思えるようになってきた。
- Q Edmodoは学校で導入したのか？ICT活用としていい使い方ですばらしい。（住吉台中・清野）
- A 学級で個人的に導入している。担任として保護者とのやりとりなど生徒とは別に切り離して使っている。
- Q 授業では根拠として新聞を使われているが、事前の準備としてどのように記事を集めているのか。（宮城学院中・丸山）
- A NIE2年目実践校であり、河北のデータベースのIDを生徒全員が明日まで使えるようにした。生徒は自分のiPadで探していた。2週間くらい選んで選定した。
- Q 宿題としたのか。（司会・三嶋）
- A 今日の授業には探究科の生徒を集めている。数人呼んで授業時間以外で課題として取り組ませた。
- Q 授業で「下がる」「下がらない」という言葉を使っていたが、論点は「下がる」「上がる」では。（秋保小・伊藤）

- A 単純な言葉がよかったので「下がる」「下がらない」とした。導入の川島教授の新聞記事でも「下がる」「下がらない」とあったのでそれを大事にした。
- Q 自分は月曜日、中2の公開授業で生徒の発表のスキルが低いと言われたが、今日の生徒は非常に発表スキルが高かった。どのようにスキルを高めたのか（講師・二田）
- A 本時の生徒は探究科1～5組から選んだ。探究科で4月から調べ学習を積み重ねてきた結果である。

指導講評（NIEアドバイザー・齋藤昭雄）

- ① NIEとICTを活用した授業
今新聞を取っている家庭が少ない中で、今後、ICT、タブレット活用が学校現場にも広がっていく。高校だけでなく小・中学校でも本時の授業を参考にしてほしい。
- ② 新聞記事を授業の導入で活用
どんな記事を提示すれば子どもたちが興味を持つのか、新聞活用学習では導入が一番大切。関心・意欲の向上にもつながり、学びの入口になる。教師自ら新聞を手に取り、教材になりそのような記事を探してほしい。本時の学力とスマホの関係についてはよい選択であった。今後は生徒自身が記事を選んで話題提供できるとよい。
- ③ 高校生と新聞
選挙権が18歳からになり高校におけるNIEの重要性は高まっている。知事選・衆議院議員選のおり高校生と選挙という記事があったが、古川学園の18歳の投票率は74.58%と高かった。若者は決して無関心ではない。主権者教育の第一歩は新聞を読むこと。新聞をいつでも読める環境整備を小・中・高校でやってほしい。新聞は知識の宝庫。積極的な活用を。

(5) 講演の概要 (資料より)

学習指導要領がNIEに追いついた

—資質・能力 (コンピテンシー) 育成とNIE—

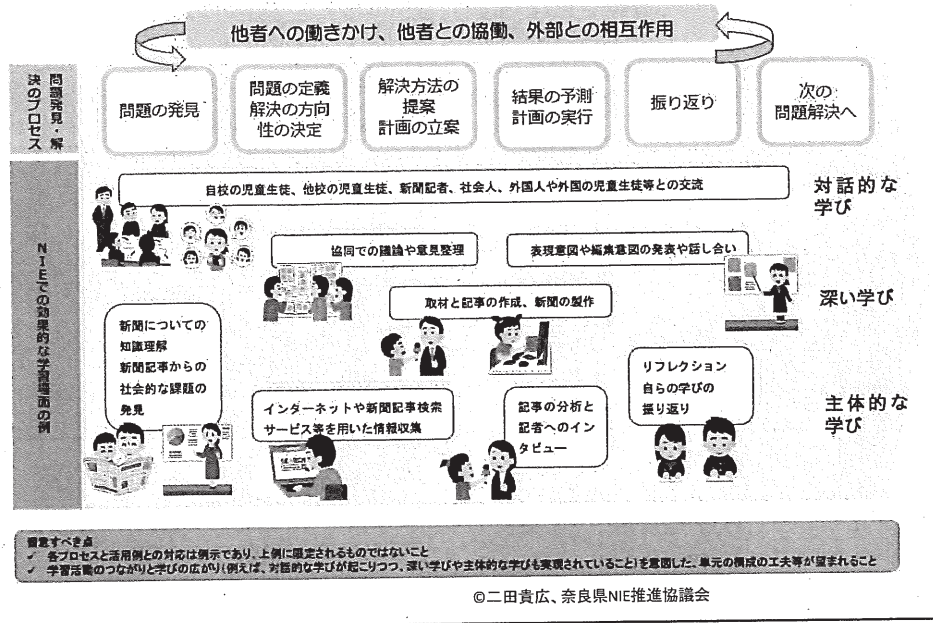
奈良女子大学附属中等教育学校

二田貴広 (ふただたかひろ)

NIEで児童生徒に身に付けさせたい態度や力

次期学習指導要領		奈良県のNIEが大切にしてきた要素およびNIE活動の例			
資質・能力	資質・能力としての言語能力	資質・能力としての情報活用能力	人とのつながり	人間関係	市民性 (シティズンシップ) の涵養
知識・技能	言葉の働きや役割に関する理解、言葉の特性やまじまりに関する理解と使い分け、言葉の使い方に関する理解と使い分け、言語文化に関する理解、既習知識 (教科に関する知識、一般常識、社会的規範等) に関する理解。	情報と情報技術を活用した問題の発見・解決等の方法や、情報化の進展が社会の中で果たす役割や影響、情報に関する法・制度やマナー、個人が果たす役割や責任等について、情報の科学的な理解に裏打ちされた形で理解し、情報と情報技術を適切に活用するために必要な技能を身に付けていること。	<ul style="list-style-type: none"> 新聞に何を書いているのか理解し、理解した内容をグループやクラスで共有すること 見出しの意味を理解して新聞記事を読み、感想や意見を交流すること 上記について Skype や FaceTime、メールや SNS で行うこと 	<ul style="list-style-type: none"> 新聞記事やコラムのことなどが、記事に取り上げられた人にとって配慮しているのか考えること 新聞記事からインタビューの方法やインタビューする相手への配慮などを聞いて理解し、自己のインタビューに活かすこと 	<ul style="list-style-type: none"> 5W1Hや「逆三角形」など、新聞に特徴的な表現の方法を理解すること 新聞が社会で果たしてきた役割を理解すること デジタル化された新聞や web 上の新聞記事について知ること
思考力・判断力・表現力等	テキスト (情報) を理解したり、文章や発話により表現したりするための力として、情報を多面的・多角的に精査し精進化する力、言葉によって感じたり想像したりする力、感情や態度を言葉に込める力、構成・表現形式を評価する力、考えを形成し深める力。	様々な事象を情報とその結びつきの視点から捉え、複数の情報を結びつけて新たな意味を見出す力や、問題の発見・解決等に向けて情報技術を適切かつ効果的に活用する力を身に付けていること。	<ul style="list-style-type: none"> 記事に取り上げられた事件や事故、人について想像し共感したり怒いや誇りすること 新聞記事を読み見出しを付け、なぜその見出しを付けたのか意見を交流すること 新聞記事を読んだ感想や意見を新聞記者に伝えること 	<ul style="list-style-type: none"> 新聞に取り上げられた人権問題について、自分はどう考えたり感じたりするか意見や思いを交流すること 新聞に取り上げられた人権問題について知り、その原因や解決法について意見を交流すること 新聞に取り上げられた人権問題と同様の例が身近にないか考えること 	<ul style="list-style-type: none"> 記事の位置や見出しの大きさからその記事の重要度を判断すること 新聞がこれからの社会で果たす役割について考え意見を交流すること 新聞記事で取り上げられた社会的問題について、ほかの新聞やメディア、web 上の言論などではどう扱われているのか知り比較分析すること
(学びに向かう力・人間性等)	言葉を通じて、社会や文化を創造しようとする態度、自分や他人の意見や考え方を広げ認めようとする態度、集団としての考えを発展・深化させようとする態度、心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする態度、自分の感情をコントロールして学びに向かう態度、言語文化の担い手としての自覚。	情報や情報技術を適切かつ効果的に活用して情報社会に主体的に参画し、その発展に寄与しようとする態度等を身に付けていること。	<ul style="list-style-type: none"> 取材活動を通じて、歴史的社会的な背景やものの見方、考え方、感じ方を知り、記事にすること 仲間と協力して取材したり、記事を書いたりすること 仲間と協力して編集作業を行い新聞を製作すること 自分たちが書いた記事や編集した紙面に対してほかの児童生徒や新聞記者からの意見をもらい、よりよいものにする 	<ul style="list-style-type: none"> 取材相手に配慮した言葉遣いをして取材にあたること 取材内容を記事化するにあたり、他者の尊厳を損なわないように配慮すること 自分たちが書いた記事や編集した紙面を掲示したり公開したりする際に、写真や記事によって個人情報が流出することがないように配慮すること 	<ul style="list-style-type: none"> 自分たちの取材活動や新聞制作、公表活動が他者や学校、社会に与える影響について考えて活動する態度を持つこと 取材や新聞制作で、仲間同士で自他の意見を思いを交流し共同作業することで、一人で取り組むよりも、よりよいものを作り上げようとする態度を持つこと

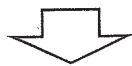
©二田貴広、奈良県NIE推進協議会



現行の学習指導要領の課題

子どもの未来 < 大人の都合

「教員が何を教えるか」という観点が中心
教科等の縦割りを越えられない、「何を知っているか」ととどまらず「何ができるようになるか」にまで発展させることを妨げている



- ① 「何ができるようになるか」
- ② 「何を学ぶか」
- ③ 「どのように学ぶか」
- ④ 「子供一人一人の発達をどのように支援するか」
- ⑤ 「何が身に付いたか」
- ⑥ 「実施するために何が必要か」

教科等の目標や内容を以下の三つの柱に基づき再整理することが必要

- ①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
- ②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」

子どもの未来 > 大人の都合

「カリキュラム・マネジメント」の三つの側面

- ① 学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、必要な教育の内容を組織的に配列していくこと
- ② 子供たちの姿や地域の現状等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること
- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること

新しい学習指導要領で育成を目指す資質・能力

- ①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」
- ②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」
- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」

「カリキュラム・マネジメント」の三つの側面

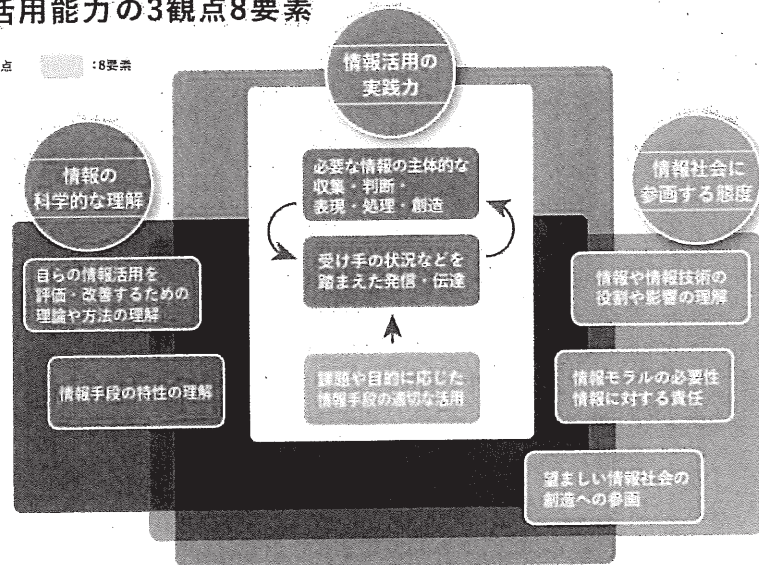
- ①学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、必要な教育の内容を組織的に配列していくこと
- ② 子供たちの姿や地域の現状等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること
- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること

学習の基盤となる資質・能力

言語能力, 情報活用能力（情報モラルを含む）, 問題発見・解決能力

情報活用能力の3観点8要素

● : 3観点 ■ : 8要素



実践 **コラム** **力試し**

指定校 だより

本校の指定校だより「指定校だより」は、毎月発行されています。内容は、指定校の行事や授業の様子、児童の生活の様子などです。また、指定校の先生からのメッセージも載っています。

意見交換学び合う

指定校の先生と本校の先生が、意見交換を行っています。指定校の先生からは、指定校の特色や、児童の生活の様子などについて、本校の先生に話を聞きました。また、本校の先生からは、本校の特色や、児童の生活の様子などについて、指定校の先生に話を聞きました。

仙石城南高

仙石城南高等学校は、仙石市に所在する私立高等学校です。本校は、仙石城南高等学校と指定校提携を行っています。指定校の先生と本校の先生が、意見交換を行っています。

仙石市立北田小

仙石市立北田小学校は、仙石市に所在する公立小学校です。本校は、仙石市立北田小学校と指定校提携を行っています。指定校の先生と本校の先生が、意見交換を行っています。

高城原柴田町柴田小

高城原柴田町柴田小学校は、高城原柴田町に所在する公立小学校です。本校は、高城原柴田町柴田小学校と指定校提携を行っています。指定校の先生と本校の先生が、意見交換を行っています。

船岡小 高城原柴田町

船岡小学校は、高城原柴田町に所在する公立小学校です。本校は、船岡小学校と指定校提携を行っています。指定校の先生と本校の先生が、意見交換を行っています。

力試し

指定校の先生と本校の先生が、意見交換を行っています。指定校の先生からは、指定校の特色や、児童の生活の様子などについて、本校の先生に話を聞きました。また、本校の先生からは、本校の特色や、児童の生活の様子などについて、指定校の先生に話を聞きました。

実践 **コラム** **力試し**

指定校 だより

指定校の先生と本校の先生が、意見交換を行っています。指定校の先生からは、指定校の特色や、児童の生活の様子などについて、本校の先生に話を聞きました。また、本校の先生からは、本校の特色や、児童の生活の様子などについて、指定校の先生に話を聞きました。

読み

どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

次期学習指導要領では、小学校の算数で「データの活用」という新領域が設けられた

力伸ばす

指定校の先生と本校の先生が、意見交換を行っています。指定校の先生からは、指定校の特色や、児童の生活の様子などについて、本校の先生に話を聞きました。また、本校の先生からは、本校の特色や、児童の生活の様子などについて、指定校の先生に話を聞きました。

社会科では調べて分かったことを新聞にまとめる学習を積極的に行っている

新聞を通して児童は社会への関心が高まり、将来に役立つ情報を得る

グラフや統計資料などを通して資料を活用する力を高められる

船岡小 高城原柴田町

船岡小学校は、高城原柴田町に所在する公立小学校です。本校は、船岡小学校と指定校提携を行っています。指定校の先生と本校の先生が、意見交換を行っています。

力伸ばす

指定校の先生と本校の先生が、意見交換を行っています。指定校の先生からは、指定校の特色や、児童の生活の様子などについて、本校の先生に話を聞きました。また、本校の先生からは、本校の特色や、児童の生活の様子などについて、指定校の先生に話を聞きました。

学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、必要な教育の内容を組織的に配列していくこと

宮城県柴田町柴田小

どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

社会への関心高まる



児童50人、縦断的授業、187年歴史のある柴田小学校で、横断的な視点で、社会・世界と関わり、よりよい人生を送ることを目指している。

指定校
なより

実践

コラム

力試

全教科・領域でNIEの実践に全校で取り組んできた

食品ロスの記事から食品のごみがあることに気付き、ゴミを減らすために自分たちができることを考えた

児童が主体的に新聞に関わる事ができるような環境づくりや授業実践を考え、児童の考えや見方が広がるように工夫していく

子供たちの姿に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること

言語能力、情報活用能力、社会への関心

仙台市七北田小

子どもが理解している語彙の数や文章のなかで使っている語句を増やす

や読み方を学ぶ



児童50人、横断的授業、187年歴史のある柴田小学校で、横断的な視点で、社会・世界と関わり、よりよい人生を送ることを目指している。

指定校
なより

実践

コラム

力試

児童自らが未来を切り開いていく力を育むことがNIEのねらい

「ことばの貯金箱」にためた記事や写真を台紙に貼り、文字や絵などを自由に加えて表現する

新聞記者による防災学習や、記者やカメラマンを学校に招いて表彰する「新聞記事・写真Good賞」を実施

教育内容と、教育活動に必要な人的資源の活用

学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、必要な教育の内容を組織的に配列していくこと

気仙沼高

問題発見・解決能力
どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

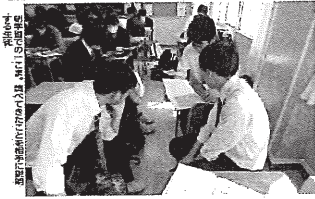


写真1 新聞記事の読み取りと疑問点の抽出

疑問調べ互いに説明

問題発見・解決能力
本学では、問題発見・解決能力を育成するために、新聞記事の読み取りと疑問点の抽出を行い、互いに説明し合うという学習活動を行っています。

指定校
たより

実践
コラム
力試し

- 課題研究活動を中心に学校活動全体からNIEにアプローチ
- 批判的思考力や科学的思考力の基礎となる「事象や現象に対して疑問を持つ力」を育成
- 新聞記事を選んで疑問点を3つ挙げる。次週までに相手の疑問点について調べてくる

言語能力
何を理解しているか、何ができるか。理解していること・できることをどう使うか

仙台城南高

問題発見・解決能力
どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

写真1 新聞記事の読み取りと疑問点の抽出



意見を交換学び合う

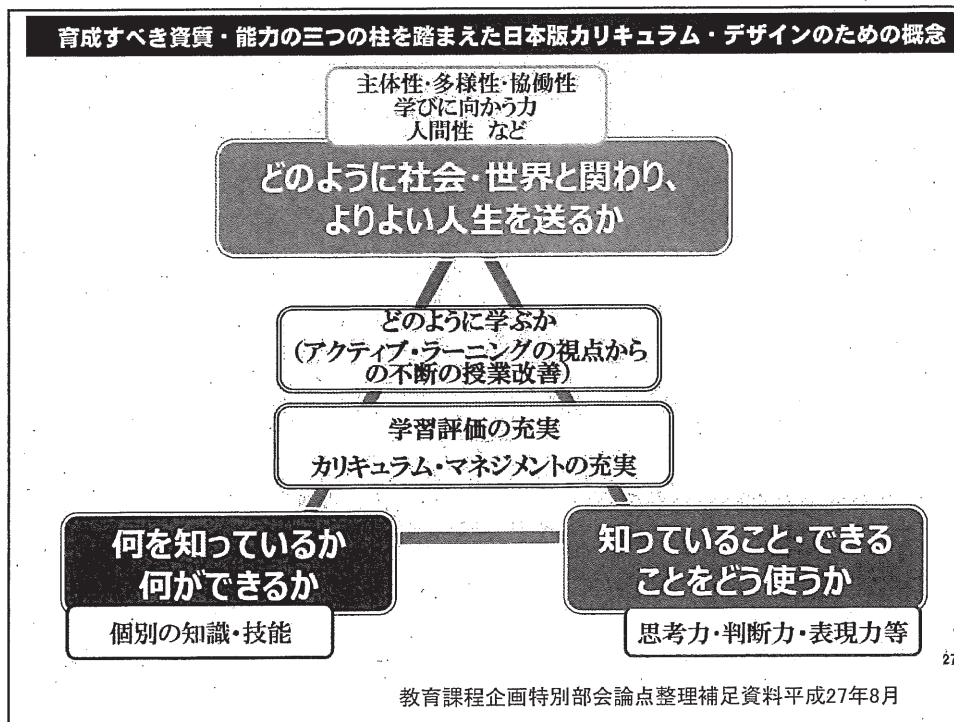
意見交換
本学では、意見交換を促進するために、新聞記事の読み取りと疑問点の抽出を行い、互いに説明し合うという学習活動を行っています。

指定校
たより

実践
コラム
ICTの特長
思考の可視化
瞬時の共有

- 新聞を生きた教材として、生徒が自分お考えを自分の言葉で豊かに表現する
- 「言葉とコミュニケーション」をテーマに、記事に対して各自の意見を共有しながら解決策をまとめ発表
- 生徒たちの意見を校内サーバーで共有し、各自がタブレット端末で閲覧、意見交流できる場をつくる

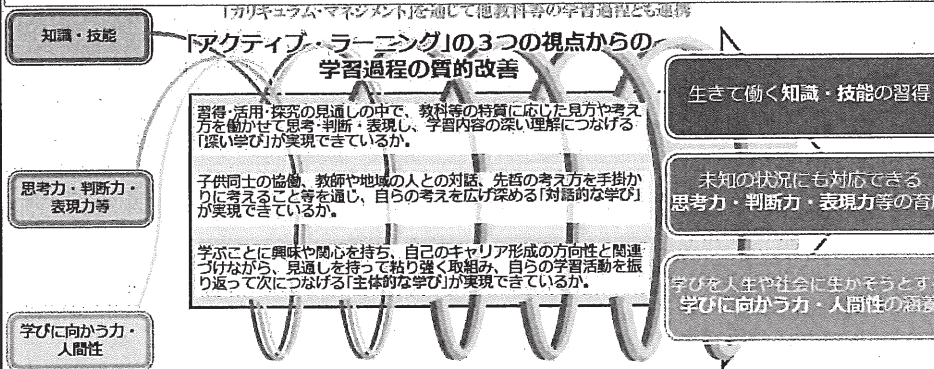
言語能力を構成する資質・能力		
知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
<p>○言葉の働きや役割に関する理解</p> <p>○言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音声、話し言葉 ・文字、書き言葉 ・言葉の位相(地域や世代、相手や場面等による言葉の違いや変容) <p>○語、語句、語彙</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文の成分、文の構成 ・文章の構造(文と文の関係、段落、段落と文章の関係) など <p>○言葉の使い方に関する理解と使い分け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し方、書き方、表現の工夫 ・聞き方、読み方 など <p>○言語文化に関する理解</p> <p>○既有知識(教科に関する知識、一般常識、社会的規範等)に関する理解</p>	<p>テキスト(情報)を理解したり、文章や発話により表現したりするための力</p> <p>【創造的・論理的思考の側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報が多面的・多角的に精査し、構造化する力 ・推論及び既有知識・経験による内容の補足、精緻化 ・論理(情報と情報の関係性:共通-相違、原因-結果、具体-抽象等)の吟味・構築 ・妥当性、信頼性等の吟味 ・構成・表現形式を評価する力 <p>【感性・情緒の側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力 ・構成・表現形式を評価する力 <p>【他者とのコミュニケーションの側面】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉を通じて伝え合う力 ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解 ・自分の意思や主張の伝達 ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り ・構成・表現形式を評価する力 <p>＜考えの形成・深化＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考えを形成し深める力 ・情報を編集・操作する力 ・新しい情報を、既に持っている知識や経験・感情に統合し構造化する力 ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力 	<p>言葉が持つ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度</p> <p>言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとするともに、考えを伝え合うことで、集団としての考えを発展・深化させようとする態度</p> <p>様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通じて、心を豊かにしようとする態度</p> <p>言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者を理解するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度</p> <p>自分の感情をコントロールして学びに向かう態度</p> <p>歴史の中で創造され、継承されてきた言語文化の担い手としての自覚</p>



資質・能力の育成と 主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」の視点）の関係（イメージ）（案）

◆「アクティブ・ラーニング」の視点は、知識・技能を生きて働くものとして習得することを含め、育成すべき資質・能力を身につけるために必要な学習過程を実現するためのもの。こうした三つの視点[※]を明確にすることにより、授業やカリキュラムの改善に向けた取組を活性化するもの。 ※三つの視点は、学習過程の中で相互に関連し合うものであることに留意

◆学習内容の量を削減するのではなく、学習過程の質的改善を行うもの。また、生きて働く知識・技能の習得を含む資質・能力の獲得には、学習内容の深い理解が不可欠であり、「主体的な学び」「対話的な学び」のみならず「深い学び」の重要性にも留意。



※「習得・活用・探究の見直し」とは、習得された知識・技能が思考・判断・表現において活用されるという一方通行の過程のみではなく、思考・判断・表現を経て知識・技能が生きて働くものとして習得される過程や、思考・判断・表現の中で知識・技能が更新されたりする過程なども含む。

※基礎的・基本的な知識・技能の習得に課題が見られる場合には、教科等の特質に応じ、知識・技能の習得を中心とした学習を、「深い学び」の前提として習得状況に応じ行う必要がある。その際には、例えば「主体的な学び」の視点から学びへの興味や関心を引き出すことなども併せて重要である。

「次世代の学校・地域」創生プラン ～中教審3答申の実現に向けて～

平成28年1月25日
 文部科学大臣決定

答申③「教育再生実行会議第7次提言」
教育再生
 新質教育
 （⇒新質教育）

養成・採用・研修を通じた
 不断の資質向上

中堅段階
 ・管理職研修の充実
 ・メンタメント力強化

1～数年目
 ・チーム研修等の実施
 ・英語力等の課題対応

採用段階
 ・採用試験の共同作成
 ・特別免許状の活用

養成段階
 ・養成段階の改革
 ・インターシップの導入
 ・学校現場や職場と連携・連携
 ・教職課程の質向上

教員育成目標
 一都道府県が策定

育成目標共通
 一国が大綱的に提示

要・法改正：免許法、教師センター、教団法

答申①「教育再生実行会議第7次提言」
学校の組織運営改革
 （⇒チーム学校）

校長の
 リーダーシップの下
 学校を運営

校長
 ・学校運営の基本方針
 ・学校運営や教育活動 等

教師
 ・学校運営の推進
 ・研修管理等により
 教育の質を向上させる
 ・児童生徒により学びの機会を充実させる

子供
 ・授業等の学び
 ・生活指導・保健体育等

保護者
 ・子供の進路相談
 ・いじめ被害防止の協力等

教員を
 バックアップする
 多様なスタッフ
 ・スクール
 カンセラー
 ・スクール
 ソーシャル
 ワーカー

連携・協働
 ・地域連携の
 中核を担う
 教職員

要・法改正：学校教育法、地方教育行政法

答申①「教育再生実行会議第6次提言」
地域からの学校改革・地域創生
 （⇒地域と学校の連携・協働）

コミュニティスクール
 ・校長のリーダーシップを応援
 ・地域のニーズに応える学校づくり
 要・法改正：地方教育行政法

地域学校協働本部
 ・保護者・地域住民・企業・NPO等
 地域の人々が学校と連携・協働して、
 子供の成長を支え、地域を創生
 学校を核とした地域の創生
 次代の郷土をつくる人材の育成、まちづくり

要・法改正：社会教育法

「次世代の学校」の創生に必要な不可欠な教職員定数の戦略的充実

子供たちが自立して活躍する「一億総活躍社会」「地方創生」の実現

「社会に開かれた教育課程」

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり自らの人生を切り拓（ひら）いていくために求められる 資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること

平成28年4月20日 文部科学省教育課程部会資料5

毎日新聞奈良版 2016年8月9日「支局長からの手紙」

どんな問題にも、一刀両断するには難しい、複雑な背景がある。当たり前のことですが、自分の目で見、耳で聞くことで得た気づきは大きい(野原靖奈良支局長)。

以下は、「支局長からの手紙」で取り上げられた修学旅行委員長の談話

「僕たちがインターネットや新聞から得た情報には、(中略)ネガティブな情報がほとんどだった。

しかし、基地内部の方々は積極的に外部との交流を心がけ、英会話レッスンや保育所での交流会など、友好的な関係もあると知ることができ、イメージが一瞬にして覆りました。」

「基地の幹部や外部の民間人から思ったよりポジティブな話が聞けて、自分の考えは決着、としていいのでしょうか。そんなはずはありません。実際に基地移設を訴えるデモは存在していますし、本当に米軍を恐れている民間人の方もおられます。僕たちはもっと多方面の情報に貪欲でなければなりません」



二田氏の講演においては、「アクティブ・ラーニング」の視点に立った学びの過程におけるNIEでの効果的な学習場面として、

- 「新聞人との連携・協力（主権者教育とNIE）」
- ・毎日新聞社（日本新聞協会NIE専門部会）「教育と新聞」推進本部の方々との主権者教育に関するブレインストーミング
- ・在奈良の各新聞総・支局長及び奈良新聞社教育担当者との主権者教育に関するブレインストーミングと出前授業

が「社会に開かれた教育課程」の実践例として紹介された。

新聞人とのブレインストーミングを経て、主権者教育の具体的な内容をホームルームのカリキュラムに組み、最終的には次年度高3での主権者教育プログラムを生徒の手で企画実施しゴールを目指すという。

資料の最後には「沖縄修学旅行(5/30-6/3)」を取り上げた毎日新聞社奈良版の『支局長からの手紙』の記事の紹介があるが、これはNIEに関連した学習活動の紹介の一つである。

修学旅行実施までの過程はこういう流れだ。

- ・4月から修学旅行まで各クラスで「琉球新聞」を購読した
 - ・ホームルーム活動や現代文の時間に調査活動として他新聞との比較読みを行った
 - ・事前学習中に「米軍属女性遺棄」事件が発生した
 - ・生徒の一人が5月22日の琉球新聞に全国紙や近隣の地方紙の社説が並べられたことを発見し報告してくれた
 - ・さらに、5月22日の同じ面には社説や論説の見出しも掲載され、沖縄県民の他地域での報道のされ方への関心の高さを生徒共々実感した。なぜなら、普天間米海兵隊基地を訪問する予定だったからだ
- と説明された。前段の『・・・当たり前のことですが、自分の目で見、耳で聞くことで得た気づきは大きい』の後に、記事はこう結んでいる。

『・・・乱暴な物言いがまかり通る世の中、若者たちを頼もしく思いました』と。

さらに、NIEに関連した学習活動として公開授業と関連づけ、

- 「記事検索と教育用SNSの活用」
- ・課題に関連のある記事をタブレットで検索して教育用SNS「ednity」に投稿（全員閲覧可となる：全員がそれぞれに探した記事を手元ですぐ一覧できるので便利。タブレットのよさは表示記事を簡単に大きくできること）

- ・集めた情報（記事）をもとに各自自分の考えをまとめる
- ・課題を確認しながらまとめていき、その時点で収集し、話し合った内容からその時点での「最適解」を作り出す

の授業風景が映像で紹介された。最後に主体的・対話的で深い学びの実現のために、学びの過程や振り返りで「メタ認知」をうながすには・・・

- ①児童生徒に、与えられた問いや学びの過程で、自分自身が発見した「問いやその時点での最適解（まとめ）」について、自分自身の選択の条件自体に目を向け、識別の境界線となっている理由を意識化させる
- ②自分自身が発見した「問いやその時点での最適解（まとめ）」について、他の事例で類似なことはないか、その関係を考えさせる。より大きな視野から物事を考えさせる

そして、書かせるなど、取り組んできたことに対して自分の考えを整理させ、熟慮させる時間を確保する一と助言された奈良教育大学教職大学院教授の小柳和喜雄氏のコメントをスクリーンに写しだした。

二田氏はこの講演を通し、

- ①新指導要領では「アクティブ・ラーニング」の視点から教員自身が不断の自己検証により、よりよい学習活動をデザインしたり、学習方法を考え出したり目の前の児童生徒の姿から自己の教育方法や指導方法などを見通したりすることが、改訂の大きな柱とされたが、NIE実践は当初から「なぜNIEなのか？」を自らに問うてきており、NIE実践に取り組む教員には、「アクティブ・ラーニング」の観点からの自己検証と自己の再構築をする態度が根付いていること
 - ②新指導要領では言語能力と同等の「育むべき力」として情報活用能力が格上げされたが、NIEでは言語能力と情報活用能力の双方を相乗的に向上させる取り組みがなされてきており、学習方法として効果的であること
 - ③新指導要領では、「開かれた学校」であることが強く求められているが、地元の新聞社と連携してきたNIEはそれがすでにできていること。また、地域に取材することで、児童生徒の学習活動が「開かれる」ものであること
- この3点が学習指導要領に関して伝えたかった内容であると、コメントしていた。

2 宮城県NIE地区研修会

<テーマ> ～たのしく学ぶNIE～

研修会の概要

事務局 飯坂 新



平成29年度の宮城県NIE地区研修会は、8月21日（月）、実践指定校である登米市立豊里小・中学校で行われ、約40名の参加者が楽しくNIEについて学ぶことができた。

地区研修会は例年、講話とワークショップの二部構成で開催しており、今年度も同様のスタイルをとった。

第一部の講師は、日本経済新聞社仙台支局長の川合知氏である。川合氏は、『『経済』について考えよう』と題して、日本経済は世界経済とは無関係ではなく、宮城や東北も世界の経済・政治情勢と密接につながっているとし、「GDP」の「三面等価」や経済における所得格差を「ジニ係数」を基に解説されていた。そして、かつての高度経済成長期では三面等価の企業活動に伴う生産、給与収入、消費ともに伸びが実感できたが、今は正に実感なき成長、人口減少問題も未来の東北経済を考える上で極めて重要な課題であると結んだ。

第二部は、今年度NIE教育コンサルタント・東北福祉大学講師の渡邊裕子先生の指導で、「ことばの貯金箱」のワークショップを行った。ワークショップは4人一組のグループで、配付された新聞から気になった言葉、ステキな言葉を切り抜いて個々に用意した貯金箱に貯金。合言葉は「チャリ〜ン」そしてみんなから「いいね！」のかけ声。切り抜きを貯め、互いに貯金の成果を認め合い、次に台紙に貯金した各自の言葉をイラストなど描き加え、まとめていく。そして、締めくくりは「ことばの貯金箱」のグループ発表。活動の最後はグループ代表による発表を行い互いの成果の交流。小グループでの和気藹々としたワークショップは、まさに「大人も夢中になる」活動であり、好評を博した内容であった。

今年度も「読む」「書く」「話す」「聞く」力を無理なく養う、「ことばの貯金箱」の不思議を体感した2時間だった。



<2017年度地区研修会の日程>

時 程	内 容
13:30	開会の挨拶
13:40~14:30	講話 『『経済』について考えよう』 講師 日本経済新聞社仙台支局長 川合 知 氏
14:45~16:30	ワークショップ 子どもも大人も夢中になる「ことばの貯金箱」 講師 NIE教育コンサルタント 渡邊 裕子 氏
16:30	閉会の挨拶

地区研修会のまとめ

〈アンケート結果より抜粋〉

①講話について

- ・企業がお金を内部留保している件は周知しているが、もっともっと日本は賃金の方にまわしてくれることを期待している。かかえこみは米国あたりより高いと思うので、日本のこの体質を変える工夫を知りたい。
- ・「経済」という大きなくくりでお話をいただき、世の中の動き、流れなどを感じることができた。
- ・教育予算、経済について日頃あまり関心を持っていなかったのですが、今回の講話を伺い興味をもつ機会になりました。ありがとうございました。
- ・普段あまり聞けない経済の話、よかったです。
- ・日経を子どもたちの学習にどのように生かせるかと悩みますが、とにかく子どもに手に取らせてみるのところから始めてみたいと思います。
- ・社会の大きな変化の中で子どもたちをよりよく育むためには世の中の動きを自分との関わりとしてとらえていく必要性をより強く感じる事ができました。
- ・新聞の重要性が分かる講話でした。話を聞いていて単語として知っていることは多くても、それが何を意味するのか、どうつながっていくのかが全く分かっていないことを改めて感じました。私自身もっと勉強しないとダメであると感じました。
- ・異業種からの見方、他の視点からということで、大変興味深いものでした。
- ・自分たちの知らない世界を中心に教えていただき大変勉強になりました。資料またはパワーポイントがあれば更によかったです。
- ・興味深いお話でした。日経新聞を読み、更に勉強したいと思いました。
- ・難しかったです。でも、新聞等の紙媒体から有意性のある情報を取り出す能力の必要性について考えさせられました。
- ・「今」の経済については詳しい話だったが、資料や映像等もほしかった。目から入る情報も印象深い（効果大）。
- ・子どもたちだけでなく教師自身も、今世の中で起きていることを知る事が大切と感じました。

②ワークショップについて

- ・ワークショップ「ことばの貯金箱」楽しかったです。機会があったら取り組みたいと思います。
- ・とても楽しく、自然と新聞に親しめました。
- ・とても楽しかったです。道徳や学活などで取り組みませたいと思います。
- ・「ことばの貯金箱」の活動を実際に体験することができてよかったです。時間が経つのがあっという間でした。
- ・大変楽しく、楽しみながらことばを考えていることが体験できました。
- ・子どもが取り組むと予想外の作品ができるものです。まず実践していきます。
- ・多くの可能性をもった取組だと思いました。とても楽しかったです。
- ・はじめはうまくできるのか不安でしたが、始まると夢中になって取り組んでしまい、大変楽しく参加することができました。ぜひ学校でも取り組むことができればと思います。
- ・新聞で知って以前学級で実践したことがありました。今回本物のワークショップに参加させていただき、とても勉強になりました。
- ・楽しかった。学校が少人数なのですが工夫してやってみたいと思います。
- ・子どもたちの心をつなぐ活動として大変有意義でした。
- ・とても楽しかったです。学級ではもちろん、家でもやってみたいです。
- ・さすがアナウンサーだった方で話し方が引きつけられた。「ことばの貯金箱」、言葉は「人を幸せにするためにある」に共感します。
- ・今回の「ことばの貯金箱」はとっても楽しかった。新聞記事のスクラップはしていたが、貯めておく物があるのはよいと思った。
- ・実際やってみると、とても楽しく夢中になりました。クラスでやってみたいです。
- ・とても楽しいワークショップでした。早速学級でも実践してみたいです。

3 N I E全国大会名古屋大会参加報告

第22回N I E全国大会名古屋大会が8月3、4の両日、名古屋市で開かれました。大会スローガンは「新聞を開く 世界をひらく」。全国から教員、新聞関係者ら過去最多の約2300人が参加しました。全体会のほか、公開授業、実践発表など27の分科会もあり、宮城から参加した教員8人、事務局2人の10人は13の分科会に出席しました。分科会の内容の一部を紹介します。

今年の全国大会は7月に盛岡市で開催されます。

<特別分科会Wに参加して>

宮城県N I E委員会事務局長 鈴木 淳

2日目の特別分科会「情報活用能力を育てる学校図書館活動とN I E」では、地元愛知県などの小学校2校、お隣静岡県の中学校1校の3校が事例を発表。中日新聞社の論説委員が図書館と新聞について意見を述べました。積極的にN I E活動を行っている横浜市立緑園東小の事例を紹介します。

報告者は副島江理子校長。テーマは『『図書館に新聞を！』学校図書館を中心にした学校経営』でした。2013年度の着任時、緑園東小の児童は読書好きで文章を読む力も高いにもかかわらず、学校図書館は蔵書が少なく、児童にとって活用しにくい状況だったそうです。副島さんは学校図書館を整備し、読書に対する興味をもっと高め、学力の向上に結びつけようと考えました。段階的に学校司書を導入するという横浜市の施策にすぐ反応。第1期の13年度後期に学校司書が配置されました。

図書館整備、読書活動の推進、各教科の授業支援、授業に関連するテーマでの新聞記事紹介など多岐にわたり、活躍してもらっているとのことでした。14年度にN I E実践指定校になり、配達される新聞を使い学校図書館内に新聞閲覧コーナーを設置。16年度にデータベースの活用も始まって、児童が課題に沿って記事を集めることが可能になり、記事活用が多くの教科、単元に広がったそうです。児童自身が新聞を読んで新たに課題意識を持ったり、新聞で自分に合った資料を探そうとしたりする点を成果に挙げていました。チャンスをどんどん生かして、目標の達成に結びつける行動力が印象に残りました。

愛知県刈谷市立衣浦小の河村智美教諭、静岡県磐田市立城山中の萩田純子司書教諭も事例を報告しました。

中日新聞の飯尾歩論説委員は各校の取り組みを踏まえ、「学校に新聞を届けることが大事。ニーズも発展性もある。学校司書を孤軍奮闘させてはいけない」と話しました。20世紀終わりに名古屋のごみ問題でキャンペーンをして、2年でごみを7割も減らしたことを例に「気付きがあれば、行動の深化が起こる。いろいろな意見を参考にしながら、自分の意見を見いだすには、一呼吸置いて考えることができる新聞がふさわしい」とまとめました。



＜実践発表Fに参加して＞

宮城県NIE委員会事務局 飯坂 新

大会2日目の分科会、名古屋市立箕瀬中学校、岡村佳和教諭の実践発表の報告です。先生は生徒の課題を学区の構成上、義務教育9か年同じ仲間でも過ごす小規模校の特異性があるため、自分の考えを進んで発言することが不得手と分析し、「新聞を活用し、対話的・主体的に学ぶ社会科学習の在り方」をテーマに26年度と28年度の教育実践の発表を行いました。

実践は中3の公民的分野「人権と共生社会」で、学習課題をそれぞれ「労働時間の規制緩和に賛成か反対か」、「仕事と育児を両立しやすくし女性の労働力率を上げるための政策を考えよう」と設定し、新聞資料を基に討論を経て最終的に自分の考えを記述し課題解決をするという内容でした。殊に後者の取組は26年度の反省を踏まえ、生徒自らが新聞資料を収集、活用して授業に臨ませるため1・2年時に新聞コンクール等に応募させ、新聞に親しませる経験を積ませた後の追検証ともいえます。

研究協議では「授業で使用する新聞記事はどの時間に集めて、どう資料化するのか」「新聞を読んでいる子が多い実態があると思うが、読み方の指導はどうしているのか」「スクラップづくりの指導は？読み合う時間のシェアは？」「第1次実践課題を踏まえての第2次実践だが、主体的学びは向上し、対話的学びに結びついたのか」等、参加者からは多様な質問も挙げられました。

先生は、2015年オズボーン博士が提唱した「未来の仕事はAIに取って代わる」を引き合いに出し、今将来の変化を予測することが困難な時代ゆえ、主体的・対話的で深い学びの必要性があると話され、28年度の実践の成果として、①NIEタイムで扱った新聞記事や自分で集めた新聞スクラップノートの記事など、生徒が主体的に収集した新聞記事を活用して(主体的な学び)、課題を考えることができた。②発表時に多くの生徒が新聞記事を自分の考えの根拠として、説得力のある発表をする(対話的な学び)ことができた。③他者の発表を踏まえ、改めて新聞記事等の資料に目を通した上で自分の考えを見直し、よりよい課題解決(深い学び)につながられた。この3点を挙げていました。

「内容の濃い発表であった」という助言者の講評が実践の全てを物語っていると感じた分科会でした。

＜公開授業Uに参加して＞

「よりよい社会や自分の在り方を探し続ける生徒
～『新聞記事から愛知の未来を考える』の実践を通して～

大崎市立岩出山中学校 教諭 齋藤 美佳

「新聞を開く 世界をひらく」というスローガンのもと、名古屋で開催されたNIE全国大会に参加した。愛知教育大学附属岡崎中学校の1年生では、リニア新幹線の開通によって都市再開発が進むという新聞記事から、愛知県の持続的な発展を考える学習を行った。

生徒たちは、新聞記事から見つけた町の魅力について発表した。その発表を聞いて驚いたことは、新聞記事を読んで見つけた課題や疑問を解決するために、生徒たち自身が現場に足を運び、新聞記者のように取材をしていることだ。例えば、ジャズで街を盛り上げようというイベントの新聞記事を読んだ生徒は、家族と一緒にそのイベントに参加。街中にジャズが流れ、人々が楽しむ様子を実際に見たことで、自分が以前住んでいた街よりも人々の団結力を感じたと述べた。また、取材後、記事の内容に批判的な考えをもった生徒もいた。大人と子どもの考えの視点に違いがあったのだろう。新聞記事を読むだけでなく、五感を使って体験することで、生徒たちの見方や考え方がより深まり、説得力のある発表になったのだと考える。新聞記者の講評では、「情報があふれるネット社会だからこそ、新聞の内容を素直に受け止めるだけでなく、批判的に捉える力も重要」と語られた。

新聞を活用したことで、主体的・対話的で深い学びというアクティブラーニングの視点が生かされた授業であった。今後も学びの充実につながる手段の一つとして、新聞を活用していきたいと思う。



4 北海道・東北ブロックN I Eアドバイザー・事務局長会議

宮城県N I E委員会事務局長 鈴木 淳

北海道・東北ブロックN I Eアドバイザー・事務局長会議が9月30日、山形市の山形新聞社で開かれました。山形開催は初めてです。ブロックのアドバイザー、事務局長が一堂に集う年1回の機会。活動を盛り上げるための方策を協議し、各道県が抱える課題にも耳を傾けました。

アドバイザーが12人、新聞社から9人、日本新聞協会から関口修司N I Eコーディネーターら2人が参加。宮城からは坂本謙アドバイザー（柴田町船岡小主幹教諭）と鈴木が出席しました。

関口さんは「新学習指導要領とN I E—N I Eの授業とアクティブラーニング」と題し基調提言をしました。小中学校の新学習指導要領が今春以降、告示されました。その総則に「新聞」の文言が盛り込まれ、まだ発表されていない高校も入るだろうと予想されます。背景には高大接続改革や、玉石混交の情報が氾濫する社会状況があると指摘しました。

ネットを中心にフェイク（偽）ニュースがはびこり、正確な情報が必要とされていることから、新聞の媒体や教材としての有用性は文部科学省も認識しています。本年度の全国学力テストでも例年と同様、新聞の閲読頻度の高い児童生徒の正答率は、低い児童生徒を上回りました。一方、新聞を読まないと答えた児童生徒の割合は増加しており、閲読習慣のある子どもは引き続き減少傾向にあります。女子高校生はスマホを一日に平均5・5時間利用するそうです。その0・5時間を削って自分の成長に当てれば、1年で182・5時間になると述べました。

有効なのは、朝読書のように隙間の時間に行えるN I Eタイム。定期的、継続的にやれば3か月で成長を実感できるとのことです。多様な語句、文章にまず触れ、情報を調べ、まとめ、仮説を振り返るN I Eは、次期学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」につながると強調しました。

各道県の報告では、北海道の渡辺多美江事務局長が「大学のN I Eを考える会」の活動をきっかけに、大学の先生たちとの交流が増え、北海道教育大札幌校でN I E講座開設の動きが出ていると述べました。岩手の女鹿芳文アドバイザー（岩手県教委学校調整課主任指導主事）は「新聞は素晴らしい料理だと思うが、素材を（教材として）生かすのが難しい」と使う側の悩みを打ち明けました。福島県の渡辺順事務局長は福島県N I E推進協会が主催し、初めて開催したN I Eシンポジウムについて報告。「共催の県教委が積極的に動いてくれた。来年以降も開く」

と語りました。

宮城は、小学校部会（部会長・相澤経利仙台市七北田小校長）が取り組んでいる新聞無料提供の事業、かほくN I E工房を衣替えし5月から毎月開いている土曜しんぶんカフェなどを鈴木が紹介。坂本さんは実践指定校としての活動、「かほくワークシート」などについて報告しました。かほくワークシートは8人のアドバイザー、宮城県N I E委員会コーディネーターが交代で執筆し、毎週日曜の「こども新聞 週刊かほピョンプレス」に掲載されています。データは河北新報のホームページからダウンロードし、使うことができます。

3グループに分かれ、「新学習指導要領の趣旨を生かしたN I E」をテーマに意見交換しました。鈴木グループは「これまで通りN I E活動を進めていけば、新しい指導要領にも対応できる」との認識で一致しました。このほかアドバイザーから「新聞社も学校を意識して記事を書いてほしい」「行政が動き出した今こそ、N I Eを広める好機」といった意見が出ました。他グループでは「『学力テストで、実践指定校は明らかに点数が高い』と県教委から聞いた」という心強い報告もありました。各道県の工夫一つで活動がぐっと盛り上がりそうな気がしました。

7月26、27日の第23回N I E全国大会盛岡大会について、主管社岩手日報社の報告もありました。実行委事務局長を務める谷藤典男編集局次長兼読者センター長は「東日本大震災の被災3県で初めて会場になる。津波で1000人以上が犠牲になった大槌町でも公開授業をし、復興の現場を見てもらう。1000人以上の大会参加を期待している」と話しました。



V みんなの広場

「新聞活用の楽しさ」とは・・・

仙台市立折立中学校 教諭 菅原 久美

1 はじめに

生徒たちが日常生活の中で、新聞に触れる機会が少なくなっていることを年ごとに強く感じている。今年度、転勤先の学校で出会った生徒たちも同様だった。その中で、どのように新聞を活用できるのか、楽しく活用する方法としてどのような工夫が必要なのか。また、先生方に新聞活用の楽しさを実感してもらうには、どうしたらよいか・・・を考えてのスタートだった。

「捨ててしまう新聞の中にたくさんの幸せな言葉があって、見えない日々の生活の中に幸せがかくれているんだなと思いました。今、私にはやらなければならないことがたくさんあってマイナス思考になりがちでしたが、プラス思考で考えて乗り越えていこうと思える勇気を新聞からもらいました。」

「いつも新聞はあまり読まないのですが、ただ情報を得るためのものだと思っていた新聞から、視点を変えよくみると、いろいろなおもしろい言葉や写真があって、新聞もいい作品の一つなのだと思います。」

「自分にとっても自信がもてない私が、“ことばの貯金箱”の活動を通して、自分らしい言葉を見つけて表現することができました！」

「新聞にはたくさんの言葉が載っていて、自分であまり使ったことのないような温かい言葉や明るくなる言葉がじっくり探すたくさんあって、自分の言葉のレパートリーが増えました。他の人が選んだ言葉からもたくさんの発見があって良かったです。」

「普段、あまり新聞は読みませんが、使い方が変わるとこんなにもおもしろくなるんだなあと感じました。楽しかったので、このような活動をもっとしたいなあと思う。」

以上、生徒の感想から。

2 折立中での今年度の取組

(1) つぶやき NEWS

①社会科の授業

公民分野の政治学習の導入として、政治について関心を高めるために、各自新聞から政治に関連する気になる記事を切り抜き、一枚の台紙(模造紙半分)に貼って、4人グループでお互いの考えをつぶやき

合う(マジックで書き込む)。さらに、共通点や疑問点など話し合いを行う。

②学級活動の時間

コミュニケーション能力高め、他者理解・自己理解を図ることを目的として実施。

古新聞から「心がぼかぼかする(温かくなる)記事を探して切り抜き、①同様、4人グループで一枚の台紙(模造紙半分)に貼り、お互いに記事やつぶやきを読み、つぶやき合う(マジックで記入)。

さらに、「どのようなこと(時)に人は心が温かくなるのか」などについて話し合う。

(2) ことばの貯金箱

・総合的な学習の時間

「自分づくり」学習の一つとして実施。



3 最後に

はじめの「生徒の感想」のように生徒たちは、新たな新聞との出会いがあり、新聞活用の多様性を知ることができた。生徒たちの感想に励まされながら試行錯誤する日々。先生方にも、取り組んでいる生徒たちの表情が大きく違ふと好評であった。

今年度もこれまで以上に、新聞販売店さんのご厚意によって、大量の古新聞を活用することができた。生徒たちにとって新聞が身近な存在であり、手軽に活用できるような環境があればと願いながら、「新聞活用の楽しさ」を共に味わいたいと考えている。

「新聞丸写し」で育まれたもの

仙台市立高森中学校 教諭 木下 晴子

20年以上前のNIEを始めただけの頃、日本NIE研究会名誉会長の妹尾彰先生から、「楽しくなければNIEではありません。先生も生徒と一緒に楽しみながらやってください。そして、続けてください。」とおっしゃっていただき、それ以降、自分も楽しみながらNIEを行おうと思ってきた。この20年、積極的に取り組んだ時期もあれば、ほとんど新聞を使わない時期もあったが、細々ながらもずっとNIEに関わってこられたのは、新聞を使うと授業が楽しく感じられることが多かったからだ。

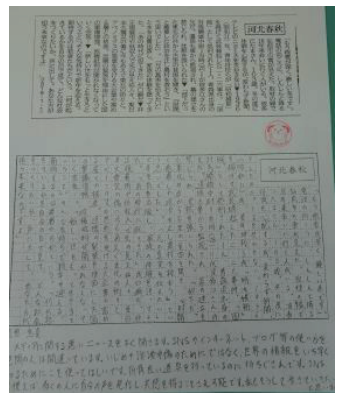
今年度、私は中学校3年生の国語の授業を担当した。その中で、生徒の語彙力の低さがずっと気になっていた。生徒は言葉で熟語を覚えても、文中で使用し表現することができない。いろいろな言葉を様々な場面に合わせて使えるようになるはどうか。自分の言葉で、人にものを伝えられる大人になってほしい。そこで、昔から行われていることだが、新聞記事(河北春秋)を写すことを考えた。

国語の時間に宿題としてプリントを渡し、次の時間に回収し点検することを繰り返す、というシンプルな流れである。とにかく継続することを目標に、10月から行ってきた。

最初は、ただ写すだけで精一杯だった。課題も「写すだけ」なので問題はない。しかしそのうち生徒は「考える」ようになってきたと感じている。河北春秋には、その時々世相が反映されている。できるだけ殺人事件などの個人的な犯罪は取り上げないようにしているが、ハッピーなものばかりではない。自然災害、企業の不正、震災復興に関すること…。さまざまな出来事が世間を騒がせている。続けるうちに、次の課題を渡す前に、私が記事内容に関してひとこと説明を付け加えるようになった。アメリカの銃乱射事件の際には服部剛丈さんの事件について、北朝鮮による拉致問題については横田めぐみさんのことを、地位協定のことからは沖縄での少女暴行事件について、ジョン・レノンの平和を願った奇想天外なパフォーマンス…。時には話の内容が記事から外れたりもした。ほとんどの生徒が関心を持って聞いてくれていることが教室の雰囲気でも分かる。話しながら当時の気持ちが蘇り、つい熱弁をふるうこともあった。すると、プリントに自分の意見や現在考えていることを書く生徒が出てきた。プリントではなく、国語の時間に書いてもらっている「自己点

検表」の「ひとこと」の欄に記事について書く生徒もいた。生徒の意見を、(名前は出さずに)紹介することもある。この文章を書いている現在(1月半ば)も、それは続いている。

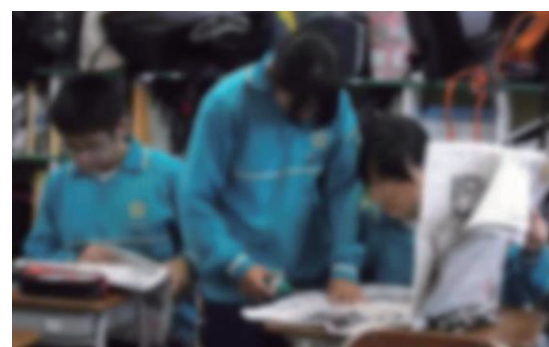
受験が始まり寸暇を惜しんで勉強しなくてはいけないこの時期だが、多くの生徒は多分、先生への礼儀だけでなく、関心を持って新聞を読み私の話を聞いている。受験勉強は必要だし大切だが、社会を知る勉強は楽しいし大切だ。語彙力を付けるという本来の目的も、(きちんと検証はしていないが)感覚では伸びてきている。それらがとても「楽しい」。生徒にとっては、新聞を写す作業はちょっと大変ではあるが、新聞を読んで知的好奇心を満たすのは、宿題でありながら受験勉強の息抜きにもなるという、若者言葉で言うところの「ビミョー」な位置づけになっているのではないと思う。



感想・意見
メディアに関する悪いニュースをよく聞きます。SNSやインターネット、ブログ等の使い方を世間の人々は間違っています。いじめや非難中傷のためにではなく、世界の情報をいち早く知すためにこそ使ってほしいです。折角良い道具を持っているのに持ちださず、SNSを使えば、多くの人に自分の声を発信し、共感を得ることが可能です。私もこうして生きていきたいです。

前頁の22番の7017の文が左に的的刺さる感じが、
日本はいつか平和な国でなくなるかもしれない。世界中の平和を維持するために、
争うのは何かを欲するからで、
谷は消えぬから争いは止まる。
戦争の写真を見ると本当に同じ世界にいるのを感じる。
まはつた戦争の有名なつてかです。村小重作

新聞の核兵器が絶対禁止は進んで思う
米銃協会の、銃が人を殺す。人が人を殺すのは、
Y.銃は、米人の木製だとか言ってる。平和は進んで



第23回新聞記事コンクール 河北新報社賞受賞作

闘う勇気を持つとう

宮城県泉高2年 関本 千夏

沖縄県の小学一年生担任が児童に向かい「赤ちゃん」「脳みそ使えよ」などの暴言を発していたというニュースを見た。私は目の前でいじめが起きたとき、それと闘う勇気を持つべきだと思う。

私が小学生の時、少し発達障害を持った同級生がいた。彼は落ちついて座っていることができず、授業中に何度注意されても立ち歩いてしまうことがあった。

それに対し私達の担任は「赤ちゃんだから言葉がわからないんでちゅね」など赤ちゃん口調で馬鹿にしたように話すようになり、次第に元気よく「はい」と挙手しても「はいはいなら前でやりな」と言って教壇ではいはいさせるようになった。その影響で児童まで彼を赤ちゃん扱いするようになり、彼がやめると叫んでも誰もやめることも注意することもしなかった。

私はその担任に不信感を抱き、直接担任に「これはいじめだと思う」と抗議したが、とりあってもらえなかった。しかし、ある日の給食の時間に担任が突然、私からみんなに話があるそうだといい出した。そんなこと私は一言も言っていないため混乱と恐怖でいっぱいになったが、ここで負けてはいけなと思った。私はいじめをやめようとみんなに懸命に話した。反論されても話し続けた。その結果いじめはなくなり、仲良く生活できるようになった。

よく言われるように、いじめを無くすことはできないだろう。だが、いじめられている人を庇(かば)う人が一人でもいたら、側にいて支える人が一人でもいたら心は救われるのではないだろうか。人は心が一人になった時に本当の悲しみを感じるのだと思う。自分の周りの人がその様な状況になった時、恐れや不安に打ち勝ち、闘う勇気を持ち続けて生きて行きたい。小さな私一人でも、少しの勇気で大切な人の心を守れるのだから。

寄磯のホヤは世界一

石巻市立寄磯小6年 遠藤 怜明

「世界一うまいホヤだ」

私は、寄磯の金華ホヤは、日本一、いや世界一のおいしさだと思う。身は、プリプリで甘い。このように感じているのは私だけではないだろう。

7月、学校の行事の海洋体験で地域の人にインタビューをした。

「寄磯で有名な海産物は、何だと思いますか」すると、地域の人たちから、「ホヤが有名かな」「寄磯のホヤは、世界一おいしいからなあ」という声がたくさん聞こえてきた。私と同じだ。

寄磯の人たちは、漁業をなりわいに行っている人がほとんどだ。ホヤやアワビ、ホタテなどたくさんの海産物がとれる。しかし、正直どのように水あげし、どのように加工しているのかよくしなかった。

そこで、海洋体験でホヤの水あげ体験、ホヤむき体験をした時、方法や手順をよく見て取り組んだ。

地域の漁師さんに教えてもらいながら船に乗り、水あげからホヤむき、パック詰めまで体験した。

特に、ホヤの皮をむくのが大変だった。私がどんなにがんばっても、ホヤの皮はむけなかった。でも、地域の漁師さんは、パッとすぐに皮をむいていて、さすがプロだと感じた。これを毎日続けるのは、本当に大変な仕事だと感じた。

大変な作業がたくさんあるからこそ、寄磯の金華ホヤは、世界一おいしいのだと思う。

金華ホヤだけではない。ホヤの他にもホタテやアワビ、ウニ、ワカメなども寄磯がほこる海産物だ。

寄磯のみ力をたくさんの人に伝えたい。ホヤを食べてもらいたい。アワビやワカメ、ウニ、ホタテのおいしい食べ方を知ってもらいたい。もし、ホヤを食べたことがない人には、「安心して食べてえける。うめっから」と伝えてあげたい。

「寄磯のホヤは、世界で一番うんめえぞ!」。寄磯から日本全国へ発信したい。

新聞記者との小さな交流

柴田町立柴田小学校 校長 坂本 忠厚

宮城県N I E実践指定校となっている本校では、授業の各教科に積極的に新聞を取り入れるとともに新聞が身近にある環境づくりの実践を積み重ねてきた。

今年度に入り、河北新報東北ワイド版には、東北各地の話題が取り上げられている。6月に修学旅行で会津若松方面に行く6年児童（9名）には、以下の三つの記事を配り、感想やさらに調べてみたいことなどを書かせてみた。

* 白虎隊慰霊の春季墓前祭・高校生勇壮な剣舞

（会津高校生剣舞委員会の奉納舞）

* 新撰組局長 近藤勇の50回目の慰霊の墓前祭

* 会津藩の女性の慰霊「奈与竹之碑」墓前祭

子どもたちは、まだ、歴史的な知識としては不十分ながら、戊辰戦争の経緯や会津藩が戦い続けた理由、郷土への愛着やこれからの平和な日本の構築など、記事の中からいろいろな思いを巡らせた。そんな中で、“この記事を書いた人はどんな思いで書いたのだろうか”という一文があった。新聞は、事実を伝えるメディアではあるが、記事として取り上げるか否か・見聞した事実をどのように表現するかということは、記事そのものに記者の思いが込められているはずである。（当然、記事は編集会議などを通じデスクや編集長の目を通ることにはなるが）

これまで、語り継がれている会津戊辰戦争の起こった場所をこの目で見てみたい、願わくば、この記事を書いた記者に会ってみたい。そんな小さな子どもの願いに、河北新報社は応えてくれた。

日ごろ本校の活動のお世話をいただいている、河北新報社防災・教育室 鈴木淳部長の仲介で、春季墓前祭の記事を書いた、会津若松支局の跡部裕史記者とつないでもらい、本校が修学旅行で飯盛山を訪れる6月16日に記事を書いた現場で直接お話を伺う機会を作ってもらった。子どもたちは、嬉しさと半信半疑の思いを持っていたようだ。

当日は、天気は快晴。地元売店の方のガイドさんの案内によって、白虎隊自刃の地やさざえ堂を見学。そして、19名の当時、この児童に近い年代の若き御霊が眠るお墓の前で、児童の質問に答えるという形で、小学生へのミニ授業が実現した。

質問したのは、後に感想を書いた3名である。

跡部記者は、『この地であった出来事を後世の代まで忠実に伝えていく必要があること、それを会津の人たちは大切に思い毎年形にしながら伝えていること。その事実を新聞を通して広く伝えていくことが大切である』という内容を子どもたちにわかりやすく、また、とても丁寧に説明してくれた。「取材のときは、ここからこっちの方を向いて写真を撮ったとか会津高校の生徒は、はきはきとしてとても礼儀正しかった」などと取材時のエピソードも話してくれた。また、学生時代に出版社のアルバイトがきっかけで、新聞記者の道を目指したことや、長期間に渡る取材の苦労や、震災後会津若松市に避難された方々への辛い取材のことなども話してくれた。新聞記者としてのやりがいは、小さな記事でも、読者の方からの温かい励ましの声や反響が届くことが嬉しい。激務のあとの一杯が楽しいなどとユーモアを交えた話で子どもたちに多くのことを伝えてくれた。跡部記者が、同じ宮城県出身（大衡村）ということも子どもたちに、親近感を持たせる要因になったと思われる。臨場感溢れる場所でのお話は、子どもたちの心にもしっかりと届いたにちがいない。ミニ授業の後に、子どもたちは新聞記事の奥深さの一端に触れ、自分たちもただ活字や写真を追うだけではなく、記事を読み、それをどのように生かしていくかということが新聞活用の大事な視点であることを身を持って体験することができた。2日間、9名の子どもたちは、会津の風に吹かれながら、多くの史跡・名勝を見学したくさんの思い出を心に刻んだ。その中に、跡部記者との、新聞記事を通しての心のつながりも、彼らの未来につながる大きな種になるであろう。

新聞記事を読んで思ったこと

高校生 勇壮な剣舞

会津若松 白虎隊慰霊の墓前祭



勇壮な剣舞を披露する会津高の生徒たち

戊辰戦争（1868～69年）で亡くなった会津藩の少年藩士・白虎隊を慰霊する春季墓前祭が24日、会津若松市の飯盛山であった。郷土のために戦い、自刃した隊士たちに関係者が玉串をささげた。

財団設立100周年を迎えた会津弔霊義会が主催し、会員や隊士の親族の子孫ら約150人が参列。祭文を読み上げた芳賀公平理事長は「今の私たちの平穏な暮らしは多くの先人の犠牲の上に成り立っている。私たちは史実を風化させず、後世に伝える責務を負っている」と述べた。

会津藩校「日新館」の流れをくむ会津高の剣舞委員会の生徒20人が、勇壮な舞を奉納した。集まった見物客は、白虎隊と同年代の生徒たちのりりしい姿に在りし日の隊士の姿を重ね合わせながら見入っていた。

剣舞の奉納は、隊士の墓が建立された1884年以降、春と秋の2回、太平洋戦争の一時を除いて毎年行われている。

柴田小学校 6年 平間 勇士

柴田小学校 6年 大沼 小春

毎年行われている行事ですが、今回新聞にのっているの、新聞記者の人がどのような思いで書いたのかを知りたいと思いました。実際に、この記事を書いた人に会ってみたいです。もし会えたら、今年でもこのような記事を書いていたのか、今年だけ書いたのか聞いてみたいです。

6月、修学旅行でここに行くことになると楽しみになった。高校生の剣舞を間近で見たいです。そして、白虎隊の歴史や、白虎隊はいったいどんなことをしていたのかということ調べてみたいです。

また、新選組の近藤勇さんのために、50年も続けて墓前祭をやっていることがすごいいいと思いました。続けている人たちは、きっといろいろな思いがあるのでしょう。

そんな会津若松市の人たちの思いというものを、今度の修学旅行で実際に会津の町を歩きながら感じ取っていきたいと思います。

本当に今、私たちが平穏に暮らせるのは多くの先人のおかげだなと思いました。私たちの地域でも大切なことは忘れずに覚えて、大人になったらちゃんと後世に伝えられるようにしたいと思いました。私が、この地域で大切にしたいと思っていることは、大黒舞の踊りです。米が取れたときにお祝いをする踊りですが、とても楽しいです。また、わたしの一番好きな場所は、雨乞の大銀杏です。とても大きな木です。そこから見える柴田の自然も大好きです。

新聞を読んで、50回も墓前祭が開かれるほど近藤さんはすごかったと思いました。私は、近藤さんについてよく知りませんが、最後は処刑されて、さらし首にされたという説もあると聞いて、かわいそうだなあと思いました。昔は、警察のようなところもなく、戦争が起きたのかなあと思いました。剣舞を披露する高校生がすごいいいと思いました。

私も、やってみたいと思いました。修学旅行では、お城を見ることが楽しみです。

戊辰戦争でなくなった会津藩の少年藩士・白虎隊を慰霊する春季墓前祭があったことをはじめで知りました。郷土のために戦って自刃した隊士たちに剣舞を春秋二回行っていることも知りました。また、何回も新聞を見ていると、女性の人たちも戦に入り、戦ったと知り、小さな女の子までが戦に入って命をなくすので、ひどいなあと思いました。自分が上になるために、戦争をしたのかもしれませんが、今の時代だったら、私は、やめさせたいと思います。

私たちと同じくらいの少年たちが、お城が燃え

ている・・・と見間違えて、自ら刀をさしたということを知って、本当に悲しいことがあったんだなあと思いました。

記事の中にあつた、『今の平穏な暮らしは多くの先人の犠牲の上に成り立っている。後世に伝える責務を負っている』という言葉に、私たちもきちんとその責務を負うという気持ちが大切だと感じました。私は、まもなく会津若松に行くので、飯盛山であった出来事をしっかりと見てみたいです。そして、この剣舞を自分の目で見てみたいです。



VI 研究組織

1 宮城県NIE委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県NIE委員会と称する。

(目的)

第2条 本会はNIE (Newspaper in Education・教育に新聞を)の呼称にちなみ、新聞を生きた教材として活用し、文章作成をはじめ、社会問題への理解など教育内容を豊かにするとともに、情報化社会における情報の処理、活用能力を高めて、幅広い人間形成に役立てることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次の事案について協議し、指導助言する。

①実施目的及び計画に関すること。

②研究推進組織に関すること。

(組織)

第4条 本会の委員構成は次に掲げるものとする。

宮城県教育委員会代表者
仙台市教育委員会代表者
宮城県小学校長会会長
仙台市小学校長会会長
宮城県中学校長会会長
仙台市中学校長会会長
宮城県高等学校長協会会長
宮城県連合小学校教育研究会会長
宮城県連合中学校教育研究会会長

宮城県連合小学校特別活動研究会会長
宮城県連合中学校特別活動研究会会長
宮城県連合小学校生活・総合研究会会長
仙台市中学校総合的な学習研究会会長
宮城県連合小学校国語研究会会長
宮城県連合中学校国語研究会会長
仙台市中学校国語研究会会長
宮城県内の大学の代表者
在仙の日本新聞協会加盟社の代表者

(任期)

第5条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(会長・副会長・監事)

第6条 1 本会に、会長1名、副会長5名、監事1名を置く。

2 会長は委員会を代表し、会務を統括する。

3 副会長は会長が指名する。

4 会長に事故ある時は、副会長がその会務を代理する。

5 監事は会計監査を行う。

(会議)

第7条 本会の会議は、会長が招集し、主宰する。

(顧問)

第8条 本会に次の顧問を置く。

宮城県教育長 仙台市教育長

(推進委員会)

第9条 本会の事業を達成するために、宮城県NIE推進委員会を置く。この会則は別に定める。

(庶務)

第10条 1 本会の庶務は、宮城県NIE委員会事務局が行う。

2 会計年度は4月1日から翌年3月31日とする。

(報酬)

第11条 本会の会長、副会長及び委員には報酬を支給しない。

(補則)

第12条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正 平成5年7月1日

改正 平成6年6月9日

改正 平成16年2月27日

改正 平成18年2月15日

改正 平成22年2月26日

改正 平成22年6月1日

改正 平成23年7月5日

改正 平成24年6月5日

改正 平成25年6月20日

2 宮城県N I E推進委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県N I E推進委員会と称する。

(目的)

第2条 本会は、宮城県N I E委員会会則の第2条(目的)を達成するために、次のことを行う。

- ①教科及び領域等における、新聞を教材として活用する実践の研究
- ②児童・生徒の現代社会に対応する情報活用能力の育成

(研究)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次のことについて協議し、研究する。

- ①N I E研究活動の推進
- ②研修会の開催、研究成果の公開及びその表彰
- ③新聞についての諸調査
- ④研究会誌の編集と発行
- ⑤その他の会の目的を達成するために必要なこと

(組織)

第4条 1 本会は、N I Eに関心を持ち、加入を希望する教育関係者等で組織する。

2 本会の構成は次の通りとする。

委員長1名、副委員長、運営委員、専門委員、委員、事務局

3 委員長、副委員長を役員とする。

(任期)

第5条 役員、運営委員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

(委員長)

第6条 1 委員長は副委員長の互選により定める。

2 委員長は委員会を代表し、会務を統括する。

(副委員長)

第7条 1 副委員長は、次に掲げるものとする。

宮城県連合小学校特別活動研究会長、同中学校特別活動研究会長、同小学校生活・総合研究会長、
仙台市中学校総合的な学習研究会長、宮城県連合小学校国語研究会長、同中学校国語研究会長、
仙台市中学校国語研究会長、本会小学校部会長、同中学校部会長、同高等学校部会長

2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときはその会務を代行する。

(運営委員)

第8条 1 運営委員は、会員の互選により定める。

2 運営委員は、研究活動の運営及び推進を主導する

(専門委員)

第9条 1 専門委員は、会員の互選により定める。

2 専門委員は、それぞれの所属する研究部門において実践にあたる。

(会議)

第10条 本会の会議は、委員長が招集し、主宰する

(提携する他の機関)

第11条 本会の目的を達成するために、宮城県N I E委員会と提携する。

(庶務)

第12条 本会の庶務は、宮城県N I E委員会事務局が行う。

(補則)

第13条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正 平成5年6月25日

改正 平成16年2月27日

改正 平成20年1月16日

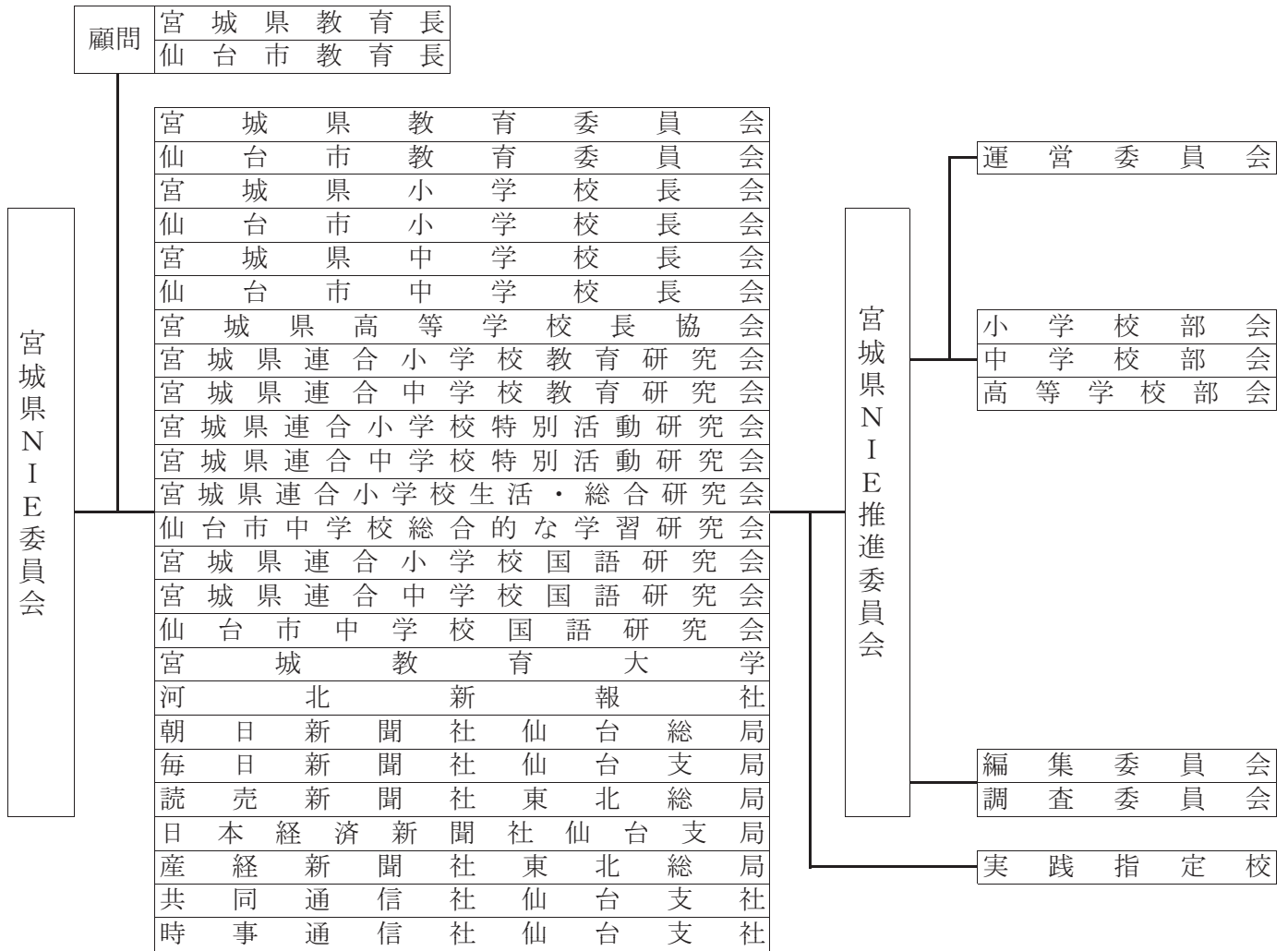
改正 平成23年2月25日

改正 平成24年6月5日

◆内規 *追加

1 宮城県N I E実践指定校は、教員1名以上が本会に加入し、運営委員を務める。

3 宮城県NIE委員会 及び 宮城県NIE推進委員会の構成



平成29年度宮城県NIE委員会役員

〈敬称略〉

役職	氏名	所属役職
顧問	高橋 仁	宮城県教育委員会教育長
顧問	大越 裕光	仙台市教育委員会教育長
会長	桂島 晃	宮城県中学校長会長（塩竈第一中校長）
副会長	加藤 順一	宮城県高等学校長協会会長（仙台一高校長）
副会長	新山 弘幸	仙台市中学校長会長（長町中校長）
副会長	吉木 修	宮城県小学校長会長（増田小校長）
副会長	坂本 憲昭	仙台市小学校長会長（荒町小校長）
副会長	武田 真一	河北新報社防災・教育室長
委員	岡 邦広	宮城県教育庁高校教育課長
委員	奥山 勉	宮城県教育庁義務教育課長
委員	猪股 亮文	仙台市教育局教育指導課長
委員	堤 祐子	宮城県連合小学校教育研究会会長（立町小校長）
委員	齋藤 誠治	宮城県連合中学校教育研究会会長（大沢中校長）
委員	畠山 厚子	宮城県連合小学校特別活動研究会会長（鶴谷東小校長）

役職	氏名	所属役職
委員	佐々木 静輝	宮城県連合中学校特別活動研究会会長（三条中校長）
委員	木越 研司	宮城県連合小学校生活・総合研究会会長（北中山小校長）
委員	八島 浩子	仙台市中学校総合的な学習研究会会長（生出中校長）
委員	小石 俊聡	宮城県連合小学校国語研究会会長（住吉台小校長）
委員	櫻井 正昭	宮城県連合中学校国語研究会会長（古川北中校長）
委員	岡崎 徹	仙台市中学校国語研究会会長（五橋中校長）
委員	児玉 忠	宮城教育大学（教授）
委員	後藤 啓文	朝日新聞社仙台総局長
委員	永海 俊	毎日新聞社仙台支局長
委員	小野 一馬	読売新聞社東北総局長
委員	川合 知	日本経済新聞社仙台支局長
委員・監事	廣瀬 典孝	産経新聞社東北総局長
委員	影井 広美	共同通信社仙台支社長
委員	宮坂 一平	時事通信社仙台支社長

平成29年度教育委員会担当者 〈敬称略〉

宮城県	櫻井 知大	宮城県教育庁高校教育課主幹
宮城県	和田山 秀博	宮城県教育庁義務教育課課長補佐
仙台市	齋藤 敦子	仙台市教育局教育指導課主任指導主事

平成29年度 宮城県NIE推進委員会 運営委員会

(敬称略)

役 職	氏 名	学校名(職名)
委員長	小 石 俊 聡	仙台市立住吉台小学校(校長)
副委員長・中部会長	佐々木 静 輝	仙台市立三条中学校(校長)
副委員長	畠 山 厚 子	仙台市立鶴谷東小学校(校長)
副委員長	木 越 研 司	仙台市立北中山小学校(校長)
副委員長	八 島 浩 子	仙台市立生出中学校(校長)
副委員長	櫻 井 正 昭	大崎市立古川北中学校(校長)
副委員長	岡 崎 徹	仙台市立五橋中学校(校長)
副委員長・小部会長	相 澤 経 利	仙台市立七北田小学校(校長)
運委・小副部会長	高 橋 淳	仙台市立北仙台小学校(校長)
運委・小副部会長	鍵 頼 信	石巻市立大川小学校(校長)
運委・会計	大 友 浩 美	仙台市立袋原小学校
運委	伊 藤 公 一	仙台市立秋保小学校(校長)
運委	中 辻 正 樹	仙台市立七郷小学校(教頭)
運委	阿 部 謙	仙台市立東六番丁小学校(教頭)
運委	大 場 陽 子	川崎町立前川小学校(教頭)
運委	千 葉 久美子	仙台市立北六番丁小学校
運委・実践指定校	今 藤 正 彦	仙台市立七北田小学校
運委	山 本 十和子	仙台市立片平丁小学校
運委	青 木 茂	仙台市立高砂小学校
運委	鈴 木 誠	多賀城市立多賀城東小学校
運委	齋 田 淳 一	仙台市立大倉小学校
運委	松 本 瑞 雅	仙台市立柳生小学校
運委	三 塚 理 恵	美里町立青生小学校
運委	秋 場 文 東	松島町立松島第一小学校
運委	小 山 順 一	登米市立北方小学校
運委	千 葉 修	大崎市立三本木小学校
運委	行 本 忠 司	仙台市立大野田小学校
運委・実践指定校	坂 本 謙	柴田町立船岡小学校
運委・実践指定校	松 永 秀 子	柴田町立柴田小学校
運委・実践指定校	菅 原 洋 一	登米市立豊里小学校
運委・実践指定校	石 井 真紀子	仙台市立八木山小学校
運委・中副部会長	進 藤 千 枝	仙台市立長町中学校
運委・会計	菅 原 久 美	仙台市立折立中学校
運委	佐々木 成 行	仙台市立第一中学校(校長)
運委	相 澤 和 男	石巻市立蛇田中学校
運委	須 藤 浩 司	仙台市立八木山中学校
運委	木 下 晴 子	仙台市立高森中学校
運委	齋 藤 美 佳	大崎市立岩出山中学校
運委	庄 司 涉	大崎市立松山中学校
運委	石 井 宜	仙台市立八木山中学校
運委	清 野 和 俊	仙台市立住吉台中学校
運委・実践指定校	山 家 優 子	登米市立豊里中学校
運委・実践指定校	丸 山 仁	宮城学院中学校
副委員長・高部会長	平 居 高 志	宮城県塩釜高等学校
運委・高副部会長 実践指定校	山 田 如 意	聖和学園高等学校
運委・会計	大 槻 欣 史	宮城県名取北高等学校
運委	萱 沼 俊 一	宮城県白石工業高等学校
運委	木 村 誠	宮城県仙台南高等学校
運委	柴 田 隆 一	東北学院高等学校
運委	加 藤 寿	東北学院高等学校
運委	加 勢 徳 寿	宮城県教育庁東部教育事務所登米地域事務所
運委・実践指定校	鈴 木 理 恵	仙台北南高等学校
運委・実践指定校	三 嶋 廣 人	宮城県気仙沼高等学校
運委・実践指定校	戸 田 道 彦	宮城県仙台北三高等学校

NIEアドバイザー

(敬称略)

氏 名	学校名
阿 部 謙	仙台市立東六番丁小学校(教頭)
中 辻 正 樹	仙台市立七郷小学校(教頭)
今 藤 正 彦	仙台市立七北田小学校
坂 本 謙	柴田町立船岡小学校
木 下 晴 子	仙台市立高森中学校
菅 原 久 美	仙台市立折立中学校
齋 藤 美 佳	大崎市立岩出山中学校
大 槻 欣 史	宮城県名取北高等学校
齋 藤 昭 雄	宮城県NIE委員会前コーディネーター

宮城県NIE事務局

氏 名	所 属 役 職
武 田 真 一	河北新報社防災・教育室長
鈴 木 淳	河北新報社防災・教育室部長
佐々木 可奈子	河北新報社防災・教育室
大 槻 俊 順	河北新報社防災・教育室
藤 田 和 彦	河北新報社防災・教育室
大 泉 大 介	河北新報社防災・教育室
飯 坂 新	宮城県NIE委員会コーディネーター
主 藤 綾	河北新報社防災・教育室
天 野 路 子	河北新報社防災・教育室
伊 藤 純 子	河北新報社防災・教育室

Ⅶ 宮城県NIEの歩み

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集録・紀要・他
平成 元 年 度	県NIE 委員会・ 推進委員 会設立事 務局河北	小 9 中 17 計 26	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録1号
平成 2 年 度		小 22 中 17 計 39	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ	○芦口小 H2・10 ○八幡中 H2・10 ○中野中 H3・1		○県研究集録2号 ○紀要 芦口小 八幡小
平成 3 年 度	高校部会 発足	小 24 中 26 高 9 計 59	○長町中	○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録3号 ○実践実例集 小グループ1号
平成 4 年 度		小 27 中 22 高 10 計 59	○長町中 ○旭丘小	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○長町中 H5・1 ○旭丘小 H5・1	○小学校NIE研修会	○県研究集録4号 ○実践実例集 小グループ2号
平成 5 年 度	朝日・読売 毎日・共同 時事の各社 加盟	小 56 中 30 高 16 計 102	○長町中 ○旭丘小 ○折立小 ○八軒中	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H5・10 ○長町中 H6・1 ○旭丘小 H6・2	○小・中学校NIE研修会	○県研究集録5号 ○実践実例集 小グループ3号
平成 6 年 度	日経・産経 の各社加盟	小 68 中 49 高 18 他 1 計 136	○折立小 ○上杉山通小 (ハイト校) ○八軒中 ○向陽台中 (ハイト校) ○泉高 (ハイト校)	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H6・10 ○泉高 H6・11 ○折立小 H7・2	○小・中・高校NIE研修会	○県研究集録6号 ○紀要 折立小 ○実践実例集 小グループ4号 中NIE部1号 ○みやぎNIEだより 1. 2. 3号
平成 7 年 度		小 105 中 47 高 19 他 5 計 176	○上杉山通小 (ハイト校) ○向陽台中 (ハイト校) ○袋原小 ○茂庭台中 ○泉高 (ハイト校)	○小・中・高部会の 研究活動	○向陽台中 H7・12 ○上杉山通小 H8・1	○宮城県NIE研修会 ○地区研修会(古川) ○地区研修会(七ヶ浜)	○県研究集録7号 ○紀要 上杉山通小 ○実践実例集 小学校部会5号 中学校部会12号 ○みやぎNIEだより 4. 5号
平成 8 年 度		小 113 中 54 高 22 他 7 計 196	○袋原小 ○上杉山通小 ○将監小 ○古川一小 ○茂庭台中 ○生出中 ○宮中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動 (授業研究)	○茂庭台中 H8・10 ○上杉山通小 H8・10 ○桜丘中 H8・11 ○将監小 H9・1 ○袋原小 H9・2	○宮城県NIE研修会 (仙台市) ○宮城県NIE白石研修会 (白石二小) ○宮城県NIE石巻研修会 (住吉小)	○県研究集録8号 ○紀要 袋原小 ○実践実例集 小学校部会6号 ○みやぎNIEだより 6. 7. 8. 9号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 9 年 度		小 122 中 60 高 28 他 7 計 217	○将監小 ○古川一小 ○桂小 ○大鷹沢小 ○生出中 ○宮中 ○蒲町中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動	○将監小 H9・11 ○桂小 H10・2	○宮城県N I E 研修会 (常盤木学園高) ○宮城県NIE白石研修会 (大鷹沢小) ○宮城県NIE石巻研修会 (石巻中) ○中・高部会研修会 (田子中)	○県研究集録9号 ○紀要 将監小 ○みやぎN I E だより 10. 11. 12. 13号
平成 10 年 度		小 132 中 61 高 27 他 7 計 227	○桂小 ○大鷹沢小 ○女川四小 ○蒲町中 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動	○女川四小 (授業公開) H10・5 ○桂小 (授業公開) H10・11 ○常盤木学園高 H10・11 ○大鷹沢小 (授業公開) H11・1	○第3回N I E 全国大会 (メルパルクSENDAI) ○宮城県NIE石巻研修会 (稲井小) ○中・高部会研修会 (七郷中) ○小部会研修会 (桂小)	○県研究集録10号 ○N I E 実践事例集 「やってみよう!NIE」 小学校部会 ○みやぎN I E だより 14. 15. 16. 17号
平成 11 年 度		小 132 中 60 高 28 他 10 計 230	○女川四小 ○東長町小 ○しらかし台小 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○山田中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの 研究)	○常盤木学園高 (授業公開) H11・11 ○しらかし台小 (授業公開) H11・11・26 ○女川四小 (授業公開) H11・11・29 ○七郷中 (授業公開) H11・12・1	○宮城県N I E 研修会 H11・6・16 (明成高) ○小部会プロジェクト提案 H11・8・24 (東六小) ○宮城県NIE石巻研修会 H11・11・22 (蛇田小) ○宮城県NIE大河原研修会 H11・12・1 (金ヶ瀬中) ○中部会授業研究会 H11・12・1(七郷中) ○小部会実践発表会 H11・1・12 (東長町小)	○県研究集録11号 ○みやぎN I E だより 18・19・20・21号
平成 12 年 度		小 128 中 60 高 31 他 13 計 232	○東長町小 ○しらかし台小 ○大沢小 ○蛇田小 ○山田中 ○秋保中 ○明成高 ○仙台南高 ○蔵王高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの 研究)	○しらかし台小 (授業公開) H12・11・28 ○秋保中 (授業公開) H12・11・30 ○東長町小 (授業公開) H13・1・31	○小部会研修会 (データベース活用) H12・9・13 (大沢小) ○宮城県N I E 研修会 H12・10・4 (八木山小) ○宮城県NIE仙台地区 研修会 H12・11・6 (しらかし台小) ○宮城県NIE石巻地区研 修会 H12・11・8 (蛇田小)	○県研究集録12号 ○みやぎN I E だより 22・23・24・25号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 13 年 度		小 128 中 61 高 34 他 16 計 239	○大沢小 ○蛇田小 ○月見ヶ丘小 ○秋保中 ○塩竈一中 ○明成高 ○仙台向山高 ○蔵王高 ○仙台函南萩陵高	○小・中・高部会の 研究活動	○仙台向山高 (授業公開) H13・10・2 ○明成高 (授業公開) H13・12・12	○宮城県N I E研修会 H13・11・28 (明成高) ○宮城県NIE石巻地区研 修会 H13・11・5 (蛇田小) ○宮城県NIE仙台地区研 修会 H13・12・7 (塩竈一中)	○県研究集録13号 ○みやぎN I Eだより 26・27・28・29号
平成 14 年 度		小 129 中 62 高 34 他 14 計 239	○月見ヶ丘小 ○逢隈小 ○小野小 ○塩竈一中 ○将監中 ○筆甫中 ○東北朝鮮学校 ○仙台函南萩陵高 ○女川高	○小・中・高部会の 研究活動 (小部会「N I E おしゃべり広場」 H14・8・19 「インターネットの 活用」 H14・8・20 中・高部会 「公開講演会」 H14・12・3)		○宮城県N I E研修会 H14・11・7 (河北新報社) ○宮城県NIE仙台大河原 地区研修会 H14・11・28(逢隈小) ○宮城県NIE石巻古川地 区研修会 H15・1・24 (鳴瀬町中央公民館)	○県研究集録14号 ○みやぎN I Eだより 30・31・32・33号
平成 15 年 度		小 129 中 53 高 34 他 14 計 230	○小野小 ○逢隈小 ○嵯峨立小 ○将監中 ○筆甫中 ○五橋中 ○東北朝鮮学校 ○女川高 ○仙台白百合学 園中・高	○小・中・高部会の 研究活動		○宮城県N I E研究大会 H15・8・20 (青葉体育館) ○宮城県NIE大河原地区 研修会 H15・8・22 (逢隈小) ○宮城県NIE石巻・古川 地区研修会 H16・1・23 (鳴瀬町中央公民館)	○県研究集録15号 ○みやぎN I Eだより 34・35・36・37号
平成 16 年 度		小 124 中 57 高 31 他 11 計 223	○嵯峨立小 ○五橋中 ○仙台白百合学 園中・高 ○越河小 ○広瀨小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○五橋中 (授業公開) H16・11・2	○宮城県N I E研究大会 H16・11・2 (五橋中) ○宮城県NIE大河原地区 研修会 H16・8・20 (白石市中央公民館) ○宮城県NIE古川地区 研修会 H16・8・24 (田尻中)	○県研究集録16号 ○みやぎN I Eだより 38・39・40・41号
平成 17 年 度		小 123 中 54 高 28 他 12 計 217	○越河小 ○広瀨小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高 ○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○東北朝鮮学校	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動 ○小学校部会授業 研究 H18・2・10 (鹿野小)	○仙台白百合学 園中・高 (授業公開) H17・11・9	○宮城県N I E研究大会 H17・11・9 (仙台白百合学園) ○宮城県NIE古川地区 研修会 H17・8・23 (田尻中) ○宮城県NIE大河原地区 研修会 H17・8・24 (大河原中)	○県研究集録17号 ○みやぎN I Eだより 42・43・44・45号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 18 年 度		小 125 中 53 高 28 他 11 計 217	○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○東北朝鮮学校 ○本吉・大谷小 ○仙台・中田中 ○南中山中 ○大沢中 ○白石南中 ○唐桑中	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動 ○小学校部会授業研究 H18・12・6 (原町小)	○仙台市立南中山中学校 (授業公開) H18・11・9	○宮城県NIE研究大会 H18・11・9 (仙台市立南中山中) ○宮城県NIE本吉地区研修会 H18・8・3 (大谷小) ○宮城県NIE大河原地区研修会 H18・8・22 (大河原中)	○県研究集録18号 ○みやぎNIEだより 46・47・48・49号
平成 19 年 度		小 124 中 52 高 27 他 10 計 213	○本吉・大谷小 ○仙台・中田中 ○南中山中 ○大沢中 ○白石南中 ○唐桑中 ○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院 女子中・高	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立黒松小学校 (授業公開) H19・10・3	○宮城県NIE研究大会 H19・10・3 (仙台市立黒松小) ○宮城県NIE本吉地区研修会 H19・8・2 (大谷小) ○宮城県NIE大崎地区研修会 H19・8・23 (涌谷町立涌谷第一小)	○県研究集録19号 ○みやぎNIEだより 50・51・52・53号
平成 20 年 度		小 126 中 53 高 28 他 8 計 215	○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院 中・高 ○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○大沢中 (奨励校)	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立大沢中学校 (授業公開) H20・11・17 ○涌谷町立涌谷第一小学校 (授業公開) H21・1・22	○宮城県NIE研究大会 H20・11・17 (仙台市立大沢中) ○宮城県NIE仙台北地区研修会 H20・8・11 (富谷町立成田中) ○宮城県NIE仙台南地区研修会 H20・8・21 (亘理町立図書館)	○県研究集録20号 ○みやぎNIEだより 54・55・56・57号
平成 21 年 度		小 140 中 54 高 23 他 10 計 227	○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○涌谷一小 (奨励校)	○小・中・高部会特別研究部会の研究活動	○仙台市立榴岡小学校 (授業公開) H21.11.25 ○仙台市立旭丘小学校 (授業公開) H21.12.10	○宮城県NIE研究大会 H21.11.25 (仙台市立榴岡小) ○宮城県NIE地区研修会 H21.8.20 (石巻市立河南東中) ○小部会研究交流会 H21.12.10 (仙台市立旭丘小)	○県研究集録21号 ○みやぎNIEだより 58・59・60・61号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 22 年 度	宮教大加盟 高校長協会 加盟	小 121 中 50 高 18 大 4 他 12 計 205	○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○古川第三小 ○塩竈第三小 ○大河原小 ○高森中 ○仙台第一高 ○横山小 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	○仙台市立 南小泉中学校 (授業公開) H22. 11. 11 ○仙台市立 蒲町小学校 (授業公開) H22. 11. 26	○宮城県N I E 研究大会 H22. 11. 11 (仙台市若林区文化センター) ○宮城県NIE地区研修会 H22. 8. 18 (塩竈市立塩竈第三小) ○小部会研究交流会 H22. 11. 26 (仙台市立蒲町小)	○県研究集録22号 ○みやぎN I E だより 62・63・64・65・66号
平成 23 年 度	小学校国語 研究会加盟	小 120 中 50 高 17 大 4 他 14 計 205	○古川第三小 ○塩竈第三小 ○大河原小 ○高森中 ○仙台第一高 ○東宮城野小 ○小牛田小 ○台原中 ○八乙女中 ○東北学院 榴ヶ岡高 ○石巻北高 ○泉高 ○榴岡小 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	○仙台市立 榴岡小学校 (授業公開) H23. 10. 18 ○仙台市立 東宮城野小学校 (授業公開) H23. 12. 7 ○大河原町立 大河原小学校 (授業公開) H24. 1. 24 ○大崎市立 古川第三小学校 (授業公開) H24. 2. 23	○宮城県N I E 研究大会 H23. 12. 7 (仙台市立東宮城野小) ○宮城県NIE地区研修会 H23. 8. 17 (河北新報社)	○県研究集録23号 ○みやぎN I E だより 67・68・69・70号
平成 24 年 度	宮城県中学 校国語研究 会加盟	小 114 中 51 高 16 大 4 他 15 計 200	○東宮城野小 ○小牛田小 ○台原中 ○八乙女中 ○東北学院 榴ヶ岡高 ○石巻北高 ○泉高 ○北中山小 ○吉岡小 ○東郷小 ○古川東中 ○水産高 ○大河原小 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	○仙台市立 八乙女中学校 (授業公開) H24. 11. 9 ○美里町立 小牛田小学校 (授業公開) H24. 11. 28 ○仙台市立 北六番丁小学校 (授業公開) H25. 1. 16	○宮城県NIE研究大会 H24. 11. 9 (仙台市立八乙女中) ○宮城県NIE地区研修会 H24. 8. 20 (大和町立吉岡小) ○小部会研究交流会 H25. 1. 16 (仙台市立北六番丁小) ○公開実践発表会 (協力校) H25. 2. 15 (河北新報社)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H24. 9. 22 (河北新報社) ○県研究集録24号 ○みやぎNIEだより 71・72・73・74号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 25 年 度		小 111 中 46 高 17 大 5 他 12 計 191	○北中山小 ○吉岡小 ○東郷小 ○古川東中 ○宮城水産高 ○荒町小 ○古川二小 ○岩沼小 ○聖ウルスラ 学院英智小中 ○富沢中 ○東北学院高 ○小牛田小 (奨励校) ○八乙女中 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	○仙台市立 八乙女中学校 (自主公開) H25. 11. 8 ○美里町立 小牛田小学校 (自主公開) H25. 11. 14 ○登米市立 東郷小学校 (自主公開) H26. 2. 13	○宮城県NIE研究大会 H25. 11. 22 (仙台市立北中山小) ○宮城県NIE地区研修会 H25. 8. 20 (吉野作造記念館) ○小部会研究交流会 H26. 2. 25 (仙台市立郡山小) ○公開実践発表会 H26. 2. 20 (河北新報社)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H25. 9. 21 (岩手県一関市) ○県研究集録25号 ○みやぎNIEだより 75・76・77・78号
平成 26 年 度		小 115 中 49 高 19 大 5 他 14 計 202	○荒町小 ○古川二小 ○岩沼小 ○聖ウルスラ 学院英智小中 ○富沢中 ○東北学院高 ○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○仙台青陵中 ○多賀城高 ○吉岡小 (奨励校) ○東郷小 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動 ※小学校部会： 5年国語科の 提案授業実践	仙台市立 富沢中学校 (授業公開) H26. 11. 18	○宮城県NIE研究大会 H26. 11. 18 (仙台市立富沢中) ○宮城県NIE地区研修会 H26. 8. 18 (七ヶ浜国際村) ○小部会提案授業① H26. 6. 24 (仙台市立泉松陵小) ○小部会提案授業② H26. 6. 30 (仙台市立七北田小)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H26. 9. 20 (秋田魁新報社) ○実践報告集26号 ○みやぎNIEだより 79・80・81・82号 ○日本NIE学会 (12月：東北福祉大学)
平成 27 年 度		小 106 中 46 高 18 大 5 他 11 計 186	○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○仙台青陵中 ○多賀城高 ○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○宮城学院中 ○東北学院高 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 5年国語科の 提案授業実践 ・高校部会 新聞社見学 英語科授業実践 講演会の実施	○仙台市立 田子小学校 (授業公開) ○5年国語科 提案授業の 公開 (運営委員 在籍校) ○仙台青陵中等 教育学校の 実践発表会	○宮城県NIE研究大会 H27. 12. 2 (仙台市立田子小) ○宮城県NIE地区研修会 H27. 8. 18 (塩竈市立第一小) ○小部会提案授業公開 ※14校で実施 ○高部会実践発表会 H28. 1. 23	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H27. 10. 3 (北海道新聞社) ○実践報告集27号 ○みやぎNIEだより 83・84・85・86号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 28 年 度		小 98 中 41 高 20 大 5 他 6 計 170	○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○宮城学院中 ○船岡小 ○柴田小 ○気仙沼高 ○聖和学園高 ○仙台城南高	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 5年国語科の 提案授業実践 ・高校部会 新聞社見学 専門紙を学ぶ (河北新報社)	○宮城学院中の 実践報告 ○登米市立 上沼小学校の 授業公開 (5年) ○仙台城南高の I C T公開 (NIEとの関連)	○宮城県NIE研究大会 H28. 11. 9 (宮城学院中) ○宮城県NIE地区研修会 H28. 8. 24 (柴田町立柴田小) ○七北田小提案授業 H28. 6. 9 ○上沼小提案授業 H28. 6. 17	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H28. 9. 24 (福島民報社) ○実践報告集28号 ○みやぎNIEだより 87・88・89・90号
平成 29 年 度		小 87 中 39 高 19 大 5 他 11 計 161	○七北田小 ○宮城学院中 ○船岡小 ○柴田小 ○気仙沼高 ○聖和学園高 ○仙台城南高 ○豊里小 ○八木山小 ○豊里中 ○仙台三桜高	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」 の単元で一人一紙 を持たせ授業実践 (提供2688部) ・高校部会 論説委員による 講演会の実施 (河北新報社)	○仙台城南 高等学校 (授業公開) ○仙台城南高の I C T公開 (NIEとの関連)	○宮城県NIE研究大会 H29. 11. 8 (仙台城南高等学校) ○宮城県NIE地区研修会 H29. 8. 21 (登米市立豊里小・中)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H29. 9. 30 (山形新聞社) ○実践報告集29号 ○みやぎNIEだより 91・92・93・94号

Ⅷ 編集後記

「宮城県N I E委員会実践報告書第 29 号」をお届けいたします。ご多用の中、原稿執筆をお引き受けいただきました各学校の先生方、関係の皆様から心から感謝申し上げます。

本報告書は、あいさつ、実践指定校・各部会からの実践報告、研修会報告、研究組織等で構成されており、日々の実践に基づく大変読み応えのある内容となっております。

各実践指定校からの報告には、「新聞をどのように活用して、どのように学習を進めていったのか」具体的な事例が紹介されています。多くの学校に共通しているのは、まず新聞に触れ、記事を読む場面設定の工夫をしていることが挙げられます。コーナーを設置して掲示したり、朝活動で継続的に取り組んだり、「新聞に慣れ親しむ」ための、学校それぞれのアイデアがよく伝わってきました。さらにこれらの活動を委員会などを通じて、児童生徒が行っている事例もありました。また継続的に、「ことばの貯金箱」を行うことで、ことばに対する感性が高められている様子がわかります。

授業での活用については、ワークシートを用いて見出しをつけてみることや、記事内容の要約などを行い、自分の考えをメモするなどして、グループで討論することや、発表にうまくつなげられるように授業構成されていました。

小学校部会の報告にもありましたが、5年国語「新聞記事を読み比べよう」での「一人1部の新聞活用」においては、県内23校、2688部提供とのことで、今まさにN I E活用が注目されているとも言えます。

学校現場では、新学習指導要領の改訂に伴い「情報活用能力を高めるために、新聞を含む多様な資料を生かすこと」が明確に求められています。「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業改善も喫緊の課題となっています。

皆さんのお手元にある玉稿は、各学校実践での力強いナビゲータになるものと確信しており、今後さらにN I Eが深められ発展することを祈念し、編集後記といたします。

(仙台市立高砂小学校 青木 茂)

<編集委員>

委員長 青木 茂 (高砂小)
委員 秋場 文東 (松島一小)
木下 晴子 (高森中)
進藤 千枝 (長町中)
鈴木 理恵 (仙台城南高)

<事務局>

防災・ 武田 真一
教育室長 (河北新報社防災・教育室長)
事務局長 鈴木 淳
(河北新報社防災・教育部長)
事務局 佐々木可奈子
(河北新報社防災・教育室)
大槻 俊順
(河北新報社防災・教育室)
藤田 和彦
(河北新報社防災・教育室)
大泉 大介
(河北新報社防災・教育室)
飯坂 新
(宮城県N I E委員会コーディネーター)
主藤 綾
(河北新報社防災・教育室)
天野 路子
(河北新報社防災・教育室)
伊藤 純子
(河北新報社防災・教育室)

N I E実践報告書<第 29 号>

平成 30 年 3 月発行

編集 宮城県N I E推進委員会
発行 宮城県N I E委員会
事務局 宮城県N I E委員会事務局
仙台市青葉区五橋一丁目 2-28
(河北新報社内)
TEL. 022-211-1331
FAX. 022-211-1339
印刷 東北紙工株式会社
仙台市若林区中倉 1-13-1
TEL. 022-231-2141



Newspaper in Education